

木下太左郎
詩集

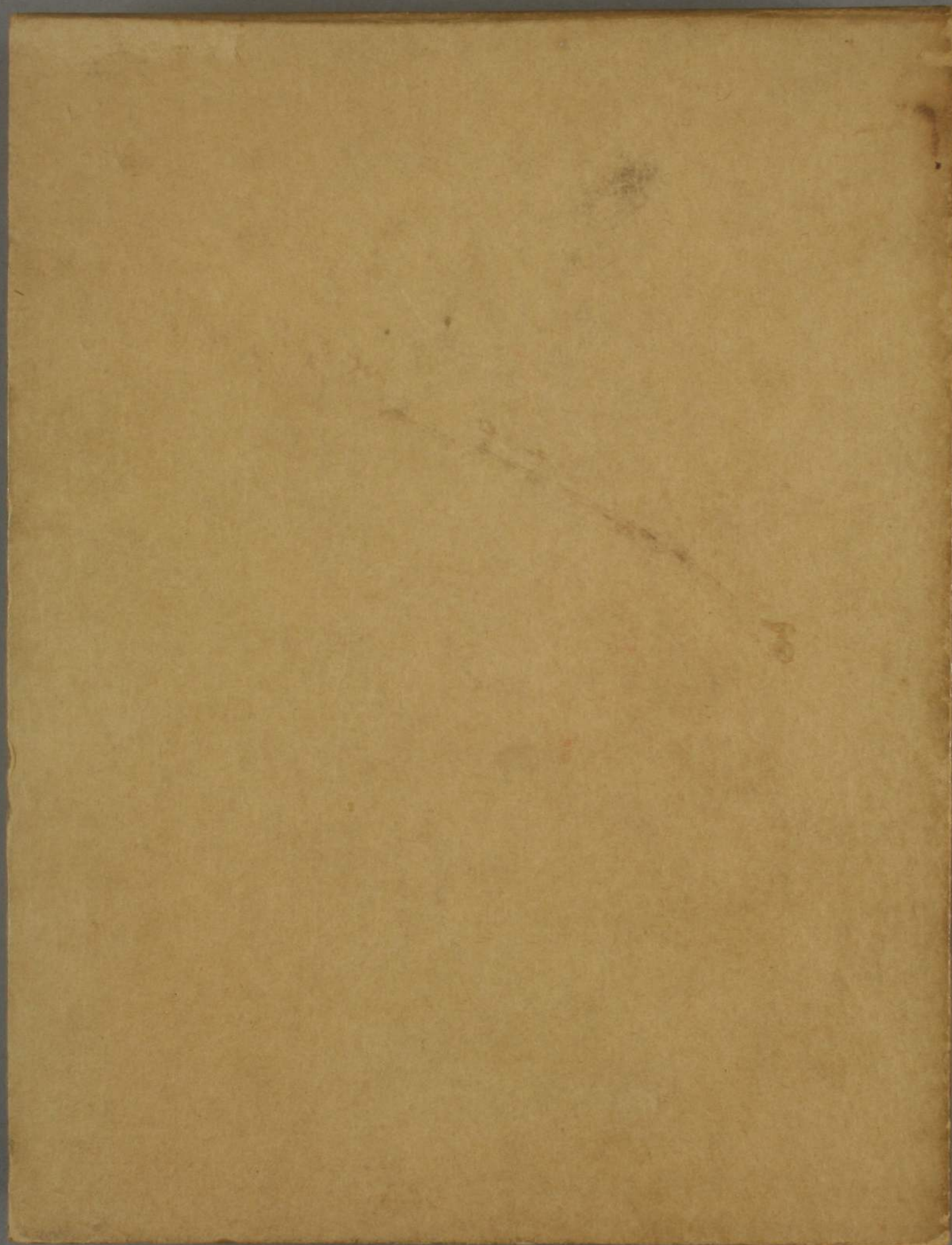


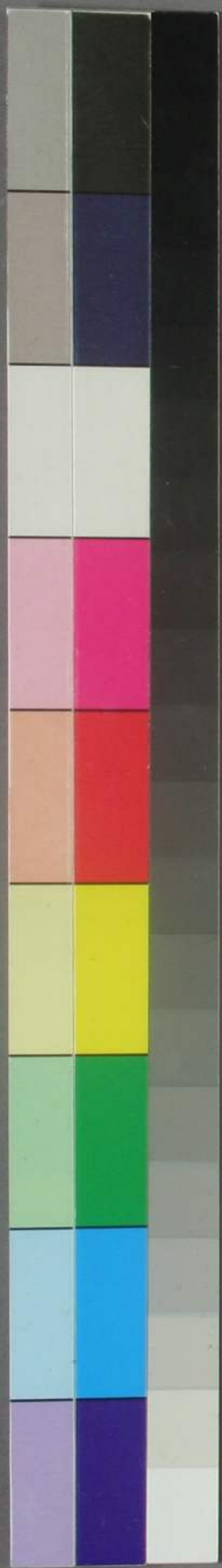
東京
第一書房

定價四圓十八錢

木下空太郎詩集

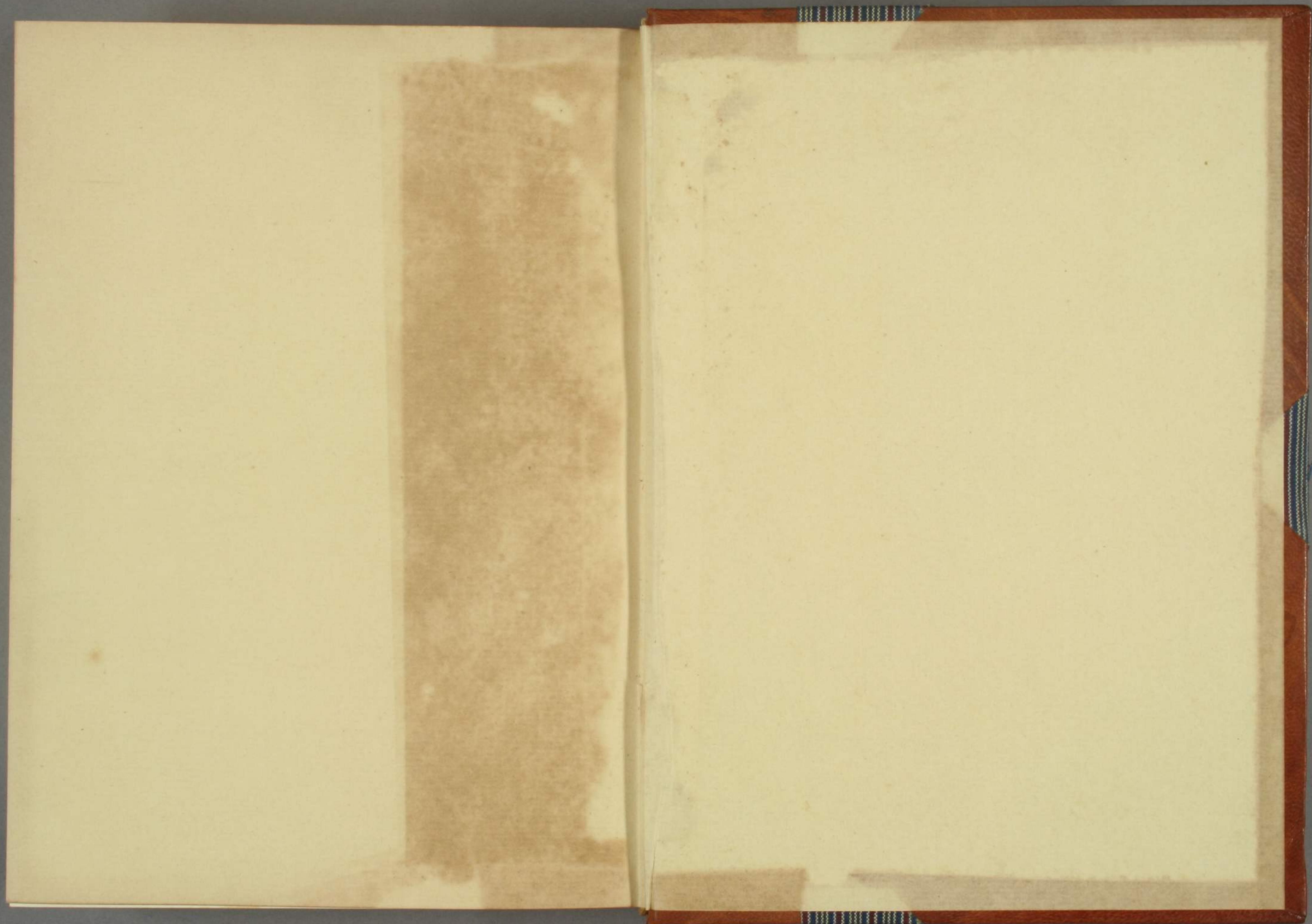
第一
刊書房
行

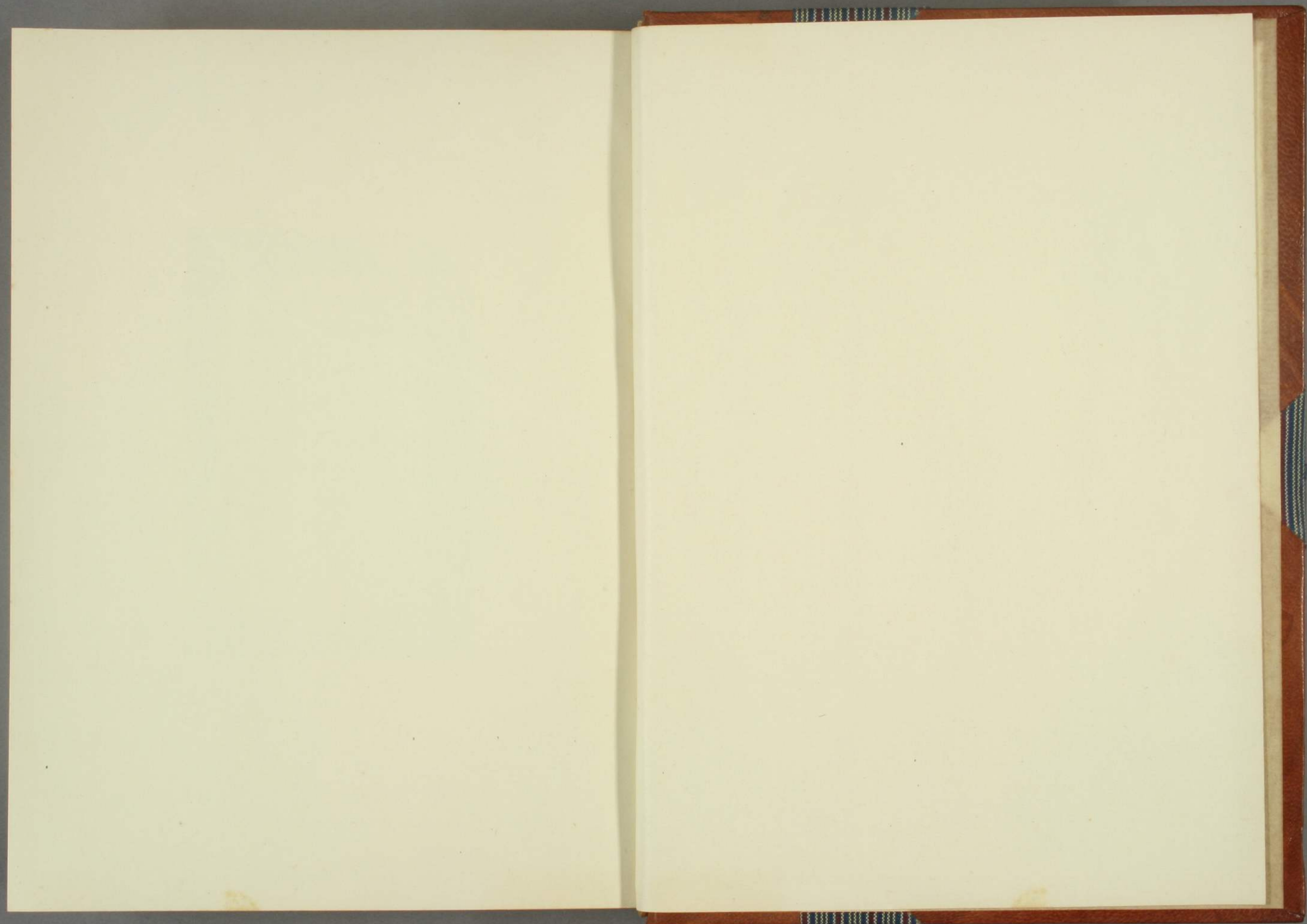




水木下
郎太
集詩







木下杢太郎詩集

郎太奎下木
集詩



京 東
房 書 一 第

序

神さまよ——若しどこかにお出でならば——守宮もりさそりにも形を賦したまへる御心をもて、この詩集の發刊をお許し下されまし。

わたくしは一介の科學者です——或一友の保證する所に據るとメヂオクルな——。それで詩に途方もない價值を與へたりするものではありません。蜘蛛が網を張り、珊瑚の

蟲が巢を組むに比べては、ずつと實用性に乏しいものです。が、春の軒に叫ぶ猫、夏の田に鳴く蛙の聲には、やや似た、しかも更に複雑なのが——他は知らずわが詩、わが歌なのです。いつ作つたか知らぬうちに、数だけは随分多くなつてゐました。

第一書房の主人が、何の見る所あつてか、しきりにわが詩の集の出板を慫慂するので、人に頼み、いろいろの古雑誌から蒐めてもらひ、年代の順を追うて編纂して見ました。實は今は出板の時としては甚だ適當ではありません。人の一生に取つては、十年前、十五年前の事物は、たとひ身から出たものでも半ば他のものであります。懐かしく思ふ詞曲

の間に、いやに思ふものも雜つてゐます。十數年前『綠金暮春調』の名のもとにその一部をまとめようと考へた時には、その編輯の工合、製本の體裁、挿入の繪畫などにもいろいろと工夫があり、計畫がありました。今はただ博物館員の心持で、冷い硝子戸のうちに分類整頓するだけです。唯大正八年中、この集のうちの一部分を公刊して『食後の歌』と名付けたことがあります。その時長い自序を作り、又友人北原白秋君の序文を請ひ受けました。それを今再録することにより、これ等歌詞製作の時代の自分の、又社會の心持を幾分明にすることが出來ると思ひます。

この剥製の守宮蠍^{ツモリコウソウ}めく詩どもの爲めに再び日の目を見せる機会をあたらへられた第一書房主人に厚く御禮を申し上げます。

昭和四年秋日

作者識

詩集「食後の歌」の序

世に奇異なるは『南蠻寺門前』『ドウバンの首』『硝子問屋』の作者、而して『緑金暮春調』『食後の歌』の詩人、わが友木下奎太郎の若き日の行狀であつた。

彼は彼の身邊を修飾するに一見質實にして訥朴な黒鍔廣帽子に黒の背廣とを以てしたに過ぎなかつた。時としてはまた黒に金釦の大學學生の制服さへ著けて拮据としてゐた。彼は常に陰愁に満ち、氣六つかしく、潔癖にして謹直、また倏ちに顔を赤める處女の恥羞をさへ感ぜしめた。

*

彼の服裝はかくのごとく黒く、而も亦訥朴ではあつたが、彼の腦漿は全く三角稜の多彩、彼自ら謂ふ所の萬華鏡の複雜光で變幻極りなかつた。聲色香味觸、是等悦喜す可き官感の種種相に於て、彼は全く初めて碧眼紅毛の邪宗僧を迎へた長崎青年のそれらの如く、時としてはまた初めて此の浮世繪の日本に面接した泰西人のそれらの如く、事毎に驚異し、瞠目し、仰視し、鑑賞し、遂には彼自らをその恍惚無礙の極樂世界に魔睡せむとさへ欲するに到つた。

然しながら、茲に考ふべきは彼は此く魔睡し陶酔せむと欲したにかかはらず、彼は彼自身を遂にはその沈湎の底に見出さればならなかつたほどの其の官感の幻法から、不思議にも自ら惑亂せられない聰明と理義との保持者であつた。彼はこれら鴆毒の耽美者發見者ではあつたが、彼自らを決してその鴆毒の爲めに殺す癡愚と溺没とを敢て爲なかつた。おお、此の七彩陸離

たる不可思議國の風光の中に在つて、常に默黙として手に太き洋杖を握りつつ徘徊する長身黒服の異相者、彼木下奎太郎の澁面を看よ。

無論、彼にはその幼時よりかの不可思議國に對する熱烈なる思慕と憧憬とがあつた。彼は常にその發見者としてその熱意と歡喜と矜驕とを以て、絶えず探索し渉獵した。かくして彼はただ轉轉として彷徨し漫歩した。時によりては調子はづれの焦燥と亢奮とが、決して彼をその一點に執念く佇立させては置かなかつたほど。だが、かかる刹那に於てすらも、彼内面の眞實はまた絶えず暗い寂しい人面痘の如く彼が肉身について離れなかつたのである。

彼は種種の舶來品——それは珍奇なる多種多様のエチケット、

南蠻の異聞、ギヤマン、香料、異酒、奇鳥、更紗の類——を吾徒の間に齎らした。のみならず、彼はまた絶えずその特殊な紅毛舶來の感覺を以て、新様の日本、油繪の江戸、銅版の長崎、メヅサの小土佐、薄荷酒中の鎗さび、西班牙外套の花の昇菊を發見し諦聽した。あまつさへ彼は、清親の錦繪の中に所謂文明開化のモンマルトルの酒舗を漁り、紅提灯と紙の櫻のかげに、かの阿蘭陀のラベイカ彈きの如く、椅子の上にロチの女を乗せ、而してしみじみと夜の三味線を爪ぐらせた。

彼は比類稀な詩境の發見者であつた。だが惜しい事にはあまりにその効果を整理爲ようとしなかつた。彼の逐次の新發見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。だが彼はただ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に勿體ない程複雑は複雑の儘に、美は美のままに、ただ燦燦爛爛と取り散らされてあつた。

たとへて云へば、彼は驕奢と眩耀とに燃え狂つた珍草奇木の間を、金弧を描く一羽の斑猫光の如く、それからそれへと花粉にまみれてまた未見の新世界へと飛び去つて了ふのであつた。だが、彼が佛蘭西近代詩苑に於ける鬼オラムホオの如き驚くべき官感的發見者であり、同じくその収集家で無かつたとしても、それは却て彼の詩人としての獨自性優越性を證左するものに外ならぬ。

*

再び云ふ。世にも奇異なるはわが友木下杢太郎の若き日の行跡であつた。彼はまことに極秘境の憧憬者であり、最も進むだ美の探検者ではあつたが、遂に彼自身は邪宗の法皇に八年の長日月を奉仕して遂に清淨な個の童貞として老いて行つた。かの伊東ドン・マンシオの如く、結局謹嚴な淨身の童貞として、彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。

*
麗明にして柑子實る異國趣味の海港に生れ、泰西文明の教養と官感とを修練し來つた彼が如き青年と、もともと長崎の近海に生れ、かの阿蘭陀藝術の餘香に直接薰染して育つた邪宗系のトンカジョン予が如きとが、その當時一見して共鳴し感激し歡喜し合つた事は當然であつた。予等は無論互に刺激し合ひ、影響し合ひ、熱狂し合つた。

予等が狂飈時代はかくして豪華であつた。PANの盛宴はかくしてその驕奢の絶頂に達した。

*

彼が詩の本領は主として『綠金暮春調』に於て見る可きである。然しながら、彼の小吟竹枝の類に於ても彼が特性は燦然としてその餘光を放つてゐる。殊に此の卷末の「よるよるは」夜ふけには」の數章の如き、恐らく『松の葉』以來の名吟であらう。而も

彼が各種の詩に於て未だ見ぬ、單純化の妙味は、遂に複雑の複雑に了らぬ彼の今後の詩境を暗示して餘ある。

彼、わが友、木下杢太郎、健在なりや。

大正八年十月

相州木兎の家にて

北 原 白 秋

詩集「食後の歌」の自序

今予は此小冊子を刊行しようとして、心に慚ぢて躊躇する。
予がわかき日の酔はもう全く醒めてしまつて、その時の歌には
唯空虚な騷擾の迹と、放逸な饒舌の響とが残つてゐるのみであ
るのを知るからである。その歡喜も、その悲愁も、殆どただ心の
外膜に洶き現はれ波紋を描き響を立て、亂れ、またちりぢりに散
り失せたる、氣まぐれな情緒に過ぎないし、その格調にしても――
さう云ふ内容を、その時の場あたりの調子と言葉とで寫したも
のゆゑに――今から顧みて顔を擧めるほどの鄙わづらさがある。
ああ、ああ、過去と云ふものの、外看上豊富であつた蓄積は一體

どこに消えて行つてしまつたのか。幕が締まる。音楽が止む。
——そして今までの緊張とは裏はらに、頓と馬鹿らしいと云つたやうな、軽い腹立しさが心に残る。過去は畢竟幕の締まつた舞臺だ。あんまり弄らないで、無くなるものなら無くならしてしまふが可い。

と云つたわけで、此原稿も、ちやんと整理してから、三四年も打つちやつて置いた。それでもまだ整理に著手した當座には、九月末の雑草の花めく、それらの一つ一つに、愛執の心の繋がつて居ないのでもなかつた。わかれて一年とはならぬ人の記憶ほどこに。

さてさて此集に収めた詩の中には、其製作年代の最も早きに遇れば、とうに十年の昔になつたものもある。その時分の心が今ほど硬ばり、しやちこ張つて居らなかつたつてことは分り切つて居る。

初めて此集の整理に取り掛つた時でさへ、それは詳しく言へば千九百十五年のことであるが、もう幾分自分の心臓に石灰かなんぞが溜つたことは自覺せられた。その時は本郷は四片町と云ふものの、唐橋下の溝のそばの家の二階にせせこましく、ごろごろと煙ぶつて居たのであるが——ほんとに煙ると云ふのは誇張の修辭ではない、隣に銅像かなどを造る家があつて、時時は夜、藁を燃やして、その煙が壁の隙間を這入つて、予を煙攻めにした。予は冬の寒い晩でも、さう云ふ時には、雨戸をすつかり明け放つて、ぶつぶつ言ひながら噓をした——然しそれでも窓から見ゆる隣の鳥屋の庭は廣く、溝に沿うて葡萄棚があり、夏初めの三更の月が、その一つ一つの房に水銀を流したりなんぞすることもある。またわが室の破れ硝子に地圖でのやうな川を畫きもした。

「月かげは窓のがらすの一つの罅をさへきらきりと銀色に光

らせた。故もなく湧き出でたる今宵の悲哀は、過ぎし日の、雑草の花に似る薄情をも、いとどいとしきものに思はせた。」

とさう予はその時、過去を傷む心をもて、一片の小さい紙の上に書き散した。

お釋迦さまの弟子たちなら、また孔子様の信者たちとしても、かう云ふ根もない情動の泉に浸ることを、飛んだ邪見として輕じもするだらう。それを反省もしないで、何か香料か、旨い味のやうに、ひたすらに弄ぶ人なば、卑しきものすらだらう。予とても亦それは知つてゐる。だが佳い土耳其の葉の紙巻を喫んだあとに、人さし指に残るやさしい臭を懐しむことを知る人もあつて欲しい。歇斯的里亞の素質をもつて、鬱陶しい青年期を送つた経験のある人でなければ、世の中のこんな亞爾可兒劑の眞味を解することが出来ぬ。

予が「食後の歌」の如きは、孰れもこの種の、やや有害な、然しさし

たる毒もない、寤睡藥の類である。

千九百十年は我我の最も得意の時代であつた。「パンの會」は毎週開かれた。我我は BODIN の銅像の首の脰に寄せた皺の精さが何う云ふ情を藏くしてゐるかが分るほどになつた。また亞刺比亞物語や、近松、三馬などに出て来る青年の心に同情を寄するほどの苦勞も覺えた頃である。毎日同じ仲間と交游して、作詩し、作劇して日を暮した。予は劇の形式を以て印度の太子の心に洵いた、解け難き苦患を訴ふると同時に、小さい歌曲を以て、如何に東京の五月の美しく、舶來の酒の香しきかを歌つた。

「屋上庭園」第二號の發賣禁止を食つたのも此年である。

そのころ日本橋も小網町のほとりに鴻の巣と云ふ酒場が出来た。まづまづ東京最初の CAFE と云つても可い家で、(尤も主人はバア、キャフェなどと呼ぶるるを厭うて、その菜單には MAISON KÔNOSTU などと刷らせた。)その若い主人は江州者ながら、

西洋にも渡り、世間が廣く、道樂氣もある氣さくな亭主であつた。亭主は CONQUEVILLE の流入ならぬ我我にも如何に CURAÇAO の精神を快活にし、如何に ^{QIN} の人の心を激怒せしむるかを教へた上に、「まづ酒杯の形にもいろいろあります。それを一つお目に掛けませう」と云つて小さいのは該里の、これは紅葡萄酒杯、これは白葡萄酒杯と、一つ一つ手に舉げて、無足杯、鷄尾杯、璃球兒杯の數敷を示説した。それは冬の夜のことで、華奢な火爐には緑色のえなめるの花が光り、外は外として東京の河岸らしい響のする中に、昔の浦里時次郎を物語る夜樂の通らうといふ時であつた。そこで予は乃ち立るに一曲を作つて主人に贈つた。

「冬の夜の燠爐の

湯のたぎる静けさ……」

に始まる該里酒の歌がそれである。

それからとりどりに「金粉酒」「菊正宗(兩國)」「薄荷酒」等を作つた。

油繪で複寫した江戸錦繪のやうな、PIERRE LOTI の CHRYSANTHEME のやうな、さう云ふ不純な氣分を愛する予は、寄席のかへり、芝居のかへり、また常磐木俱樂部、植木店のかへりみちに、この種の異香の酒を嘗めて、かの卑しい、然し涙に満ちた、江戸平民藝術の聯想に耽ることを楽しみにした。

その時分の予の頭はまるで萬華鏡のやうに、ごたごたしてゐた。乃至は秋の午後の雜草園の如く、鬱蒼として錯雜してゐた。予は「道」に親まず、「學」に離れ、全く精神上の浪費者であつた。

紅玻璃燈の下に、重く光る液體を充したる小高脚杯を前に置いて、予は予の前の中に擾亂する亞刺比亞夜話の復活を諦視した。その中には鯉の切身を持つて立つ大屋、中央亞細亞の庫車から出たと云ふ塑像の佛頭傳問答師作の阿修羅の首、乃至それよりも美しい豐竹昇菊の頬の輪郭、中村兒太郎の外郎賣、松尾のどんつく、小登良の鎗さび、古渡更紗のすれすれの唐艸、また植古

聿、杏仁の實の味などが、歌の如く、螢の如く、初夏の霞の如く、山羊の叫喚の如く、汽船の跡に残る白浪の如く、洶湧し、卷舒し回轉し、出沒して狂奔した。

さう云ふ怠惰の生活の心に投げた悲哀は、凡て是れ「食後の歌」の基本情調である。年代は忘れもしない、千九百十年十一月乃至十二年のころである。

*

「町の小唄」はそれよりも少し早いころ、と云つてもまづ千九百十年ごろの戯作である。まだ日のあるうちから、まるで八月の雑草の中の落花生の花のやうに、青い夕方の雰圍氣の中にほのぼのと黄ろく光り出す永代橋の瓦斯燈にしても、また赤い斜日を浴びながら河岸通りを流して通る藥屋の歌にしても、凡て東京の——下町の色音響は、孰れも不可思議の情緒に染まつて居る。寫生帖を携へて、中野の原や田端になんぞには向はずに、小

網町、深川の河岸河岸を歩き廻つた、まだうら若かつた頃の作者には、紅い煉瓦の官廳や、びかびか眞鍮の光る銀行のかげに、歌澤や、新内の「惡の華」が、そんなにも萎れないで咲いてゐるのを見るのが、この上もない興味であつた。大學の教授たちが、黒のフロツクコオトで孔子誕生祭をする。紋付袴に山高しやつぽを被つたもある。そして戸の外は新内が流してゆく。予はこんな變てこな對照で混雜してゐる時代を、假に「不可思議國」とは名付けた。無論輕蔑の意味なんぞは少しもないのである。ちやうど、《SERRES CHAUDES》の中の不思議な詩句を興がると同じ心持だ。當時どこへ行つても東京は普請中で、眼鏡橋の下からは、律動的に、ぼつぼつと、白煙が、すさまじい勢で煙突から昇つてゐた。

さう云ふ情緒も又無論同時の詩的氣稟から見逃されてはゐなかつた。新に西洋から歸つた洋畫家の中には、まだ人の瞳が

青く見える習慣のままで、お酌の踊を畫かうとするのもあつたが、我我はその中でも、蒲原有明氏の「朝なり」から大なる感激を受けた。無論そんなしやれた心持は少しも分らないで、子どものおしめの心配や、下宿屋での月末の苦勞を記述する、牛込邊の文士團體もあるにはあつたが、然し一方にはまだ聞いたこともない D. BUSBY を評論する、出過ぎた批評家もあつたのである。

街頭の張札を愛し、料理屋の色紙の印刷を愛し、モンマルトル畫家の漫畫を愛し、隆達、弄齋、竹枝、山歌を愛するを知つた予が、いつな一番小唄でやらうと考へたのは悪い思ひ付きであつた。當時小傳馬町の廣重、清親ばりの商家のまん中に、異様な對照をなして「三州屋」と云ふ西洋料理屋があつたが、是れは我我の「展」の會を催した會場であつた。その頃椅子に腰をかけて三味線をひいた五郎丸、ひさ菊、お松、さんなどいつた女たちは、今はどこにどう四散してゐることやら。

それから後は、大河の朝暮の眺めを自由にすることが出来るといふわけから、深川は永代橋の畔の「永代亭」と云ふ汚い西洋料理屋を俱樂部の代用にした。ルンブと云ふわかい毛唐が、下士の正装をして、獨乙各地の方言の聲色を使つたりなどした。川一つ向うには小さな鳥屋があつて（今はなかなか小さくもあるまいが）、頗に刀痕のある酒好きのおかみがしばしば我我の爲めに儲けぬきの實價で晩食を提供した。兎角わかいと云ふことは、世の中を面白くさせるものであつた。わが「町の小唄」はそんな巷から材料を搜した。

東京街頭の風景を歌ふものも、亦同じ態度から發してゐる。

*

ここに集めたる「竹枝」のことに就ては餘り多くは言ふまい。兎角擬古は氣障になる。自分では得意でも他の人は顔を顰める。だが、多くの物好きの人のやうに予も亦昔からの小唄の言

葉、心持には甚だ深い愛執を持つてゐる。「松の葉」の縫箔もよごれたる帙の中から古い板本を取り出してその蟲の食つた面を翻せば、百年の小曲の一つ一つに、わりなくも涙が流れる。で一時は——やはり千九百十一年、十二年のころだが——我我の仲間はそのれらの形式から強い影響を受けた。誰でもあのいかにも下町の老人らしい歌澤龍美太夫の口から出るいなせな「一こゑ」の中の「女ごころはさうちやない」の「ぢや」の發音の藏する神秘不可思議にして百年の痴情をにじましたる蘊蓄を驚歎するものは、古からうが新しからうが、善からうが、惡からうが、日本歌曲のかう云ふ形式を珍重しないでは居られはしない。

「敍情小吟」も亦や「竹枝」に似るものであるが、無論それがデカダンの傾向であるのは作者も知つてゐる。何なら飛ばして讀んで貰つて差支ない。

*

——千九百十一年のころである。予は自分の職業と、自分の周囲とを厭ふ心に日に夜に苛まれたことがあつた。偶々獨乙の東洋美術研究家の——まだわかいGといふ學者が夫婦で日本へ來た。予は彼等に昵むにつけ、或る夜、自分が單身で歐羅巴に渡つて、その土地に有り附くことは出來ないものだらうかと相談をかけて見た。

「さうですれえ」とその人は考へぶかく口をつぐんだ。

夫人は正直にそれは到底駄目だと率直に答へた。だが一度歸國してから返事はしようと云つた。それからまた年が経つて、劇道に關係のある一獨乙人が來た。彼は曰つた。LEIPZIGの東洋歴史の教授Lは日本人の助手を要するから、或は何か出來るかも知れないと。予は待つともなく彼等の返事を待つた。病院で宿直して、どうしても眠れない夜などには、また起き出して横文字の手紙を書いて見たりなどした。

「いくたびか、海のあなたの
遠人に文書かむと思ひ、

いくたびか、海のあなたの

遠國に去らむと思ふ。

今宵また宿直の室に。」

ああ、自分も嘗ては悩んだ。今更にああ云ふ時もあつたと追懐する。

今や戦争が始まつて五年になる。而して彼等は今果して何處に居ることぞや。L教授の死んだことだけは、予は數年前、東京の新聞で知つた。

*

FRITZ RUMPE も亦獨乙の青年である。彼自らはルンプ・ブリツツと書いた。また支那音で「龍普」とも書いた。千九百九年の頃であつたか、初めて日本へ渡つて來、その後一年間青島で兵役

に就て、それが濟んでからまた日本に來た。伊上凡骨の、最も怠惰なる弟子であつたが、其盡く風俗畫はなかなか面白かつた。彼は皮肉でなかつた。それ故其當時の、人のわるい多くの日本の友だちの前に沈黙してゐた予も彼には、何でもかんでも話すことが出來た。我等は互に爾汝を以て相呼んだ。一緒に寄席にゆき、一しよに麥酒を飲んだ。予の彼に贈つた「麥酒の歌」は、今どこを搜しても原稿が見つからない。それでも彼の名を此序文から除くことは忍びない。「麥酒の歌」の未定稿の鉛筆でべけを食つたところのみが、今や斷篇として残つてゐるばかりである。

「雨あとの濡れた柳の

陰の燈の緑色の寂しいことよ。

予は窓より市街の一角を眺めて、

厚い麥酒の杯を口にするとき
ふと心に浮ぶ。異國なるわが友 FRITZ RUMPF.

薄明の如きその回想の世界は
また夜であつた。雨が降つてた。彼の
大きな西班牙外套に兩つの體を入れて
燈の明き寄席を出て暗い道を歩いた。

故しらす予等の心は激してゐた。

美に對するこがれと、

世に對するうらみと、

多分さうであつた、心の源は。

(RUMPFどこかで酒を飲まう。) 予は曰つた、

(いいです、いいです。それ可いです。) 彼は答へた。

(給仕、麥酒だ。) と、予等はどなつた、

或る小さい料理屋の卓につくや否や。

れむたげなる給仕は會計臺から立ち、

その時も亦二つの大杯を運んで來た。

(RUMPFお前は異國の男だ、

然し RUMPFお前は熱くおれ達の心が分る。

それは『青年』に國籍がないからだ。

RUMPFまづ飲め、そして當てて見る、

何が一體この俺を近來こんなに惱ますかな。)

彼れ RUMPFは怪しく笑つた。

そしてその赤い顔に麥酒の大杯を運んだ。……」

壊れた活動寫眞のふい、むのやうに、わが「夢酒の歌」の未完稿は此で終つてゐる。その後どれだけ長かつたか今は覚えてゐない。作詩の年號さへ、今はほとんど分らないのである。

*

予の詩作は明治四十年、西曆千九百七年に始まる。初めて新詩社諸秀才の驥尾に附して、その高作を見るに及び、予は予の感情に對して新しい表現の窓を作るを識つたのである。今は手許に何等参考の書がないから之を詳記することが出来ない。が、長田秀雄が屍體の海底に沈むを敘せるもの、平野萬里が酒の醸造を歌へるもの及び北原白秋の縹渺たる小曲の諸篇から多大の刺激を受けたことを覚えてゐる。予は初めて「椎古事」の歌を作つた。予は之を淨書して、心臓の鼓動を忍びつつ、之を與謝野寛氏の許に送つた。翌年予は與謝野氏、平野、吉井、北原の諸兄と九州南部を旅行して、一種古風の異國趣味に多大の詩的感激

を得ると同時に、容易く詩作する秘傳をもわが同行から偷んだのである。諸君が九州の港の魚屋の店頭に吊られたる章魚の足、または田舎町の理髮屋の、途方もなく大きな赤團扇から旅の即興を作るのはお手のものであつた。ああ、詩はこんなにも樂と作れるものだと思へた。それからしやにむに詩作した。然し此期の作、殊に長崎、南蠻情調を歌へるものは、本集には收めない。他日若し「綠金暮春調」が刊行せられるやうなこともあつたら、是等の舊作も再び目の目を見ることがあらう。

そして千九百八年九年十年の間は、予の文學的努力の大部分は詩作であつた。十一年以後は、他の形式の表現に最も多くの力を注ぐと共に、詩作は概して専ら市井の氣分に沈溺することに轉向した。

初め予の著書を刊行するや、その逐年の叢書たるべきを豫想して之に「地下一尺集」の名稱を與へた。此名は唯地下一尺の不

思議だに、幾分子の之に觸るるを得ば本懐なりと思惟したのに
原く。而してその第一集こそは、實に上述の「綠金暮春調」である
べき筈であつた。が、予の疎懶なる屢此書の刊行の機を失ひ、今
日に至つて初めて地下一尺集の第五集として此「食後の歌」を公
刊するを得るに至つたのである。固より事の此に到つたのは
偏にアラヤギ同人、齋藤茂吉君、島木赤彦君、及び光風館主、四海多
實三君の多大なる同情の資である。予の衷心感謝に堪へざる
所である。而して既に説く所に明かなるが如く此に収集した
るは主として竹枝、小唄に類する小曲である。
で、予はまた已むを得ず初めの計畫を變じて、「綠金暮春調」の代
りに此集を當時新詩社の先輩諸兄また「パンの會」の諸友に獻す
るのである。

*

前に記したるが如く、予は數年前、此集の整理を思ひ、立つたこ

る既に「時」の經過に對する哀愁の情を感じた。で或る時はまた
かう書き記したことがあつた。

「時といふもの程はかないものはない。この偉大なる事實を
記するが爲めに、人は各種の空間的符號を用ゐる。だが若し人
が過ぎ去つた「時」に再び觸れたいと思ひながら、その時の空間的
記念を尋ねると、大かたは昔の形は残つてはゐない。――

「さう云ふ悲哀に搏たれながら、予は靜かに或る繁錯な巷の裡
に改築せられたる旗亭の露臺に、涼しい夏の夜のことである、一
杯の赤葡萄酒を飲んだ。」

また予は懷舊の悲歌を作つた。その一節は次のやうである。

「ああ、あの時」は既に過去圈内に入れり。

空氣は濃くおぼろかにして、

過去の薄明は遠し、

その時の人人の顔さへ、今は定かには見えす。

メヂユウズよ、メヂユウズよ、唄歌ふメヂユウズよ。
かく汝が名を呼ぶとき、兩手を高く擧げ、
越しかたの幻覺に見いれる人の姿は見ゆれども……

酔ひしれて肩車組み

夜半の道を馳りたる「從五位」はた健なりや。

紫の唇持ちし詩人は如何に。

異國の濃き放蕩のこころ解せし

飴色の異人はた今いづくに在るぞや。……」

だが予がさう云ふ病的な「回想の悲哀」に耽つた時から、時は容赦なく過ぎ去つて、更に三五年の星霜を閲した。

で、予が一昨年、職を支那も朔方の瀋陽の地に得て胡砂を浴び、胡笳を聴くやうになつて、今までの感情的雰圍氣から全く遠離した時でさへも、またあの耳鳴りといふもののやうに、折折は昔

の夢が戻つて來ることもあつた。

その年の秋の或る日、予は吉林省に旅行した。縣城外の或る田舎で地名を尋れたら、とんかと云ふ返事であつた。然しその如何の文字であるかは遂に知ることが出來なかつた。史記の匈奴傳をも想ひ出させるやうな、蕭索たる荒蕪の平野の暮色を眺めてゐると、不思議にも耳許に一種の曲調の幻覺を感じた。是れは曠昔の夜、松聲會に於て人の歌ふを聴いたる小曲の一節であつた。予は覺束なくも其幻覺を追つて自ら之を歌へば、故國の情の切切として洶湧するのをおぼえた。

「吉林省、吉林縣

吉林城外のとんか屯、

夕闇の原中に立つて薄墨の歌をうたへば、

薄墨の歌をうたへば涙ながる。」

歸來予はこの卽興を竹柏園のあるじの博士に書き送つた。

だがその後は予も漸く滿洲に慣れた。もう西域傳を讀んでも黃鵠の歌などに徘徊しなくなつた。そして渡滿以來は殆ど敍情詩の製作をも廢した。唯去年の秋だけは、滿月の日の宵月が餘りに良かつたもので、つひつひ心を動かされた。用事あつて城内へ往つての歸りに、わざわざ廻り道をさせて、北陵へゆくと途中の野原に出て、この廣大なる景色の上に出た中秋の月を楽しみつつ、ふと自らの心の限りなく寂しきを省みて、「待てしばし」と云つて馬車を停めた。

「待てしばし、」

今宵は中秋滿月、

夕闇のうちから月が出てゐる

瀋陽の邊門の外、

貧しい家からも樂の音が聞える、

等一會！馬夫、馬を停める、

おれは忘れものをした——何か落した。

だがそれは前の辻ではないぞ。

もつと前だ、前だ、……どつか心の隅だ。

——何時であつたか、

おれは何か思つて、それを忘れて、

今までうち捨てておいたことがあつたが……。

生活のまじめさ、つらさ——

いつか心も老いて——さうだ、その事だ——忘れてしまつた。

今支那も朔北の果、

瀋陽の城の歸るさ、

ふと十五夜の笛にそそられ、

さうだ、思ひ出した。さうだ、その事だ。

車を停めて何になる。
去！馬夫。歸つても可いんだ。」

*

予は嘗つてこれまで書いて、接穂を失つてそのままにうち捨てておいた。それでも氣がかりになるからこの春、京津から、汴洛龍門の方を旅行する時も一緒に持つて行つた。安徽省の徐州に一宿した晩は、隙もあり、退屈でもあつたから、この序の終末を附ける積りであつたが、客棧の中院に呼んだ歌女の胡弓の音にくつたくして到頭またうち捨ててしまつた。無論洛陽の汚ない客舎で繢稿を書く氣は出なかつた。

それで今度この八月、所用あつて東京に来るときも、またまた之を行李中に收めた。何處かの宿屋で閑のある時に急いで書き終へ、すぐ島木赤彦君の手に渡さうと思つたからである。

今、午前、予は停車場ホテルの窓から、初秋の空氣遠近法を見せ

たる、繁錯なる市街の屋根の海を眺めてゐる。そして獨りで腹立しく叫んだ。何だつて二年前と今と、こんなに萬事が變つてゐるんだいと。二年前の東京は少くとも予に取つて、こんなに殺風景で、冷淡な處ではなかつた。今唯旅舎の窓から、その横顔を窺き込んだだけでは、大阪も京都も變りはいしない。否、否、北京飯店の三階の窓から、前の通りを眺めた時の氣持とも變りはいない。和辻は予のことをひどくコスモポリット臭くなつたと言つた。どうもこんな筈ぢやなかつたんだ。

で今更こんな詩集を出すのはいよいよ詰まらないことに感じられる。が約束した以上は、唯早くこの序文さへ書き終ればそれで片がつくのだから、我慢しよう。

「だが」とちよつと予は反省する。「だが然し、予は尙ほ或る執著を有する過去を持つてゐる。」どうもこれが予の本音であるらしい。それでやはり「過去」の記念をかう纏つた本にすることに

異常の喜悦を覚える。

大正七年九月四日早朝、東京停
車場ホテル七十一號室に於て

作者識す

木下奎太郎詩集目錄

天草組

(明治四十年)

はためき	六五
高札	六六
黒船	六八
長崎ぶり	七〇
あこがれ	七二
黒日	七八
棧留稿	八〇

秋風抄

(明治四十年)

あまぐさ	八二
巴爾袞摩	八四
波羅葦増	八六
そへぶみ	八九
植古聿	九〇
秋風	九二
殘照	九四
暹羅染	九六
夕やけの歌	一〇一
諸音	一〇二
うつたへ並序	一〇四
行人語	一〇六
十月	一〇八

綠金暮春調

(明治四十一年)

おなじく	一一〇
柑子	一一二
落花生	一一四
榎の實	一一五
淺草寺	一一六
落日	一一八
盲目の葬列	一二三
綠金暮春調	一二六
月夜	一三〇
願望	一三二
夕	一三四
海の悲哀	一三七
落椿暮春	一四〇

街頭風景

(明治四十二年)

秋の朝の情調	一四二
盲啞院の落日	一四四
銀紅暮春	一四七
暮れゆく庭	一五〇
湖とウキスキイとのアランジュマン	一五二
黒き屏の前にて (散文詩)	一五五
想の薄明	一八九
玻璃問屋	一九二
五月の頌歌	一九六
六月の市街の情緒	二〇四
五月の微雨	二一一
吉井勇に與ふ	二一四

曲中人物

(明治四十三年)

うめ草 短歌十三章	二一六
老いたる人の海岸の獨白	二二一
1 鷗の死。2 夜の港の悲哀	二二一
門を守る老人の獨白	二三四

異國情調

(明治四十三年)

北原白秋氏の肖像	二四一
日本在留の歐羅巴人	二四六
邪宗僧侶刑罰圖を眺むる女	二五二
暮れゆく島	二五五
サフラン	二五八
『異人館遠望の曲』の序	二六〇

同 跋 二六五

食後の歌 (明治四十三年)

金粉酒	二七一
兩 國	二七四
街頭初夏	二七六
珈 琲	二七八
五 月	二八〇
立秋の日	二八二
該里酒	二八五
市場所見	二八八
鷗	二九一
物いひ	二九二

竹 枝 (明治四十三年)

こぞの冬	二九五
こほろぎ	二九六
松の木やり	二九八
絳絹裏	三〇〇
紙 入	三〇二
秋	三〇四
なでしこ	三〇六
海の入日並序	三〇八
石竹花並序	三一〇

町の小唄 (明治四十三年)

夜學校 三一七

林檎屋の小娘	三三八
窓の女	三二〇
お榮さん	三二一
道のあちこち	三二二
築地の渡し並序	三二四
お花さん	三二六
幕間	三二八
ねざめ	三二九
今日の芝居	三三〇
八百屋	三三一
とも子	三三二
貫一	三三三
鳥屋	三三四
工場がへり	三三六
本町通	三三八

浴泉歌

(明治四十四年)

浴室の窓より落日を見る人の歌	三四三
椎の葉	三五〇
葉に降る雨	三五二
商人と其妻と	三五四
月の出	三五八
割青	三六一
日ぐれ	三六二
高原の寂しき温泉湯の薄暮	三六五
赤倉温泉にて	三六七
珈琲壺と林檎と(散文詩)	三六八

苦患即美

(明治四十四年)

もしや草の芽が	三八一
二月空	三八三
春の雪	三八五
雷雨の後	三八八
冬の夜半	三九一
埋れし春並序	三九六
春朝	三九八
十月の哀歌	四〇〇

生の歡喜 (明治四十四年)

秋の林檎	四〇七
鼻の孔をほじる人	四一二
田圃道の放尿	四一四
葬送の日の淡き喜悅	四一八

譯詩二篇 (明治四十四年)

窓に倚る夫人の獨白 (フゴ・フオン・ホフマンスタアル)	四二五
日の出前 同	四四〇

薈澤集 (明治四十五年—大正元年)

薄荷酒並序	四四七
ざつくぼらん	四五四
窓の芍薬	四五六
植古聿	四五八
お夏清十郎	四六〇

五月朔日 (明治四十五年—大正元年)

博士と惡魔と	四六五
杜鵑	四七〇
沖の帆かけ	四七四
海村傳説	四七八
時興	四八〇
柘榴舍利別	四八六
葱畑の鬱憂	四八八
悲しき杯	四九〇
甕を抱ける女	四九三

夢幻山水 (大正二年)

曇り日の魯西亞更紗	五〇一
煖爐のそば	五〇四
ELEGIA D'UN GIOVANE FILOSOFO	五〇九

抒情小吟 (大正二年)

窓のながめ	五一九
久しぶりにて。我をよく。わが心。いくたびか。せめてなほ。わがき心。	
よるよるは	五二二
夜よるは。車。河の遠見。人の心。たかのつめ。やはり何より。薄なさけ。飛行船。	
夜ふけには	五二六
消息。火の番。たまたまは。むかしの仲間。飛行機。女よ。たゞへ品は。硝子のひび。	

斜街時調 (大正四年)

桐の雨	五三三
怨情	五三四

邪推	五三五
根なし草	五三六
かぞへ歌	五三七

瀋陽雜詩 (大正五年―八年)

竹枝	五四二
等一會兒	五四四
梅郎唱蘇三	五四七
壺を埋むる人	五四八
それが一體何になる	五五〇
或夜の口ずさみ	五五二
満月	五五四
湖	五五五
夢	五五八
2 ♠	五六一

夜ひそかに訪るる友	五六二
春の夜の大雪	五六六
或る夕	五六八
解悶	五七〇
梟	五七二

海ははるばる

朦朧として女人のすがた	(大正十年―十一年)
-------------	------------

窓掛のかげ	五七七
海日玲瓏	五八〇
傍觀者	五八二
南島の夜	五八四
知	五八六
該里酒	五八八
エズギオの遠望	五九一

巴 黎 山 歌

或本の序詩	五九九
巴 黎 山 歌	六〇〇
諷 詩	六〇二
女優の評判	六〇六
繪入週刊	六〇八
リュクサンブール公園の雀	六一〇
マロニエの花	六一二
小風景	六一四
七つ森	六一六
餘白の樂がき	六一八
怨言	六二〇

春のおち葉

(大正十五年)

序 詩	六二七
薄暮の人影	六二八
消えてゆく轍	六三〇
四月十七日夜	六三四
永代橋工事	六三六

奥の都

(大正十五年―昭和三年)

奥の都	六四三
草堂四季	六四五
昭和二年。昭和三年。	
窓前初夏	六五四











HANA WO HOZIRU HITO







天
草
組

(明治四十年)

はためき

「はためくは何ぞ」 「あな、おぞ、
渡海船今し出づとて
帆捲くなり。唐津の殿の
いとわかきあえかの姫の
髪に塗る伽羅を買ふべく。」

高札

「館の下を通らむ人は
心してゆけ、足な鳴らしそ。」

一の姫君
窓ごしの

夕日の髪の
翡翠の香、

そとうつしては
笑みたまふ
玻璃のおもても
揺るがむに。

黒船

事に寄せて自ら嘲る。

人も来よ、異船くる、
いとくろく、烏に似たる。
あら笑止、船なる人も
皆黒し、帽も袴も。

このあまき葡萄の島に、
無花果の歡げる丘に、
何見ると千里鏡見る。
懷疑の北國人は。

長崎ぶり

袖にのこりし南蠻の花手拭よ、
染めた模様の唐草は
誰がうつり香ぞ、にほひあらせいとう。
蘆會、蠻紅花、天南星、
平戸、出島の港ぐさ、

たはれ乙女の花言葉。
いざ赤き實を吸ひたまへ。
口はただれて血をはかむ。
牛膽、南星、めるくうる。
南無波羅韋増雲善主磨。

あこがれ

「その先は。」「咬啗吧島よ。」
「その先は。」「大海原よ。」
「いな、姉よ、その海盡きば。」
「亞碼港よ、深き港よ。」
「あな、ものう、天竺國は。」
「さなせきそ、いまだし遠し。」

「さるほどに長崎口ゆ
出でし船、北斗を目標し
土圭にて方位うかがひ
ひたすらに洋をこそ漕げ、
一つ星、影をかくして
新なる星ぞかはれる。」

「大小の二つのくるす、
そを見守り、南へ千里、
西へはた四百里ゆけば
ほのぼのとちとろんが嶽——

山越えて達磨尊者の
誕生の地夕雲あかし。」

「あな、もう、天竺國は。」

「さなせきそ、いまだし遠し。」

かくて船なほも二百里、
東埔塞はた暹羅の島島
右に見つ、左に見つつ、
漕ぎゆけば……あなや、
かなたに。」

「姉よ、そは天竺國か。」

「さなせきそ、あなや、
かなたに見えそめぬ、
山影青に。」

船人は腕鳴らし

漕ぎつけば、龍佐の邊……

天竺の摩訶陀の國よ。

「河口は瑪瑙の砂、

白檀の山より出づる

水にぬれ、水はながれて

みづかひぬ、眞珠白玉。

海底は珊瑚の森ゆ

漏るる日に海姫が夢。

「はた丘は落日にくゆり
椰子の葉ら、ららとこそ鳴れ、
長尾鳥くちばしのべて
伽羅の香をおのが羽に塗る。
風ふけば柑子の實ゆらぎ
新星はぬれてぞ出づる。」

「ここよりは白道、直に
國つづき、未の方は

南蠻よ、諸厄利亞國よ、
さてはまた紫羅欄花の
窓あかく羅面絃ふるふ
阿蘭陀の美し都よ。」

「堪へがたし、姊、やめたまへ、

いざ早く白帆捲き上げ

其國にゆかまし、われら。」

「その國に汝とわれと？」

「われとはた……」「さば兄君は？」

「あな兄君も……三人してこそ。」

註。當時われは「天草四郎」の劇詩の一節のつもりで之を作れりなりき。

黒日

繪蠟燭緑にくゆり、
沈金の臺ほのあかる。

じや、すびすの壺には、君よ、
かをれるを、葡萄の酒の。

かくてなほ君ゆきますや、
まゐちりの伴天連の徒に――

この風に、この雲空に、
今日ははた黒日なるにも。

前の詩と同じ心持にて作れる。

棧留編

天竺の都に近き
聖多黙の炎の沙漠、
車より過ち落つる
身は焼かれ木乃伊とならめ。

それや似る汝が胸かな。
さればこそ丸乳おほへる
なが衣も血色に渴く
赤織の棧留編よ。

あまくさ

天草旅行の間、戯れに吉井勇に與ふ。

天草高來の民こそは
耶蘇の外法を傳へぬれ。

港みなとに入れる、やあら、いよ、
勇魚追ひこしみやびをは、

さみどりの胸むねいとかたき
無果樹島の少女をとめらに、

ああら切支丹しんたん伴天連てんれんの
戀こひの祕法ひみつぞ傳へぬる。

巴爾娑摩

甲比丹よ、誰ぞ足早き
隼人率て、海をば船に、
陸路をば馬もて急げ。
亭露の國へと急げ。

その國の一名香、
巴爾娑摩は尸に塗るも
その尸敗れずと聞く。

日に刻に崩れゆくなる
わが若き思ぞ惜しむ。
塗らむ、その巴爾娑摩の香を。

波羅葦増

新井白石の羅馬人シドテに問へる言葉になぞらふ。

いかに、いかに、羅馬人よ、
西班牙爾亞、義太利亞、さては
羅馬は定かに見つれ、
紅毛も愛でたへたる
阿蘭陀のこの鏤版の
この繪圖のいづくにか在る、
汝がいふ波羅葦増の國は。

秋風抄

(明治四十年)

そへぶみ

黄金の貴なる腕輪、
きらめくは氷のゑみか、
いとさむき碧玉七つ。

さば、石の音する心臓
七つもつすこやか人よ、
この銭別贈りまゐらす。

註。七の心臓を持てるといふことさる醫書に見えたり。

檀古聿

これわが初めて作る所の詩なり。かのもはら
外光を畫けりといはれたる印象派畫家の風に
ならひたるなりけり。

眞畫の光、煙突の
屋根越え、わかき白楊を
夏のほひに噓ばしむ。
そは支那店の七色の

玻璃を通し、南洋の
土のかをりの檀古聿
くわつとたぎらす窓にして――
百合咲く國の温泉に
ゆあみしまししを垣間見て
こがれさふらふ鶴の
君をしのぶと文つくる。

秋
風

天草の旅の歸るさ、京のとある店にて買ひ求めた
る、伊勢物語の繪ある扇の庭に落ちゐたるを見て。

骨^{ほね}ばその
舞^{まひ}扇^{あふぎ}
いと微^{ほろ}に
すすりなく。

つれ節^{せう}か
小^こきむし
その一^{ひと}夜^よ
こほろぎぬ。
われゆゑに
歎^{なげ}くとも
知らなくに
その一^{ひと}夜^よ。

殘照

もと住みし西片町を通りけるに蝙蝠飛びかひて
ありければ。

古き街、かなしびの香の
などて、かく、今日は身に沁む。
角の燈の青き狭霧を
はたと、あな、蝙蝠飛べる。

はたと、あな、微の華かな、
こは古き思めざめぬ。

秋の日の吐息あかあか
樟の葉にしばしはほめけ、

一時よ、やがて眞黒に
暮れゆかむ、街と思と。

暹羅染

汝に贈らむと赤道の
焰の國ゆゑてきぬれ、
金銀瑠璃の暹羅染、
貝多羅葉の大模様。

など脱がざるや、北國の
いやしき衣を、夏真晝
一天くわつと日に燂けて
琥珀熔くる日もあらば、

金銀瑠璃の暹羅染
故郷の香に酔ひもせめ、
ながあえかなる腕を
つつめ、戀慕の旋火輪。

緋の色も濃き天鵝絨の
しとねに敷かむ睡蓮、
椰子の酒しもさとかをれ
あかさほめきの深海に、

汝れ温國の白鶴よ、

まばゆき肌にえたへずば、

貝多羅葉の大模様

暮雲の如く日に翳せ。

金銀瑠璃のしやむろ染
麻尼眞珠なす汝が肩を
あほはむ時し、夕空の
紺瑠璃にほふ鬢のたわ
湧き立つ雲に輝かむ、
火星の神の麻利支天、
大多羅樹の葉を漏るる
ぬれいろも濃き眼差よ。

かくて、日には日、夜は夜の
閻浮提一の樂郷土、
天竺國のなつかしき
夢にみちびけ美し酒。

伽羅の樹陰に鰐眠る
戀慕の岸に織られたる
金銀瑠璃の暹羅染、
貝多羅葉の大模様。

夕やけの歌

戯曲南蠻寺門前中の童子の歌。

夕やけ小やけ。摩訶陀の池の、さんしよの魚は、さらさ
ら光る。

玻璃のふらすこ、ちんたの酒は、さらさら光る。
鐘が鳴る。鐘が鳴る。寺の御堂の、十字の金は、さらさ
ら光る。

諧 音

白馬に騎りて我は行く。
かつし、かつしと我は行く。
はらら騒うちなびけ
斜日の潮搔きわけつ、
燈點る頃の廣小路
のりさる跑もほがらかに、
かつし、かつしと我は行く。

あら物物し、美女の族、
絡繹として艶なりや。
紅藻の中の白魚と、
觸れまほしかるまろじしの
一人一人を正視みて、
心動かし、心音の
高はためくを喜びつ、
かつし、かつしと我は行く。
白馬に騎りて我は行く。

うつたへ 竝序

少年の日濱町の或舞臺に舞踊を見たることあり、
その時かつら下地に結髪したる美しき人は我よ
りは遙かに年上なりしが、我心はいたく傷けられ
て感じたりき。

あな、面憎き人妻や、
そしらぬ様しつと來り、
一尺前に座を占めぬ。

もとより矢もて、刃もて
傷けざれど、その腫
脩然として我を射き。

そが證據には、わが心臓
破り碎かれて、心音も
丁墮として定まらず。

かくても、彼は身じろがず、
しかるが故に罪なしと
判じ給ふや、いかに判官。

行人語

そのかみの自然主義者を嘲りて彼等の言葉に
擬らへ作れる詩

破衣うちまとひたる工人よ、
いかなれば汝はひたすらに
柱頭飾の石刻めるや、
刻まば麴麵に化るとや、

生の力を増し得とや、
はた、わが腹を治し得るや。
益なき事をせむよりは
むしろ厠の壁を塗れ、
命の爲めの命なり。

十月

十月は、おち葉のそよぎ、
落日の瓦の色よ。
石舗ける大路かすめて
海にゆく笛の音色よ。
さてはまた心こがれて、
あこがれて門に立つ日よ。

天主堂、鐘鳴りひびき、
黒船の唄もうるみて
日も街もたそがれゆけば、
あはれあはれ今日もさびしく
消えゆかむわがまぼろしよ。

おなじく

十月は赤目しゆうらん
 あかあかと日に輝きて、
 海の香ぞしとど身に沁む。
 今日こそは薩摩の殿の
 姫君の來まさむものを、

庭小路きよめてあるを、
 聊爾なりや、ちひさき蜥蜴、
 ちちちと路を横ぎる。

註 あかめいゆうらんとは薩摩の人の蘇鐵
 の實に名付くるところなりとぞ、老いた
 る鹿兒島の女よりききつ。

柑子

鷗の群はゆるやかに
一つ二つと翔りぬ。
海に向へる小丘には
圓き柑子が輝きぬ。
われはひそかに忍びより、
たわわの枝の赤き實を

一つ二つとかぞへしに、
兎のごとき少女来て、
一つはとまれ、二つとは
やらじと呼びて逃げ去んぬ。
おどろき見れば夢なりき。
鷗の群はゆるやかに
一つ二つと翔りぬ。

落花生

八月は、遠き岬の
漸に暮れ、小き燈のかけ
一つ二つ殖えてゆくごと、
昨日一つ、今日また二つ、
落花生、黄なる花咲く。

櫃の實

いと廣き大理石の室、
白蠟はほのに點れり。
そがかげに赤きかやの實、
ただ一つ密にかやの實。

闇の聲、戸外の黒き
風の眸、幄にゆれぬ。
白蠟は消えぬ、このとき
めざめつつ薫るかやの實。

浅草寺

嗚呼これ暗き人間の胸より出でて、色相の
巨麗に誇る大伽藍、浅草寺の山門に
大提燈を見る人は我心観る思せむ。
渴と恐怖と飽饜の三次に立てる大虚堂。

時めく衣の紅、浅葱、色さまざまの幻像に
あてがれまよひ渦巻きて、我は君こそ、身をこそと、

刹那も絶えぬ人間の煩惱みては、高塔も
秋の入日の末寒み泫然として涕しぬ。

銀杏樹の落葉陽に揺れて寒き地にこそ歸りぬれ、
陰につどへる人の子は日の歡樂の酔さめて
何處にかへる、夕霧に文色もわかず日は暮れぬ。

悔恨の華か、夜の灯も涙の夢に沈みては、
あな悽慘の死の都、聴け、かくてこそ造られて
人に後れし大屋の不死に悶躁ける叫喚を。

落日

悽しきかな、法界の無礙の帝王日輪も
希望にそはぬ惡戰の今日の一日の回顧に、
我に足はず、身顛へば、矢傷の口ゆ淋漉と
血潮は流れ、夕空は暗澹として煙りたる。
固より小き山海に訴ふる悔恨にあらざれば、
苦痛を忍び聲を咽み、唯來む朝を目標に、

交睫も得ぬ夜の底の大熱の夢迎るらむ。
無極に環る命運に頼むは一つ、大涅槃。

今、日本橋、眼鏡橋、舊きを毀つ工夫等は、
またそこを行く市人は流轉の波の咳嗽の
新の香にか安じて、君てふ相に身か忘れ

はたや夜の城「睡眠」の虚なる壁に倚るとてか、
我先にとぞ幻影の都大路を急ぎしが、
ふと落日の影を見て、慄然として歩を停めぬ。

綠金暮春調

(明治四十一年)

盲目の葬列

河岸の心の嚮に沿ひて、
病める壁眩暈の兆恐るる床を、
その初めいと忍びかに、やがて鋭く暴く、
落日の鐵を撃つ旋律起る。

笑を熱の。早く、早く、早く、早く……
鳴らせ、時ぞ、時ぞ遅る。鳴らせ、鐘を……

けたたまし、病む壁の狂へる呼吸に
圓蓋も、大穹窿も、靴の踵も、
舗石も、酒舗の戸も、理髪店の欄も、
古びたる勸工場裏の出口も
伴奏きぬ、落日の曲の印象。

あはれ、あはれ耳傾けよ、そが中に輓歌の聲、
生の琴、鼈もはららき、

病める壁眩暈の兆恐るる床を、
ひそやかに、ひそやかに、ひそやかに……
河岸の心の嚮に沿ひて、
盲ひたる葬送の言なき列ぞ
ひそやかに、いとひそやかに……
ひそやかに練りゆく……

緑金暮春調

ゆるやかに、薄暮のほの白き大水盤に
さららめく、さららめく、暮春の鬱憂よ。
その律やや濁り、緑金の水沫かをれば、
今日もまたいと重くうち濕り、空氣淀みぬ。

おぼろかに暈して落日いそ薄黄にけぶり、
青銅の怪魚の像、蒼白う鱗かがやく。

戀の子ら手を翳し、わりなしや、木の間をすきて、
大空ににじみゆく悲哀の淡藍色ながめ、
すずろにも胸いだき涙する時しもあれや、
ひそに、さと、あな少時、窓もるる二部唱の聲……

「古き世の、古き世の愁ゆゑ絃しみだるる。」
「さば星の影明かる彼の島に、してゐるの島に
わが小舟よせなむに、などてさは歎ふ——と云ふ。」
「この舟の、この絃の、この戀の朽ちば——と答ふ。」

花ちりつ、花ちりつ、灯に揺れて花ちりちりつ。
 ともすれば深みゆく心の沈黙うち擾し、
 わかき日の薄暮の豎笛は泣きこそさぐれ、
 石楠花の葉も垂れて、あつひに怨恨も暮るる。

かつしかつしむらむらばつと「時」の足、戀慕、なげかひ、
 歌、小唄、樂譜の精靈ら黒みゆく丘を逃げかふ。

ああ暮春、この堂の錆びし扉は音なく鎖され、
 西の空漸く明かり、濃き空気がぼめきたるを、

ただひとり今もなほ、ゆるやかに、さはれ悲しく
 さららめく、さららめく、ほの青き鬱憂よ。

月夜

おぼろに圓く、ほの黄なる無言のかげを
岸にそひ、舟人ひとり、はた一人、
朗に歌ふ、はた歌ふ。櫓はきらめきぬ。
黒き紗に、衣ずれの音に、水のしぶきに、
曲節のゆるき流に、時の愁に、
月影は淡くも映れ、鑲工の壁の下には
蠟の火ぞしじに瞬く。古いし樂師は

信樂の譜をくりかへし、譜をくりかへし、
稚兒の眼はひたすらに窓にそそげる。

窓につと、窓につと、窓につと、窓につと、
音すれど、音すれど、物分ず、壓す音す。

その刹那内の世は大理石と化り、
とのもには燈さえて笛の音うかぶ。

岸の草、岸の青草顫ふ。

顧望

追憶の方はいまど沈むらし。
灰紅の暮雲黄みて山の背の緑も黒み、
海もああ眠に入るか、無人島ほのかに青む。
さばわかき漂浪の夢もよ沈め。

あてもなく憧れて前世の魂を追ひ、
空想よ、汝にこそこの胸を開きしか。

世に得しは垂乳根の廢たる翅、やがて厭き、
執の華、そが中の君を慕ひき。

何故に、何故に秘めかぬ心の涙——
み寵にも、金十字にも、懺悔の師にも
秘めけるを、秘めけるを君に許しき。

それもまた幻影の楯——萬有のここに隠れて、
外に観る我に足らへる——今あはれ楯さへ失せぬ。
あな寒し、氷の如き虚無の前、わが目くるめく。

夕

夕やけ雲のとどろきは
殷殷として遠ざかる。
執の震慄の赤き笑、
追憶色に、樺に、黄に、
翡翠の眼、螢石の
ほがらに青き悲に。

さこそは海も、あえかなる
日ざしのゑみの閃きも、
沃土と藍の玉蟲織も
紺瑠璃板と冷めはつれ、
似たりや、春を離り來し
一羽の鳥よ、わが思ひ

灰紅色の壁にきく、あはれ そふらの、
遠方の入江の青き帆は風にゆらるる。

つと立ちて渚の小石
眼をつぶり高空に投ぐ……
ややしばししてさと音す。

はや薄暮なりき、そこそなく
晩鐘の音を鳴りわたる。

海の悲哀

(ジョン・ラヴェエの絵の心を)

夕、——日は沈みにたれど月いまだ
登らず。われら二人して黙し歩めり。
潮にほふ岸の果ては
空氣凝り、冷かに市はかすみぬ。
浪の音ほのかに笑ふ。

こし方の郷に聞きたる唄、耳に再びきこゆ。

われらなほ語りも出でず。

いと重し、夜の狭霧は

更に凝り、果しらぬ砂道は、海は、

深傷に悩む巨人が憂の面、

さはれ、いと静やかなりき。紫の其悲哀の

そが中に、あてに、仄に、遠船の黄なる燈。

浪の音再び笑ふ。

されどまたなべては黙す。

われ語り出でむ術なく、彼の人もまた物いはず、

かくてまたこの一夜、かく二人して

果しらぬ砂道を歩む。

落椿暮春

椿が落ちる……ぼた、ぼた、
晩春の午後二時頃。
盲啞院の白壁。
陰の紫。
生垣から見える園の外光。
冷い光に顫へながら、
木のもとに立つ盲目の黒き外套。

今し方鳴りやんだ鐘の響が……
ええ、てるが……春のほひが……
盲目はまだ木のもとに立つてる。
涙ぐんだ灰色の眼が何だか少し笑つてる。
ああ盲啞院の白壁。
晩春の午後二時頃。
椿が落ちる……ぼた、ぼた。

秋の朝の情調

燻銀うるふが如く臙げる——けさは朝なり、
冷き空氣葉末に凝りて身顫へる
そが一叢の後には、古白壁に、
はつかにも薄紅き優心ひとりゆらめく。

薄紅に冷き秋の壁の前、首うなだれ、
わが心黒上衣して徘徊り、あるは佇み、

何物か求めわづらふ。
されど無し、芙蓉の瓣に、銀緑のそが葉柄にも。

變らぬに、なべては舊と——唯、時は夏なりしかど——
四年前、初めての日はわが胴衣稚く紅く、
葉洩れ日に酔ひ羞ひてわが眼惑したれど——
その折はしかと見たるを。

黒き精神いま追憶の薔薇より覺めて濁りぬ。
されどなし。充血の眼は尋ねても何も見ざりき。
變らぬに、なべては舊と——唯、時は夏なりしかど。
ただ赤き雛芥子の座に白芙蓉代りてはあれど……。

盲啞院の落日

盲啞院の濁りたる白壁に、
赤と黄と紫と黄と——
囉叭の音も消えてゆく秋の日、
憂ひげの二重瞼にひそひそと四邊見まはし、
櫻の葉らはかたみに歌うたふ。
赤と黄と緑と赤と、

こたびはた黄と格魯密母色と。

銀の如き十月の、空氣は重し。

赤と黄と黄と憂愁と、

こたびはた黄と格魯密母色と。……

忽ちに

さと雲間より火の如き斜日さし添ふ。

破れたる古釣鐘は驚きてららと鳴りそふ。

Gin-ko—Bosyn

(銀紅暮春)

Gin ni sabi-tar' Ito-no-ne (絲の音) zo, tin-tin (沈
沈) to

Huke-s'mu Yor' no k'renai (紅) no Yami no
Omote wo

Nagarur', hata nagarur', nagarur'

Zi (磁) no Sara yo, masiroki, maroki,

Soga Ue no iro-awozame-tar' Wonna (女) no
Kubi.

Manziri-tomo-sede nanzo miru,

Melodia no Nagare wo miru.....Yor' no Gaku-
ritu (樂律) no Insyô (印象)

赤と黄と黄と憂愁と、
こたびはた……あれ、
玻璃窓に日の反照し！
子等は皆庭に出で、
うちたなげ大日を仰ぐ。

Aa, Kokoro.....Har' no Yor' no Melancholia,
Sono omoki k'renai no Yami (闇) no anata ni,
Wakaki (若き) wakaki, awoki Populas (白楊),
Sono kozue (梢), ware wa miki —

Honoka-nar' kinar' (黄なる) Tuki-no-de.

Aa, Kokoro Har' no yor' no Orchestra,
Naka ni mazirū Syamisen (三味線) no
Senritu (旋律) no Itiratu (一列) no,
Nayami, Nagekai, Giri (義理), Renbo (戀慕),
Yagate wa idure, tiri-diri ni,
Iya tiri-diri ni nagare-kieyuk' Uraganasisa yo !

"Hisamatu ni aitasa ni

"Kigoto-wa-kitaga" to, Uta hibik' toki,
Sara no Ue nar' Wonda no Kubi, titi-titi to
uti-warô.

Zyūzi (十時) Gak' (樂) owar'.
Macla nokor' Gin no Insyô. Tin-tin to huke-s'mu
Yor'.

暮れゆく庭

一五〇

雪降る。醫院遊歩場の憂愁の長椅、
はた惱む生の青芽の蕭げる牧場の中に
黒き翼、惶急しげに、つと來り、鴉は眺む。
河沿に乗合馬車の瘡の市をふためき行くを。
雪降る。靜に病室の局さしめく。
少き日の想像の素肌、大理石血潮迸る。

轟かに湯の滾る息、あはれあはれ嘯囉保兒謨は
眩き恐れたゆたふ。——女、ああ、つひに眼を閉づ。

雪降る。やがて黒上衣の醫員は二人、
黙々と青き悔恨の棺衣の擔架のあとに。
また遠く鴉の叫、耳内の丘の古刹、
薄暮の早鐘ららと、ららと、あな——されど暮れゆく。

雪降る。あはれわが庭もつひに暮れ行く。
蕭かに瓦斯の燈は病窓の玻璃に咽べど、
炊衝と癌の族は物かげに挽歌うたふ。
さあれわが薄暮の市よ。午後六時、雪なほ息まず。

一五一

Hunatukiba no hotori.

Aekanar ito utukusiki yamer Womina yo : waga
Kokoro—

Garas'mado koe simeyager awoki Nioi wo kikis'
mer'.....

Tatimatini, Mati no Kata yori hanayakana Hito
no Sazameki, Inu no Suzu !

Kinpatu no Yôroppa-bito, Tabisugata—Hune ni
nori Kisi wo hanaruru.

Wakabito no sagetar' Hako yo, Ab'raenogu yo,
Terebin no Ka yo !

一五三

Mata Whisky no murasaki no tuyoi Kawori ga
Miduumi ni,
Are nizimitutu, nioitutu, mata warinasi-ya kas'
mitutu.....

Miduumi to Whisky to-no
Arrangement.

[Whistler to We no Kokoro wo.]

Gin no yônar' Miduumi wa, denak'temo kureyu-
kumonowo,

Miduumi no Melancholia wa sidumiyukiyuki—
mukô no Sato no

Migiwa made hiromariyukite, are, Kon-koyuki
ga harara huri huri,

Mata Yama wo kak'site-simau; Kuregata no Whis-
ky ka, awai Nami-oto.

一五二

Hurui Nara-ne-ki - k'rete-yuk' „Omoi” no Kozue
Sora ni haruu. Sono Miki no Gas ni Hi ga tuk,



Hune Umi no Manaka ni idureba, Hito wa mata
Gin-no-hue huku,
Sono Hue-no-ne wa hyurhyur-to ni-gorer Kiri
no naka e kieru

Gin no yōnar' Melancholia wo usugi-nar Kokoro-
no-hune ga;
Mata Tuikwai no Whisky no urewasigenar Huri-
kaeri.

Hune wa yuk', Hune wa yuk', k'rete-yuk'
Miduumi no ue wo.....

Rara, ara, rara, Kokoro no Ok' no Tōzato no
Kure-no-kane nar'.....

黒き扉の前にて (散文詩)

引

これは明治四十一年某雑誌(新聲?)に投書したものである。當時の予の文學が予の近き周圍より壓迫せられたるに對する予の心の反應が、ここに拙く、象徴的に描かれてゐる。謂はばこの年の詩の註といふ意味に茲にこの一篇を挿入する。(昭和二年某日記)

わが雲雀よ。今日は濁つた日だ。俺の心も格魯密母の沈澱のやうに重く濁つて居る。——昨夜黒い夢に襲はれて

から俺はもう何も出来なくなつちやつた。檸檬水の代りに、毎もお前に贈つた琴詩も今日は書けぬ。今日は一日仕事を休んだ。

黒い夢といふのが最も適當だらう。その夢は夜のやうに黒かつた。俺は初め——ああ是は鐵の扉だと思つた。だが善く観るとそれ程堅くはない。また形も無かつた。もつと底も知れないやうな深いものだ。夏の夜の癆咳病みの幻想のやうに暑苦しくつて呼吸苦しい所だ。いや所だといふとそれが臥榻で、俺が其中に寐てでも居たやうだが決してさうではない。やつぱり板のやうに平面でさうして黒い。俺は其前に居て、幾許逃げようと焦つても逃げることが出来ぬ。目を閉つても又開けるともうその物が

在る。俺は段段逆上せてきて汗が出始めた。

すると遠く人聲が聞える。高らかにものの噂をして、そして笑つて別れたかと思ふと——噫雲雀よ！あの可嫌な、いやな、いやな人の顔が笑ひながら俺の眼を見て居る。人の顔と云つても鼻も口も見えなかつた。いはば純の表情だな。そいつがこの黒い扉に一杯になつた。さうして俺を見て、俺の意識の底を擾さないでは休まぬやうに意地悪く笑つてゐる。俺はつい低徊れた。是故か心恥ぢた。俺は恐くなつてきた、其笑の前を憚りながら、さあらぬ貌に到頭自ら偽つた。

「夫や捨てる。捨てるさ。弊履の如く捨てる。僕だつて何時までさう舊夢に著して居ようさ。」

俺は偽——か、少くとも未決の問題が、かく高らかに断ぜられ、發表せられたのを聞いて、自分の言葉とも思はず、身顫をした。併し俺は合理を崇ぶ。……俺は、そら此間の新しい麥藁帽子な、あれを携つて門を出たが、お前が縫ひつけてくれた獅頭龍尾獸の飾が氣になつてたまらない。お前はあれから奈何な聯想を惹起すか知らないが、俺は少くつとも平氣でその聯想を追ふことは出来ない。お前の無邪氣な纖い指が俺の帽子に獅頭怪獸を附けるまでには、奈何な嵐と、奈何な濤とが俺の小さい海の底にざわついたたかをお前は知つて居るか？ 否お前は知らぬ。知つて居るのは俺の涙腺許りだ、その獅頭怪獸を俺は今日恥ぢた。恥ぢて、取つて捨てようと思つた。併し竊と取つて捨てるのも

卑怯のやうで俺には出来なかつた。俺はまごついちやつて帽子を左の脇の下に隠した。

時にまた黒い扉が笑つた！

噫。俺は其時に、それを機會に何故彼奴に反抗しなかつたらう。さうしたら俺は後後まで樂だつたらう。今日も直ぐお前のところへ行けたらう。併し俺の親父は北國の血統を引いて居たつた！ 鬚むくな暗い日耳曼人のやうに、夏の日、雪の夜の食料の用意する國の住民の血統を！ 恐らく俺の血にも熊の脂が雜つて居たらう。俺は彼奴に反抗する前に、業に俺の心に阻められて居た。

「ああ慙んな兒童の玩具が附着いて居やあがつた。ははあ」かく笑つて、獅頭獸を溝に捨てた。（如何に異様な笑

だつたらう！

だが同時に一つ心配事が出来た。獅頭怪獸を捨てた以上論理上お前の髪の毛の束をも捨てなけりやならないわけだ。俺はそつと懷から手を入れて、脇の下の袋に觸れた。ごそごそと絹の音がした時、觸覺は直ぐに視感に移つた。古い猩猩狒の錦まがひの布が目浮ぶ。いつかお前に始めて髪を切らした時の甘い、併し痛切な氣持がぐつと復こみ上げてきやがつた。俺は多分泣いたらう。……あとで言ひ解くからしばらく恨んでくれるな。俺は併し合理の崇拜者だつた。

俺の親父が悪いのだ、俺が母は元來南國の女だ。幼友達の代りに俺の親父を亭主に選んだ。恐らく護謨毯の代り

に俺を玩んだんだらう。俺の利い時分には母の前で、大勢の女の友達と踊を踊つた。だが中年になつて、俺は到頭哲學が好きになつた！

十年に一逼流れ寄るあの悪い紅潮よりも、紀の沖を流れる黒潮よりもつと悪い潮に違ひなかつた。暗くつて寒い。俺が海岸の郷に生れなかつたら、さうして恁んな悪い雰圍氣を浴びなかつたら、雲雀よ、吾等が生涯はアルカディアの樂園だつたらう。此のつきせぬ春光の中に、ああ今頃は何をしてゐたらう？

併し俺の哲學と論理學とは俺にお前の髪を捨てろといふんだ……

そして黒き扉は三たび笑つた。

——今だこそいふが、俺はあの髪の毛の束に幾度歸依の額を當てたか知れはしない。俺がその前に對ふ時には、古へ伴天連信者が「おらしよ」を唱へて聖櫟の端を嘗めた時のやうに、法悦、信樂の和雅音が俺の胸に充ちた。或時はお前の髪束こそは、わが爲めに彼の惡念起るとき自ら其身を撃つといふなる「てしひりいないろ」であつた。いつでもクライストの小品に、彼の老いたる畫工が其子の「アカデミー」臭いのを誡めて、マリアの繪をかくために聖晚餐をするのを嗤つた一條を讀む毎に、痛切には感じながら少しく慊焉たらざるものがあつた。實際俺は正に其息子殿のやうに、お前の髪を嗅ぐ前にも口と手とを洗つたんだぜ。唯一度、たつた一度俺は手と口とを洗はないで……髪束の束

を吻つた。それは夜遅く深山を旅した時だ。それを俺は幾許後悔したか知れない。咄はたして、それが悪い識をなした。

黒き扉は四たび笑ふ。

今度は同情して意見するやうな口調で、

「君、一體遊戲と職務とは孰れが重んず可きものだね？」
そりや誰だつて慥う聞かれりや「それや職務の方でさあね」と答へない譯にやゆかないさ。

「さうだらう、職務だらう。若し遊戲といふことが存在する權利があるものなら、それあ、少くとも職務から許容せられた範圍の内でないやならないから、」
「そりや左様でせう」

「さうだらう。併し君は一體——理窟は別として、實際の生活の上で、何方を餘計行つてゐるね。」

此に至つて哲學は頗る事務家的口吻を漏らした。兎に角依然として、俺を苦しめることは同じだ。俺だつて、慥にないらざる事を考へさせられなけれや極めて平穩だつたんだ。處が俺も氣稟だから考へないわけにはゆかなかつた。考へたら返事が出来なくなつた。

「君、そりや一體何だね？」

突然慥ういつて、黒い眼が覗くやうにして俺の懷を見た！ 見られたなと思つて、俺は腕を組んだ。併し黒い眼は幸にして夫れ以上追窮しないで、又話を始めやがつた。

「たとへばな、世の中に戀愛といふものがある。君も御存

知だらうが、……是がまた随分困つたものだて。戀愛といふのが、併し其本體は誰も知らぬ。或は特種の感覺に表れる刹那の現象を以て是だとするものがある。併し是はまだしもだ、多くの愚物共に至つては、ただ其後光だな、感覺の響きだな。形もない雰圍氣の綾だな。これを以て戀愛の眞髓なりとして、あたらしい心眼を惑はすものがある。

（ちろりと上眼して）君は、勿論、知つては、ゐなさるだらうが、凡て假象と幻影は、そら、捨てなけりやあならないぜ。況んや（！）この假象を、何等かの形で以て現象界に出さうなんといふやうな空想は、先づ第一番に毆打り飛ばさなけりやならないぜ！……だが」と言葉を切つて「君の職業は一體何んだつたかな」

黒き扉は五たび笑ふ。

俺は「畫工です！」と答へた。

「ははあ、畫工か。そりや面白い商賣ぢや。矢張美人でも畫くのかな？」

俺は答へない。

「畫の美人も佳いが、本當の美人は尙更いいて。奈何ぢや、畫工は休めて嫖客にならんか？」

俺は如何に此言葉を解釋す可きかを知らなかつた。況んや如何に俺の怒を表はし、如何なる態度を以て彼に對す可きかを知らう。併しその内に彼は口調を改めて、

「併し、君は今が可い機ぢや。君も男だらう。國へ歸つて小學校の教員になり給へ！」

その時俺の心も弱くなつた。俺は若い清教徒の空想のやうに、田舎の小學校を思つたのぢやない。外にわけはあつたが、兎に角田舎の教員にならうかと……其時は思つた。「田舎の教員にならう。さうだ、さうだ」と獨語ちて、『併し此髪は何處へ捨てたものだらう……』と考へながら、俺の心持では、やや遠く黒い扉から離れて薄暮の街を歩いた。何時の間にか河岸らしいところに出た。成程世の中の人にはたらいてゐる。多分俺よりも、もつと高い目的の爲めにはたらいてゐるだらう。唯併し、石橋の傍の、三人の立場だけは、少くとも其時間には働いて居なかつた。二人は名の如く立つてゐる。一人は逞しい兩手を以て、一心に欄干を壓してゐる。

燕の群は翔け廻つてゐる。

安山岩のやうに赤く濁つた水の面を。鐵橋の穹窿の下を。古き花崗石のやうに汚れた白堊塗の水上巡邏船の舷の前を。高い空から舞ひ下つてきて、其尾を水に滑らし再び高い空に舞つてゆく。抑制といふ概念なき國の生物のやうに、恣に、全身の筋、全身の腱はた満腔の欲望を動かして飛翔してゐる。

遠き橋の上を火のやうに、郵便馬車の羣が馳ける。

是等の光景を眺めてゐると、俺の心も大分自由になつて來た。俺は同伴の立場のやうに、兩腕で石を壓したりして少時遊んだ。市街の中央にかかる自由郷のあるといふことは俺は今迄知らなかつた。立場の仲間、世の中で最も

自由だといはる可き態度で以て、而かも最も放逸なる思想を目に見ゆる凡ての對象、船上の巡査、車上の婦女の上に結び付けてゐる。四十ばかりにもなるらしい極めて贅澤な風俗の女は、殊に熱酔のやうな批評を浴びせ掛けられた。

彼燕の羣と、此立場の仲間と、如何に彼等が自由に、且満足げに行動してゐるかを見ると、物心ついてからもう二十幾年、而かも尙目見る能はざるの鐵鎖に惱んでゐる俺自身を憫まずにはゐられなかつた。此間迷はずに居たならば、世のために、人の爲めに、俺は幾許良い仕事をしてゐたか分らなかつた。

俺は惘然として河の面を眺めてゐた。

燕の羣は依然として樂しげに翔つてゐる。

やがて俺の跡を追うて、突然賑かな笑聲が起つた。つと見ると、酒樽をしたたま積込んだ船が通る。時に、將に沈まんとする斜日は俄に最後の一闪を投じて、船の酒甕を眞黄色に染めた。船頭はまばゆげな顔付をして向ふ河岸の倉庫の扉を眺める。船は水上に鮮かな香の綾を残して煙る落暉の氣の中に隠れる……

ああ、是は、俺が印象派にかぶれた頃畫かう、かかうと思つた「生」の圖題ではないか。日本の勞働者の印半纏は果して火事の繪と、五月人形の鯉幟に副へられる以上に趣きは無いものか……

またしても俺が例の妄想に耽つてゐる間に、いつか日は全く暮れた。遠くには緑の燈が點いた。側を向くと、彼の

立坊は依然として兩手で石を壓してゐる。驚いた。わが雲雀よ、立坊の壓してゐるものは橋の欄干では無かつた。

雲雀よ。夫れは黒い扉であつた。

立坊は、この扉を開けようとするのか、一生懸命に壓してゐる。ああ、迷へるは俺一人でもなかつたのだ。

燕の羣は黒い扉の上に白と紺青とで一列の模様を畫いた。やがて消えて往つた。

俺はまた心悲しく、彼の無言なる勞働者の空な努力を見てゐると、欄干の下、この大なる扉の裾の方に、心壁を刺すやうな哀調が聞える。

……………ゴンドラめいた小舟に仄かに燈がとぼつて、幾たりかの人、憂愁の眼差に黒

き扉の時の錆を諦視めてゐる。

やがてゆるやかにソプラノの歌声……

「古き世の、古き世の愁ゆる絃も亂るる。」

男の聲も歌ふ

「さば星の影あかる彼の島に、シテエルの島に、
この小舟よせなむに、などてさは歎かふ——といふ。」

歌は少時息む。舟中の人、上なる欄干に集へる人のや
やに多きを見て羞らつたのでもあらう。

唯舟は音もなく、静かに黒き扉の前をゆく。残る水跡は、

錆びたる扉に、新に鮮かなる幾條かの波形を刻む。

雲雀よ。此時俺の心も亦重くなつた。そして新しき隣
人に尋ねた。

「あの人達あ、何處へ往かうつてんでせうな。」

年のまだ若い隣人は仔細に俺の顔を默検して、そして舌打
をしながら鷹揚に

「ちえ、彼奴等は大方シテエルの島へ行かうつてんだらう。」

黒き小舟の舳先には水色の睡蓮の瓣がゆらめく。睡蓮
の花の中から少かき女が燭をもつて立ちあがる。そして
また歌の續きを唄ふ……

「この舟の、この絃の、この戀の朽ちば……と答ふ。」

やがてまた小舟は闇に消えかかる。

「ああ、あの人達や幸だ。俺もあの時代に生れたかった」と俺が思はず述懐を漏すと、嚮の青年は激昂して、

「え、君もですか?!」といふ、「君も何ですか、あの仲間ですか?、羅曼底! 僕は到底羅曼底の敵だ。そんなら、君も僕等の敵だつた。」

少くきやしやな隣人は、その貌の美しきにも似もやらず、破れたる帽、青き上衣をきてゐたが、情激して、さめざめと泣き出した。

時に黒き扉は六たび笑ふ。
俺は驚いた。また黒い扉が笑つた。俺は周章てて、

「否! 否! これは僕が悪い、僕が謝罪つた。いや僕もその羅曼底は捨てた筈でした。いや何ね、やつぱりその所謂アカデミイの情感教育の香が何處かに残つて居たのだつたんでせう。」

といふと男は喜んで?

「でなければならぬ!」

青き酒の杯を舉げて、獨逸臭い重苦しい辯で

「デオニソス神と、若き日と、新なる世紀の爲めに!」と叫んだ。

此時吾等が會話を偷み聽きしてゐた男がははあと高らかに笑つた。曰ふには

「何あに、そんな事が有るんかい。羅曼底てなあ、何時の時

代だつて人間の根本性格だあね。但新代の人は舊時代と、それから何時でも居やがる俗人とを破壊すれや可いんだ……」

ロベスピエール形の胴衣を着た鬚むしやな男が早口になにか言はうとしたが、此方が相手にならなかつたから黙つた。

嚮の若き男は再び

「阿片及びアッシッシュの爲めに！」と高く叫んだ。

わが雲雀よ。此時俺の神経は實に、不可思議に收縮した。俺は再びお前の髪を恥ぢた。今度は、口と手とを洗つて、額を當てたことが恥かしかつた。

「新しき認識、新しき意義！」

と俺も續けて叫んだ。お前の髪の束は、再び口と手とを洗はるること無くして吸はれた。そしてわが新しき隣人なる共産主義者にして、ジョルジュ・サンド、及びボオドレールの崇拜者であつた青年のひるの如き口に……アッシッシュとアブサンとに濁つた吸血獸の如き口に、お前の髪はまた吸はれた！

「新ぢやないんだらう奇なんだらう」とロベスピエール形が云ひ足したのも聞えなかつた。

「苦痛の快感以外に生命は何んだ！」と青上衣が叫んだ……

ああ雲雀よ。これで以て俺の計畫は全然崩れた。始め

俺は河岸にうつむきながら考へたのには、家に歸つたら早速青銅の小壺を求めよう。わかき日の思ひ、なげかひとお前の緑の髪の毛とは俺の最後の小曲と一緒、にこの小壺の内に封じられ、小壺は太き紅白の紐に結はれて、彼のソロモンに封ぜられたる海神の函の如くに、紫の海深く、海底深く沈められねばならないつて。

わが雲雀よ、かの緑金の色に古りたる小壺が、大白の紐に結ばれて、あの黒い扉の前を、底深く、底深く沈みゆく有様を想像しろ。水の面に白い漣がゆらめく頃は、「わかき日」は幾億由旬の下に落ちたか、既に分らぬ。

ふと思ふ。此小壺はさきの獅頭龍獸と、果して何地に於てか遭遇ふたらう？……

併し俺の凡ての計畫、凡ての空想は悉く破壊し盡された。俺は又蘇生つたやうに、萬事を始めからやらなければならぬ。さう思ふと寂しいながら、どうやら力強くも思ふ。そしてもう全く暮れはてた河岸の欄干から立たうとすると、俺の帽子は橋の上に落ちて轉げた。既に苦蓬酒の青年もロベスピエール胴衣も居ない。俺は帽子を拾ひ上げようとすると中から紙切が落ちた。……はれ、はれ、それはお前の手紙だつた。俺の帽子が緩かつたから、中の革の下に挿めて置いたのだ。俺は再び手紙を読む——四邊に人が居ないから、俺の一生の最後の涙を雫さうと思つて、俺は再び欄干に倚る。

黒い、錆びた扉の前に、一片の白き女の手紙がいふ、……

「——わが駱駝よ、お前がこの頃原始佛教に興を得はじめたと聞き、わたし何となく氣味がわるいよ。もつとも黒檀の森の奥、龍佐の川の源には珍らしい寶も埋まつてるかも知れないわね。だけど黒い眼の光る鱷魚も居るだらう。食へば忽ち齡が老いるといふ果の樹もあるさうだわ。わたしは抹香はきらいよ。お前が抹香臭くなれば、わたしは失敬するよ。しかし曼荼羅と讀經の聲はちよつとエキゾチックだわ。キリヤム・ブレエキバりでやつて見る氣はない？ それより音樂のやうなる畫をつくり候へ……」

俺の前の生活の中から、唯一つの計畫がある。これのみは毀されずに、まだ残つてゐる。既に俺が藝術的生活に入り始め、ふと樂聖ワグネルが佛陀の藝術を拒み捨てたのを

背つたといふことを小耳に挿んで、時々悪い夢を見た。爾來佛教は俺の爲めにバンドラの箱となつた。

俺は單騎敵陣のうちに入るの覺悟で佛教の中に入らうと思つた。それをお前は、俺の所謂佛教から中幕物を求めようとしてゐたのだ。

雲雀よ、詩も樂も中幕も、俺に些の安心を與へない。加旃しかのなお前自身も雲雀よ、俺は偽らぬ、お前自身も俺に炭酸泉以上の慰藉きざしを與へることは出来なかつたよ。

苦痛の快感と、雲雀よ、知と、古への道と、此孰れかに俺は就かなけりやならぬ。……

今俺は暗い地下室の隅に居る。唯一つの弱い洋燈らんぷの光

を便りに此手紙を認めて居る。黒き扉を避くる爲めに、雲雀よ、俺は辛うじて蛇の如くに地下室を求めた。七たび黒き扉の笑ふを見ることは、俺には堪へられぬ。

雲雀よ、蛇は皮を脱ぐ、俺も今皮を脱ぐのだ。第一に太陽の白色、第二に色象の七色、黄色の理想、幻影、放逸……第三に、わが雲雀よ、お前の清き雲斑石の胸……

雲雀よ、お前の髪は三たび、口と手とを洗はずして嘗められた。俺の眼は血走つてきたかも知れない。美しい髪の手束が汚されるれば汚されるほど、俺は空氣の稀薄な山から愈近く人里に近づくやうに安心する。

畢竟生とは行爲だ。樂で近いのが道だ。この道を選ぶのが最も賢い人間だ。賢愚は併し俺の關らない所だ。道

よりも先づ、俺は生を求めなければならぬ。俺の口は生に渴いてゐる。雲雀よ、ああ俺の口は今お前の血と肉とを要するんだ。否、酒とアッシッシェとは必ずしも俺の求める所ではない。唯血とさうして肉とを要する。お前の全部を俺は知り、味はなければならぬ。

俺がお前の血と肉とを得た時、われら前に、彼の黒き扉は自ら消えるであらう。黒き扉は畢竟相對のものだ。

俺はお前の腕の内に涅槃を求めようつてんだ。

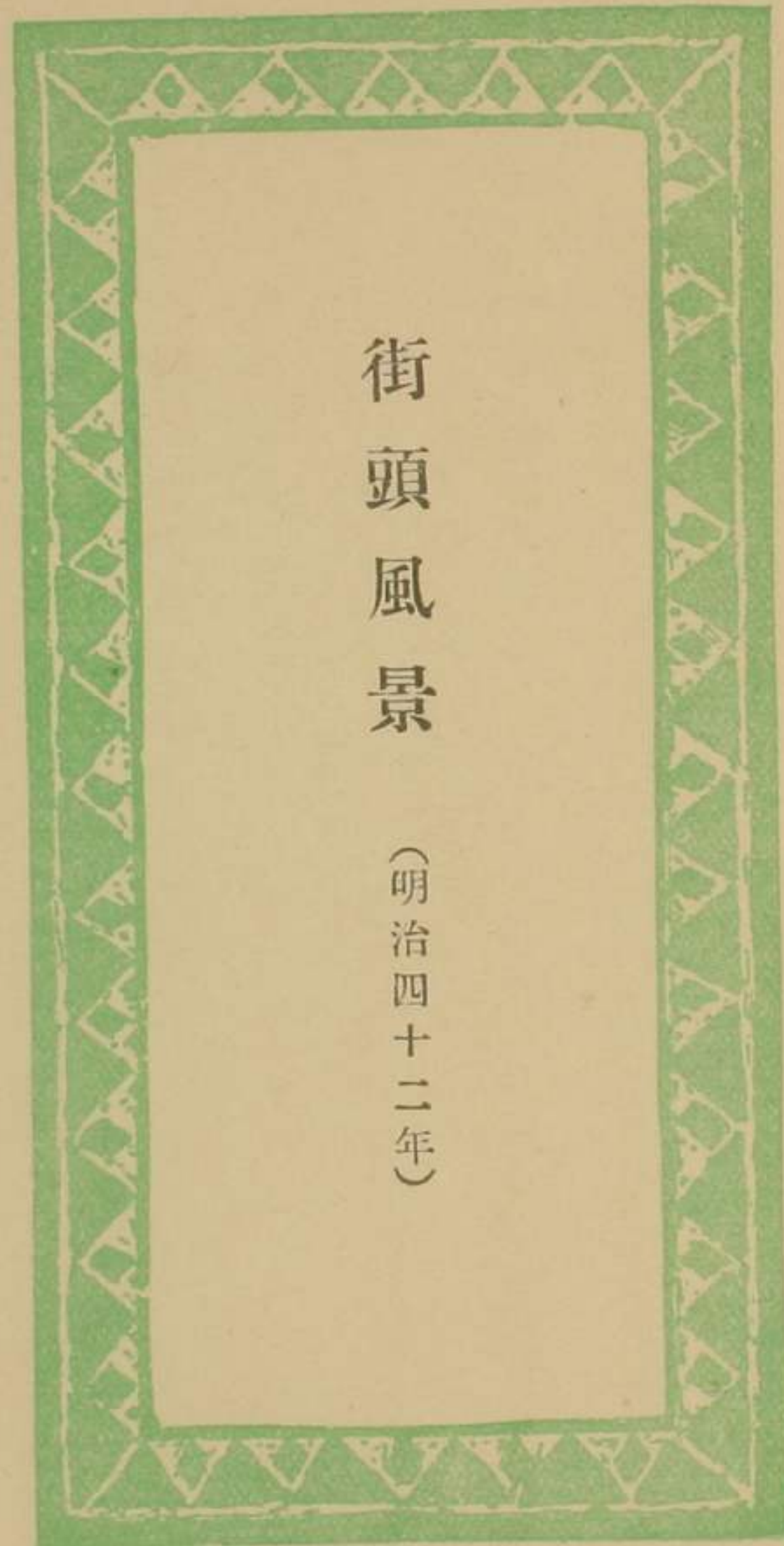
ああ、雲雀よ、竟にお前の憂慮は事實となつた。

一本！ 俺は叫ぶ。叫んで右の手を高く擧げる、お前の髪の毛は、一本、俺の手中を離れて、火鉢の火の上に落ちた。はれ、護謨のやうな奇しな香がする。

二本！ 再び二本目はぢぢと火の上に縮れくすんだ。
 噫最後に、俺は今第三本目を高く火上に翳す。
 曾邊伊傳に、わが髪三すぢやかるる時高架索の山より來
 つて、立ところにわれ現はれむと契ひし阿剌比亞奇話のう
 ちなる魔女の如く、雲雀よ、汝の髪やかるる時汝は急いで來
 なければならぬ。

街頭風景

(明治四十二年)



想の薄明

薄^{うす}玻^{はり}璃^りの水^{みづ}盤^{ばん}に想^{おもひ}を湛^たへ
弦^{ひも}をもて其^{その}縁^{へり}をかろく鳴^ならさむ。

暮^{くれ}方^{がた}の海^{うみ}の如^{ごと}くも想^{おもひ}はゆれて
ひそやかに、なよびかに、大^{おほ}らかに、はたいと暴^{あら}く
玻^{はり}璃^りの壁^{かべ}にうちよする揺^ゆ蕩^{たう}のうら悲^{かな}しさよ。

やありて玻璃の音ぞ丁東と室に澄みゆき、
 且つちかみ、かつとほみ、
 秒を縫ひ、秒を縫ひ、ゆららにうなり、
 あなつひに消えてゆく、
 極みなき「時」の夜の水平線に……

室内はいと暗し、青色の圓き小窓は、
 西天に月や出し、ほの黄ばみおぼめける――。

秒を縫ひ、秒を縫ひ心の庭を、
 薄明を、悲哀の海を、
 玻璃の音ぞ丁東とうなり、たゆたふ。

――青き、青き水平線に……

玻璃問屋

空氣銀縁にしていと冷き
五月の薄暮、ぎやまんの
數數ならぶ横町の玻璃問屋の店先に

盲目が來りて笛を吹く。

その笛のとろり、ひやらと鳴りゆけば、
青き玉、水色の玉、珊瑚珠、

管の先より吹き出づる水のいろいろ――
一瞬の胸より胸の情緒。

流れ流れてうち淀む

流れを引いてびいどろの細き口より飛ぶ泡の
車輪まはせば風鈴もりんりんと鳴りさわぐ。
われも君ゆゑ胸さわぐ。

おどけたる旋律きけど、さはあれど、

雨後の空氣のしつとりと、

うち濕りたる五月の暮しがた、

びいどろ簾かけ渡す玻璃問屋の店先に、

雲を漏れたる落日の
 その一閃の縦笛の銀の一矢が、
 ぎやまんの群よりめざめ
 ゆらゆらとあえかに立てる玻璃の少女、
 (ああ人間のわかき日の
 唯一瞬のさんちまん)
 それを照してまた消ゆる影を見るゆゑ。
 われはそれ故涙する。
 君もそれゆゑ涙する。

落ちし涙が水盤に小波を立て、
 くるくると赤き車ぞうちめぐる。
 車は廻れ、波おこれ、
 波起すべう風きたれ。
 風は来りてりんりと風鈴ならし、
 細君は酸漿鳴らす玻璃問屋の店先に、
 盲目が来りて笛を吹く。

五月の頌歌

さう云ふ五月が街に來た。――

珍らしくも梅雨が霽れ
重重しい灰色の雲を透して太陽が
銀座の角の時計屋の窓の硝子を射とほした。
じいんかつくう……

硬玉、碧玉、土耳古玉、
四つ葉馬薔薇、忘れな草、
また黄金の馬の蹄の留針はむらむらばつと輝いた。
じいんかつくう……
折柄赤銅の小屋の屋根にて鳩は尻尾を高くあげ
一きは高く
じいんかつくうと鳴きければ
主人は片眼より廓大鏡を外し
注意深く机の片隅に置き
いまいましてなる顔をして

時計を見れば短針もXIIの所へ往つてゐる。
じいんかつくう……。

歌ひ時計の氣樂さは

まだ午砲も鳴らぬさきから歌ひ出し、

三味線もつた「萬龍」の首を動かし白眼する

オルゴール仕掛のお座附は

いと興さむるわざながら、

隣の黒人は大さにはしやぎ、舌を出し、

十二の數をも待ち切れずタラントラをぞ踊りける。

じいんかつくう……。

さればあちらでもこちらでも。

それをいい氣に青山の喇叭調練の新兵もどき、

聲の善いのも悪いのも節も調子もお構ひなく

じんじんがんがんじんじんと

正午の鐘を搗きならす——

日曜の寺にも似たりける。

主人額に皺を寄せ、

また廊大鏡を目にはめて、
 タパン會社の特製の機關をみる眼差も
 五月となれば憎からず。

さう云ふ五月が街に來た。

八百屋は八百屋で枇杷の走り——

一寸とお晝の獻立は——茄子のしぎ焼、胡瓜もみ——

花村の店も繁昌する。

羽目に貼つたる淺葱刷、

寄席の太夫のびら札まで

にほひやかにて婀娜つぽく、

吹く風さへも花やかな、さう云ふ五月が來る時は

寄席では風鈴かけ連ぬ、囃しが息むと高座では

圓喬といふ落語家が羽織の紐解きお納戸の

ぞろりとしたのを後ろに投げ、

わざとわが手で頬をうち、顔しかめ、

蚊屋の外なる座頭が夜中

蚊に責められる眞似をする。人さし指で蚊をつまむ。

さう云ふ五月が街に來た。

それ故角の玩具屋の鐵葉細工の噴水は
 玉を轉がし、からからと、また福助は太鼓うつ。
 紺の背廣をかるく著け、
 磨きたての赤靴に
 泥をばつけじと、心持白メルトンの縞ズボンを
 かかげるやうに行く人は
 黄ろい燈のつく鐵橋を
 うち渡り遠き汽笛のゆるやかになが鳴る聞けば
 何となく氣もせはしく、動悸かるく心臓をうつ。

さう云ふ五月が來る時は
 河沿ひの酒場に入りて
 われは靜かに青きベバミントの酒を啜りて、
 頌歌つくるを常とする。
 小さき給仕は給仕として
 居睡するのを常とする。

六月の市街の情緒

舟ゆく、油の如き六月の夜の静けさを……

暗き河岸の檜の新芽のいと甘き匂につかれ、
黄いろなる街燈の情緒の闇を見入るとき、
ふと聴きつるは遠き橋上のはるもにか。

はるもにか、節面白し、六月が来た、来たと鳴る……
わかき女は縞青さやはらかきふらんねるこそ著るべけれ、
その丸肩に觸るる時、學生よ、汝は六月の
ところを知らむ。誘惑のえごきを知らむ。又黒き
工場の門を出で来る白い一群の石鎚造の工女等よ。
柳の下に建具屋に、はた経師屋に遇ふ時は笑ひ囁せとぞ
鳴れる。

されば河岸を行く人も
今宵は女義太夫を聴かむとぞ思ふ。
かく思ふ時既に夜の耳は野崎の佐和理をや夢むらむ。

舟、橋の下を潜る時、けたたまし、電車の嵐……

あはれ、市街の驕慢よ、玻璃問屋は

七寶店と相並び、三階の呉服屋の

軒蛇腹、一列のいるみねえしよん。

夜、銀行の扉は閉ぢて、唯

丸窓のすてんどぐらす、水にうつりて物悲し。

漆器屋……やがて氷屋、

氷屋の扇風器いと重くまじめにうなり、

みるくせいきはがらがらと廻りくるめく……

その軒の……ほのかなる岐阜提灯のかげ、

目をやみて白き帛もて片目おほへる少女、

薄玻璃の口よりあいすくりいむを飲みぬたり。

その冷たさは六月のやはらかき銀河にや似し……

舟は火の如き河の面をゆく……

都會の夏の夜の情調は漸漸に

不飽饜の苦痛に叫び始めぬ。

銀座夜街の散歩をば傭しとして、

人或は正宗ほあるに入り、女つれたる客は

そおだ・をおたあを飲むべく階を登りてぞゆく。

花並べたるばるこんの陰よりは

赤、青、忽にして黄なる
彩色電氣性急に輝きわたり、
蓄音器、外國の鄙猥なる鄭曲を吹き鳴らす。

舟更に大なる鐵橋の下を過ぐ……

肉色の肉襦袢ひしひしと身につけたる女等、
くらりねつとや、おおぼえや、太鼓三味線の音につれて、
怪しく叫び、また踊る——
踊ると見せて生活の苦惱に叫ぶ——
勞れ、飢ゑたる官能の濃き薔薇色の雰圍氣に
つと罷る、これぞ名代の道化方、

くらりねつとや、おおぼえや、太鼓三味線一時にどつと
笑ひ囃しつ。……されど、あな——

空を見よ、空を見よ夜天に黒く十二階ひとりし立てる……

かくて舟港に出でぬ。

大船と小蒸氣と、そが中のわか者ら
歡樂にこがれ泣くめる、哀れなる松前前歌、
ただひとり老いたる漢、運命のごと默せるはあれど……

あな悲し、かくて願望の寂しさに心やふれて
わが小舟海に向ひぬ。

後へには手にとる如く、
なほ聞ゆ、六月の悲痛なる大こんせると……

五月の微雨

五月の雨に桐の花のうす紫、
そのあまき薫ただよひ、
灰色の病院の窓、
やはらかき白絹のかあてんをそと開けて

いまわかきあえかの女、肺をしもやめる女、
なみだぐみ、花に見入れる……

燕は来り、また去れる……

むしろかのええてるの、はたやはた　くろろふあるもの、
夕暮の限もしれぬ
海に似る薄闇の眠のはてへ、
そのはてへ、そのはてへ往かましかばと、
涙ぐみ女思へる……

篠懸木のわか葉ふるへる……

雨のいろ利休鼠の銀なして
しとしととうす紅き煉瓦をひたし
花も無く荒れにたるわか草の醫院遊歩場の
垣のあなた、遠き山、遠き森、街を罩めたる……

あはれ、あはれ、五月の晝の病む情緒。

吉井勇に與ふ

たはけたる酒ほがひかな主めく吉井勇に一矢くれむず

恒河沙の商女の中に恒河沙の汝等は羣るるわれ獨りゐる

汝等に見すべき胸の痛手かはうみたるまゝに甲につつむ

酔ひしれて歌などうたふなが胸は半斗の酒に足るところ
見ゆれ

考ふることなく歌をよむ人は子生みては死ぬ女に似たり

わが琴は海の面に似る風ありてやすからざればおのづか
ら鳴る

うめ草

雑誌「スバル」の校正の時餘白を埋むる爲めに印刷
所にて作れる歌

歌聞ゆかくてまた見る「不放逸」扉の銘は昨日におなじ
胸の傷うち措き得たる矢の原をたづぬるごとし女を眼守
る

乳緑の海の面のごと美はしく遮莫あまりつめたき

四個の壇わけても北の調伏壇胸なる邪魔をはや追ひたま
へ

目を扶るかくても聲は聞えたり耳刺すなほも幻ぞする

春くれば蛇さへ皮を脱ぐものを清次郎の迷などてさめぬ
ぞや

われをまた十百千の道側の人とおなじく見て過ぐる人

残れるは獅子團亂施の樂ならずさても笑止や君の聲なる
 讃ずべき神を見ざれば今假りに汝が瞳を恭敬するのみ
 な憂ひそ戀は小川の底に似る雪とけぬれば新しき來る
 酒神の一族がいま森に入るさこそあるらめわが心鳴る
 冷きもののもとも冷かる巨いなる都府の扉に短銃をうつ
 かく思ひかへせば何かこはからむ大槌もて黒き扉を打つ

曲中人物

(明治四十三年)

老いたる人の海岸の獨白

一 鷗の死

鷗は死んだ。——今まで
身を習むやうな——われと我身を習むやうな
暴い「復讐の念」にせき立てられて、
黒い海と、空と、島との間を縦横に、
寧ろ「無」の底へでもゆけと翔つて居たあの鷗が——。

「復讐の念」、それは自分自身に、
及び其母に、其父に、其同胞に對して
月頃日頃、胸の奥に匿しておいた其おもひに――。

痛ましくも灰色に濁つて居るでは無いか、海的面が。
見なさい、太陽の影が
青く――苦い微笑の如く暗澹と、
それでも波に碎けて居る。渚まで流れて居る。

Zabr'n, ara zabr'n, zan zabr'n, se……er……
聽いて御覽、それでも波は優しくつぶやいて居る。

「復讐の念」、ああ暴王――それは一種の暴王だ。
而も形のない暴王だ――永久の生の――。

いつ人の、動物の、可憐なる鳥の、
宇宙の中心に、胸に、翼の裏にはひつて來たか分らぬけ
れど。

だが事實――それは實在だ。
その爲めに己の知つてゐる――いや己の幼馴染の
ある富豪の息子は其の家を出奔した。
その子といふは――ありとある満足、
父母の寵愛、官能の快樂、一として缺けぬ
幸福な家庭のうちに育つたのだ。

唯、彼の父親が、
彼に病中の飲酒を禁じたが爲めに父の家を出奔した。
また彼の胸は此復讐のおもひに苛責れたのだ。

己はまだ知つてゐる。

中年、己の近付きになつた陶器師は、もと、

陶器焼が厭で親父に叱られた。

それを怨に思つて一生かかつて立派な七寶を焼いたのだ。
出来た花瓶で親父の額を破る爲めにと。

それでもまだ

あの故もなき復讐の念に、火のやうな暴王に

追はれて居た間は熱もあつたのだ、はげみも、望も。

然し花瓶を破つたあと、海の彼方に走つたあとには……

もう死んだのだ。凡ては死んだのだ。ただ疲労と、

重い灰色の退屈と、無氣力な悔恨と

そうして過去の生活の疑と、死の恐とで、

はかなくも病む身を旅の空に、獄の中に轉すのだ。

ちやうどその鷗のやうに……

鷗よ。

海——。來ては返す生の波よ、

波は鷗の一羽、一羽を濡してはまた返してゆく。

Zabr'u, ara zabr'u zan

二 夜の港の悲哀

海は暗し。

Za-an, Zabr'u, se-er,

Zabr'u, za-an, se-er,

螢石のやうに青く碎ける波の戯を眺めると、
またしても胸にめざめる不思議な心持——

「夜の港の悲哀——」

さう云ふ言葉で俺はそれを表はしたい。

古く、古く、慣れに慣れた情緒だけれども

あの Zabr'u の音を聴けば今更に思ひ出さるる。

其時も亦今の如くに、内海の柔い波は

波止場の石垣に當つてはやさしい Zabr'u を鳴らした。

午前零時——沈沈たる黒き水の面の

熟睡する巨人の如き商船の三箇の燈火。

最も高きは黄色、
中段の青、
低く真紅の燈。

鐘鳴る——夢の如く——鐘なる。また續く寂寞……

船宿の給仕は

「お客さん、出帆です、

船が出ます、解舟が出ます、起きて下さい」と呼ぶ——
それでも深く眠入つた人たちは起きようもしないのだ。

寂寞たる夜の海、
夜の港の悲哀——

たとへば幽冥の世界を追はれてゆく罪人の亡魂の如く、
音ひびく、悲しき音は——眠りたる「自然」の呼吸の如く、

「ええい、なんなあええ……え、八つええ……
八つ、八つ、八つ……え、九のおええ……」

商用の爲めに餘義なく海を航する人も、
何も知らぬ船室の給仕さへも、
誰でも夜半の港にこの聲を聞いては胸に寄する壓迫の

解し難き重たさに驚く筈だ。

ましてや一生を酒と女と博打と音曲のうちに暮して

鬚に白毛の雑るのに驚いて、人足をする人は、

或は小さい戀、恨に故郷、父母を捨てた人は、

或は抗し難い運命に追はるとなく追はれて

他國の港に人の荷をかつぐ男は、

どうして悲しまないで居られやう、かくて彼等は、

互に背と背とすりあはして人生の數奇に泣くのだ。

かかる時、どこもしもなく、
濕みある低い聲で――

「……鳥も通はぬ八丈が島にやらるる此身はいとはねど、

あとに残りし……」妻や子と呟くやうに歌ふ男があれば、

或者は猛然と立ち上つて、

既に久しく忘れてゐた溺愛の日を思ひ出す苦しさに、

拳を固めて罪もない唄の主をなぐるのだ。

或者はつと胸にこみあぐるすすり泣をかくすと沖の燈を
噴くのだ。

汽笛が鳴る。

ぼおつと汽笛が鳴る、

またしても給仕が叫ぶ。

遂にまた彼等漂浪者の群も立ち上るのだ。

暗い渚の

まだ残るすといき節のしり聲をききながら……

海は暗い。

子等よ——お前たちはまだ知るまい、あの黒い海の秘密

を——

しかしやがてそれを知る時が来るのだ。来てそれから
或時俺がここでかうして述懐したことを思ひ出すだらう。
見なさい——波は人の世の物語と運命とを知らぬがほに、

また寄せては引き、引いては寄せて、きちきちと小石を
鳴らす。

Zabr'n, za-an, se-cr……
Za-an, zabran, se-cr……

門を守る老人の獨白

屢然しわしは不安を感じることがある。
乳臭い青年の聲が

「もう標準が違つて居るのだ。その時の価値は、
もう今の価値では無い。寶物はむされてしまつて、
みんなぼろぼろに破れてゐるのだ。」
さうわしの耳許で嘲笑つてゐるやうにも思はれるから。

わしは何も訴へたくはない。
然しこれだけは言はしてくれ。

今までわしはどんな時でも、むだに暮したと言ふことは
なかつた。

屹度何かかして
みんなこの庫の内へしまつて置いたのだ。
ただ一つわしが怠つたことがあるとすれば、
是等の材料を整理しなかつたことだ。
さうだ、是れから一生懸命になつて、
いままで集めたものに系統をつけよう。

おお、青年たち。

君達の姿は見えないが、聲は聞える。
 みんなわしの前に立つて大聲で笑つてゐる。
 君達のめいめいに要求するところのものは、
 無論悉く嘗つてわしが要求したところで、
 その煩悶も、解釋も、またそれからの新疑問も、
 わしはみんなこの庫の内にしまつて置いたのだ。
 さあ、見せてやらう、見るが可い。みんな昨日のまゝに

新鮮だ。

この庫の中にあるものは、みんなわしは覚えてゐる。
 極めて正確なわしの記憶は凡てを脳髓の帳簿に記載して
 ある。

ただわしの頭の書庫は
 暗すぎる。わしの眼はかすんだ。

燈がほしい。一點の燈が。

その燈の影さへあれば、すぐにわしは
 いろいろの索引を集めて新しい系統を立てる。

燈が欲しい、燈がほしい。

唯その燈がほしい。
 もう幾年といふ長い間、わしは薄暗い森の中にあるのだ。

異國情調

(明治四十三年)

北原白秋氏の肖像

……願ふは極秘かの奇しき紅の夢……（邪宗門）

性慾の如くまつ青な太陽が金色の髪を散して、
異教の寺の晩鐘の呻吟のやうに高らかに、然しさびしく、
河の底へ……底へ……底へ……と沈む時に、
幻想の黒い帆前は
滑つて行く……音もなく……
明るい灰色の硝子の外で、

氏が倚れる窓の後で――。

されば其光の顫音は悲しく、

氏の銅色の額に反射した。――恰ら

青の鶯が落日の檣の森で鳴くやうに……

雲の彼方の蘆會花咲く故郷へ、故郷へ、ねえ、故郷へ……

氏は卓の一角から罪色紅の Curacao を取つて

薄玻璃の高脚杯に垂した……重く……緩かに……。

その懐しい錯心のやさしい呼吸づかひの中に、

赤、紺青、土耳古珠色、「黄なつぽろ」Sentiment 色、

そのあまり日向つぽ過ぎる新しい（やや似合はない）

背廣の文の音楽に首を埋めて

（かの邪宗、その寺の門前に梟首れた怪僧の額のやうに）

烈しい異國趣味に飢ゑ爛れた氏の表情は、

新に南洋から歸つた商船の事務員の如く、

ひたすら卓上の罌粟の唇を見詰めて居る。

（かの黒い幻想の帆前は力なく黙したのに――。）

秋の日曜日、日の雑沓を恐るる象、

その如く濁つた瞳、瞳の中の青い花は、

日本の――厭いた、勞れた

晝の三味、女の島田、音も低い曲節から、

ああ、せめては中に雑る合徳の進行曲から、
 『空にまつ赤な雲の色、玻璃にまつ赤な酒の色』から、
 河に面した厨の葉牡丹の腋臭から、
 日を受けたタンク蒸氣の引いてゆく Calence から、
 はた其かげの痛ましい植古聿の
 とぎれとぎれの Strauss、Gauguin の曲調の
 うち絶えつ、またも響く柔い薫のうちから、
 氏の厚い紫の唇は苺の紅い靈魂を求めて居る。
 腫の青い羅曼底は忘れた故郷の香を捜して居る。

日が暮れるまで……

日本の憂鬱な十月の夜の彼岸に
 寂しい三味線がちんちんと鳴り出すまで、
 なほも善主鷹、お・お・らつしよの祈をつづけながら……
 無益にも……

月の方に青ざめた帆前の黒い幻想を眺めながら……

日本在留の歐羅巴人

東京に於ける年壯き歐羅巴人
日本 Musme, Geisha-girl, 夜の三味線、
Japanese Sake, 提灯、喜多川歌麿
日光、鳥居、Samurai, Yoshiwara-Oran。

濃き——灰色に濡れる日本の薄暮の空氣、
いと甘し、十月の二〇日の窓に倚る心、

——輕らかに口笛吹き、
落日を眺めるやうな眼付して——且つ夢む、年壯き歐羅巴人。

ふと見る、門前の柳の陰には、
ちようど六月の月見草のやうに——ぱつちりと、
もう黄ろく、鮮かに瓦斯燈が點いたのである……懷しく。

街道を行く藝者、Dshirikisha、
日本の紅提灯の不思議なる美しさ、
骨董店の硝子の戸、古錦繪を賣る女、
黒衣せる佛教僧侶、

その唱へ行く紫摩金の印度古代の Recitativo.

寂しきは、その鳴らす銀鈴の音、

花瓶にあたる電燈、

また塵頭の能の面、青き微笑、香の煙、

鎧、長刀、光琳 and 岩佐又兵衛、

Kakemono——櫻花淡紅に勻やかに

吹き暮るる春の宵、歌小唄、豊國の『花下遊女の圖』

われは夢む、Fuji-Yama、美しき陶器の國、日本。

紅の日傘を翳し、合唱の節も哀れに

Kwanon-Sama にお詣りに行く褐色の女の國。

その紅い振袖には、Kikyo の紫の刺繡、

刺戟の強い Pachelbel 香の四月のやうな雰圍氣は
乳色のまろい關節を包むのである……狂ほしく。

狂ほしく彼等は踊る……日本の Guitara の

三味線の音律の波のうねりに、

赤と金との扇の繪、うち顫ふ緑の燭、

米からの酒、Yedo への憧憬、音づれ来る樂慾の手、

色斑らなる雪洞の夢のまたたき、

Aphrodite の比丘尼等の物語めく裾さばき……

…… Kwanon-Sama の鐘の響……

ああ官能の狂亂と、藝術の古き愁、
われは憐き野獸のやうな『生』から逃れて
そこに汝の凡てを被ふ柔かな Morbidezza を求めるのだ。
その爲めに緑の海を遙遙とここへ來たのだ、美しい日傘
の國。
だがもう鐘の鳴りやんだ死の如き夜の静さには
美しい Oiran も居なかつた。Prince Genji も居なかつた。

ああ東京に於ける年壯き歐羅巴人。
日本 Musme, Geisha-girl, 夜の三味線、
活動寫眞、市中樂隊、豆腐屋の笛、
中將湯、Musme-Gidayû and Striki-Bushi.

濃き——漆の如く濁れる日本の夜の空氣、
いと悲し、十月の Hotel の窓に倚る心。
音もなき隅田川、たまたまは遠き船拍子、
北齋が古き Lyric、街角に起る拍子木。

憂はしく……海底を眺めるやうな眼付して、
重き Sherry の杯を口にあつ……年壯き歐羅巴人。

邪宗僧侶刑罰圖を眺むる女

二五二

予は、とある酒場で女の横顔を眺めてゐる。
漆黒の髪の毛には緑玉の色に電氣が反射し、
牛乳の如き白色の襟には紫の陰が淀んだ。

常に横を向く女よ。予は慊らず思ふけれど、
思ふけれども予は汝の見つむる……
汝の見つむるあの奇怪な繪を見ることが出来ぬ。

予は知つてはゐる。吉利支丹邪宗の信徒は
炎炎たる焔の中の樅木の上から、

『命だ。命だ。わかい日の爲めに、

彼のですの爲めに、我が麻利亞の爲めに
我は殉教の苦痛を忍ぶ』と叫んでゐる――

『我神よ、我神よ、永しへにわかき命をよ』と。

予は寂しく、濃い楮古事の中のスキイの匂を嗅ぐ。

予は殉教者の傳記を瞥見する。

予は毒の如く赤く記されたる異國の淫詩を読む。

二五三

それから故しらなく悲しく——玻璃窓から
月夜に、氷のやうに煌く河の彼方の市街を見る。
予の心はいつか嘘啼を始めた。地を抱いて死にたくなる。

其刹那、ふと氣付いてまた汝の見るものを見る。

女の湖の如き眼はひたすらに蠻人刑罰の圖を眺めてゐる
.....

暮れゆく島

十月の餘りに熟した果實のやうに
柔かに且溫い汝の胸に依るとき、
日本の絹のにほひ……奇しき異國の香料の
蠟の如くほのかに薰るをきき、予は不思議の國を夢む。

櫻の島、春の小島、美しい日傘の國、
黄銅の鳥居には勻やかな落日が巢くひ、

褐色の女等は三味線を弾き鳴らし、

永へにやまざる噴水の律は永へに盡きざる不可思議の美

を語り

赤い天鵝絨の僧侶はひたすらに首を傾け、

乳金色に輝ける寺の白壁の前で

オロンの絃をすり、絃をすり、異教の祕密を説き……

りいりいりい、りいりいりいり……

女よ、汝は今、體を動かしてはいけない、

汝の運動は予が幻影の國を擾すに足りる。

予は今落日が大輪の花の如く紫に、

海の果に沈むのを櫻の丘から眺めて居るところだ。

然し……仕方がない。もうさう云ふ間に予が島は微んでしまつた。

では女よ、予がこの杯に哀深き CURAÇAO の酒を注げ、

その緑の燈籠に新しい蠟燭を點せ。

十月の果實のかをり、汝が胸の麝香、

鮮かな沃土の色の CURAÇAO の抒情詩のにほひ。

女よ、少し汝の腕を滑らせる、日本の柔かな絹の皺に

予の額は尙、暮れて行く島の觸感を尋ねるんだ……

SAFFRAN

ニコライ堂の鐘が鳴る。
 金曜日、
 秋の落日のいたいたしさ。
 葬具屋の店先の貧血のわかい女が
 青い硝子から往來を眺める……眼、

その眼のやうな泪芙藍
 悲しい泪芙藍……

……鐘の音が鳴りやむまで……

『異人館遠望の曲』の序

櫻の花の間から紅い煉瓦の異人館が見える。

いま落日は金色にくわつとばかりに居留地の
屋根といふ屋根、窓のびいどろ、
また『コンシユル館』三階の望樓の上の米利堅の
赤の號旗に降りそそぐ
沖の蒸氣に降りそそぐ。

また彼方なる亞墨利加の三十三番『ウエンリイド館』
黄金の獅子の招牌のぺんきの軒に降りそそぐ。

花を置きたる窓の欄干に、異人なれども懷しや、
まだ年若き英吉利斯人は、口笛の
悲しき節に歌うたふ。
商館の奥より漏るるおるごるの曲に合せて歌うたふ。

短い春のいとほしや。

されば港も、居留地も、竝木の遊歩新道も、
阿蘭陀賣場、運上所、飛脚所、
さては天主堂前の廣場も、公園も、

歌ひ狂へる一羣の遠方此人に満されたり。

沖には蒸氣帆船、

英國女王の遊山船、異國造りの幡龍丸、

いま下す荷のかげ聲の異國訛もなつかしや。

南蠻、波斯、伊期巴爾亞、

世界は廣し、萬國は亞細亞、阿弗利加、歐羅巴、

中にも印度黑人の、今日は頭飾も新しく、

棧留縞を巻くもあり、

俄魯西亞更紗を巻くもあり、

或は日本縮緬の緋鹿子絞を巻くもあり、
また南京人は聲高に

「べけべけさらつばあ」などと呼ぶもあり。

其他龍吐水置場の前の横町を

驚に似たる洋妾の顔に網かけ阿蘭陀『ジェネラル』と行く
もあり。

何は兎もあれ、今日は彌生のどんたくの

花の盛りの入日時、

港も遠く緑金の光に濁り、

波止場なる酒場の窓にまどろすは

目を細め空の檣うち眺め、悲しみ、或は肉叉とり、

酔ひつ歌ひつ、口説きつつ女を挑み争へり。

その狂亂の大海の色、酒、女、ぎやまんの
そのきらぎらの搖蕩の地平の果に
いつしかに紫の夕陽は沈み、ほのぼのと

櫻の花の間から紅い煉瓦の異人館が見える。

跋

(横濱及び異人館情調)

昨夜は一晚かかつて異人館遠望の曲といふのを
書かうと、いろいろに苦心したが思ふやうに行かな
くつてたいへん腹立たしかった。

その時自分の心持を集中せしめようとて明治十
年頃の異人館の三枚綴りの錦繪を壁に掛けて置い
たが、それもそのまま魔力もなく、けさの朝日に黄ば
んでゐる

それでも今まだ僕の耳の奥の方には遠い潮の如

く異人館遠望の歌のメロディが鳴つてゐる。僕は
どうかして昔搖籃の内で聞いた「野毛の山から」の歌、
その節の嘗つて起した濃厚な情緒を、「記憶」の霧深
い月夜から、明るい創作の机に出して來たいと思つ
た。それは無益であつた。恐らく僕の企は音楽を
藉りないでは成就しまい。……櫻の花の間から赤
い煉瓦の異人館が見える。三階の樓には米利堅の
旗が立つ。港に面した側には緑色に塗つた軒の
露臺がある。わかい夫婦らしい異人が落日で紅く
染まつた水平線上の春の空を眺めてゐる。腹のと
ころに車の附いた三本橋の乗合蒸氣船が黒い煙を
あとに残してやうやく暮れてゆく港の外に向ふ。
しばらくして微んだ船の橋に黄るい航海燈がつく。
琴、羅面絃、三味線などの聲らがはしい音曲が起る。

わかい二人の異人は露臺から離れる。
かかる時ゆるやかな角の音が遠くに起る。丹緑
で塗つた四輪車が街角をまがつて異人館の下に來
かかる。女の人たちは紅い日傘をつぼめた。別當
があちこちの名所を説明する。南京輿人力車町の
娘、洋妾阿蘭陀シエネラル……春の宵の雑沓の中
で、四輪車の人人は灯ともし頃の悲しい心持になつ
て、窓の奥を見上げる。そして騒がしい音楽の中に
まじつた一いろの悲しいオオホエの響をいぶかし
む心持。
いつかもう市街には緑金色の燈がついた。紫に
青んだ白壁の高塀から、ぼつと溶けた白金のやうな
櫻の花のかたまりが燃え出でる。
まづざつとかう云つたのが、此オルケストルめい

たものの序曲である。さていよいよ本篇の筋をば
 ごう運ばせようか。オオボエの傳ふる悲哀をばご
 んな人の姿にして現はさうか……
 拙い錦繪はかう云つたやうな方角の新藝術を暗
 示してゐる。然しわれわれの持つ音楽はその要求
 を饜へてやるものではない。長唄、浄瑠璃、常磐津……
 ……娘道成寺、順禮、一立齋の江戸百景、長春歌麿が美
 女、若衆、彼等にはそれら音楽でよからうが、異人館遠
 望の曲にはもうこれでは不足である。
 などとは考へるが、僕の異人館の曲はなかなか形
 をあらはして來ない。

食後の歌

(明治四十三年)

金粉酒

EAU-DE-VIE DE DANIZICK

黄金こがね浮うく酒さけ、

あお五月ごご、五月ごご、小酒リケエルグラス盞さん、

わが酒舗サカベの彩色スチエンド玻璃グラス、

街まちにふる雨あめの紫むらさき。

をんなよ、酒舗の女、

そなたはもうセルを著たのか、

その薄い藍の縞を？

まつ白な牡丹の花、

觸るな、粉が散る、勻ひが散るぞ。

ああ五月、五月、そなたの聲は

あまい桐の花の下、堅笛の音色、

若い黒猫の毛のやはらかさ、

あれの心を溶かす日本の三味線、

EAU-DE-VIE DE DANTZICK

五月だもの、五月だもの——

(Amerikaya-Bar に於て)

兩國

兩國の橋の下へかかりや
大船は檣を倒すよ、
やあれそれ船頭が懸聲をするよ。
五月五日のしつとりと
肌に冷き河の風、
四ツ目から来る早船の緩かな艫拍子や、
牡丹を染めた絆纏の蝶蝶が波にもまゐる。

灘の美酒、菊正宗、
薄玻璃の杯へなつかしい香を盛つて
西洋料理舗の二階から
ぼんやりとした入日空、
夢の國技館の圓屋根こえて
遠く飛ぶ鳥の、夕鳥の影を見れば
なぜか心のみだるる。

街頭初夏

紺の背廣の初燕
地をするやうに飛びゆけり。

まづはいよいよ夏の曲、
西——東西の簾巻けば、
濃いお納戸の肩衣の
花の「昇菊、昇之助」

義太夫節のびら札の
藍の四田もすずしげに
街は五月に入りけり

赤の襟飾、初燕
心も軽くまひ行けり。

*珈琲の中にコニヤツクの酒入るるを好み
たまふほどの人は、この行の次に「いよ御雨
人待てました」の一行を入れ試みなまへ。

珈琲

今しがた
啜つて置いた
MOKKAのほひがまだ何處やらに
残りゐるゆゑうら悲し。
曇つた空に
時時は雨さへけぶる五月の夜の冷さに
黄いろくにじむ華電氣、

酒宴のあとの雑談の
やや狂ほしき情操の、
さりとて別に是といふ故もなければ
うら懐しく、
何となく古き戀など語らまほしく、
凝として居るけだるさに、
當もなく見入れれば白き食卓の
磁の花瓶にほのぼのと薄紅の牡丹の花。

珈琲、珈琲、
苦い珈琲。

五月

五月が来た。郊外を夕方歩きや
家家の表で藁を燃すにほひ、
林の櫟に新芽が出、
葉茶屋に新茶、
浴衣の新荷、
伯爵家の別荘に罌粟の花が咲いたげな。
人をたづねに街を行けば

酒屋の電燈が薦の銘を照らし、
みすぼらしい小間物屋にも夏帽子が出、
そして呉服屋で暖簾を取込む。
五位鶯が鳴く原を通つて小川に沿つてゆき
早くあいつに會ひたい。せめて家でも見たい。
柔い風が吹く。もう月も出だす。
五月が来た、五月が来た、
一年経つてまた五月が来た。

立秋の日

秋風が立てば、問屋にも
浅黄裏地の新荷が著く。
新川新堀の酒屋にも
上からの船が著く。
えんやさの、これわいさの、よいやな。
火の見櫓に懸る日の

金茶の色もかなしや。
眞岡木綿の紺のにはひのなつかしき
土藏の屋根の忍びがへしに薄ら日影のあたるさへ
秋となればさびしきものを、
まして出窓の浦島草のそのまま枯れたいいたしき。
角の釜屋の末の娘の嫁にゆく噂さへ、
大山がへりの祝ひする家の窓さへ、したみさへ、
また河岸ぎはの屋臺鯨屋の小鰭さへ……
それやこれやに弱くさす秋の入り……
えんやさの、これわいさの、よいやな。
日が落ちれば、もう肌に冷い風、

あれ江戸橋に燈が點いた、緑の燈がついた。
 瓦斯の燈さへもゆらゆらと流るる水に揺らるるものを……
 いたいけな聲して
 魚河岸の窓から漏るる稽古の三味の梅の春さへ、
 堀を外れてほのぼのと
 遠い河口の汽笛の音さへ、
 秋となればさびしきものを……
 よいやさの、これわいさの、よいやな。

該里酒

〔鴻の巣の主人に〕

冬の夜の煖爐の
 湯のたぎる静けさ。
 ぼつと、やや顔に出たるほてりの
 幻覺か、空耳かしら、
 該里玻璃杯のまだ残る酒を見入れば
 ほのかにも人の聲する。

ほのかにも人すすり泣く。

「ええ、ま……あ、なあ……にご……と
ぞい、な……あ……」と

さう言ふは呂昇の聲か、

此春聴いた京都の寄席の……

それをきいて人の泣いたる……

乃至その酒の仕業か。

冬の夜の静けさに

褐く澄む該里の酒。

さう言ふは呂昇の聲か、

乃至その酒の仕業か。

幕あけて窓から見れば、

星の夜の小網町河岸

舟一つ……かろき水音。

市場所見

沖の暗いのに白帆が見える、
あれは紀の國蜜柑船。
蜜柑問屋に歳暮の荷の
著く忙しさ——冬の日
は慘澹として霜曇る市場の屋根を照したり。
街の柳もひつそりと枯葉を垂らし、

横町の「下村」の店、
赤暖簾さゆるぎもせず。

街角に男は立てり。
手を舉げて指を動かし
「七番、中一あり」と呼びたれば
兜町、現物店の門口に
丁稚また「中一あり」と傳へたり。

海運橋より眺むれば
雲にかくれし青き日は
陰慘として水底に重く沈みて聲もなし。

二九〇
時しもあれや蜜柑船、
橋の下より罷りいづ。
そを見てあれば、すずろにも
昔の唄の思ひ出づ。

あれは紀の國蜜柑船。

鷗

二九一
夕風の空に飛ぶ鷗よ。
房州の山の見えるに、
水施餓鬼する坊さまの赤い法衣の
海の波にうつるに
何でさうかなしくは鳴く。
夕風の空に飛ぶ鷗よ。

物いひ

四本柱の總立に
棧敷いろめく國技館、
かはいお酌があられもな、
聲をはり上げ「明石龍」。

竹枝

(明治四十三年)

こぞの冬

十一月の風の宵に
外套の襟を立てて
明石町の河岸を歩いたが
その時の船の唄がまだ忘れられぬ。
同じ冬は来れども
また歌はひびけども
なぜかその夜が忘れられぬ。

こほろぎ

こほろこほろと鳴く蟲の
秋の夜のさびしさよ。
日ごろわすれし愁さへ
思ひ出さるはかなさに
袋戸棚かきさがし、
箱の塵はらひ落して、
棹もついで見たれども、

あはれ思へば、隣の人もきくやらむ、
つたなき音は立てじとて、その儘におく。
月はいよいよ近えわたり
悲みいとど加はんぬ。
晝はかくれて夜は鳴く
蟋蟀の蟲のあはれさよ、
しばしとぎれてまた低く
こほろこほろと夜もすがら。

松の木やり

坪庭に植うる松なれば、
目出たき松なれば
枝は折るまいよ。やあれさ。

紺の暖簾もなつかしき
老舗の奥の坪庭に
御祝儀の松入るるとて木やり唄。

やれ目出たや
二本のめをの松、
この松は常磐の緑、
木戸口は狭くとも
松の枝は折るまいよ。

やあれさ、えんやらさ。
松の枝は折るまいよ。

絳絹裏

床の間の筆をとりにと
土用千しの下をくぐつたら
小袖の裾に觸れた。
襟もとの、

何ともいへぬ亂れごころに
はつと思つて首は引いたが、
南無、神も咎め給はじ、
いまは亡き人の片身なれば。

紙入

この紙入は
土用干しの簞笥からころげ出た
鼠羅紗の紙入。
中には古い書付が
ももくちやになつて入つてゐるさうな。
もしや女の幽霊でも

祟つてはこはいほどに、
金具はとれて裏をあらはすとも
捨てるなゆめ。
中も開かてまた入れて置け、
いづれ腐る日が
あるだらう、鼠羅紗の紙入。

秋

下席の「國定忠次」

寄席の燈もうるむ夕ぐれ、

誰がうたふ船の唄の追分。

いづれは悲し、永代も薄くかすみて

伊豆行か、汽笛響きぬ。

渡し場に人も絶え、鷗もかへり

はや夜の風の身にしみる秋の悲しさ。

なでしこ

船バラス、海燈明を賣る店の
崩れたる壁ぎはに古錨赤く錆びたり。
夏に遅れし撫子の花のあはれさよ。
夕となれば

一しほに身にしみる秋の風よ。
共同便所の瓦斯の燈さへも
しつとりと縁に濡れて、
歌悲し、遠き船の追分。

海の入日竝序

三〇八

……この南國の半島に於ては自然でさへも輕佻である。日のうちに海や空が幾度その色を変へるか知れはしない。遠く水平線の上に相模の大山の一帶が浮んでゐる。予の見たのは夕方であつた。線の水の上の入日を受けた大山の影繪は眞に疊氣樓であつた。その赤と云つても單純の赤ではない。燈光に照らされた自然銅鑛の赤である。そして其日かげの紫は正に濁つた螢石の紫である。其間に

も殊に光つた岬影の一部は、あかあかと熱せられたる電氣煖爐の銅板の面よりほかに比較の出來ない光澤に閃いてゐた。遠くこなたの岸からその不思議な陸影を眺めてゐると、いつか心は阿刺比亞奇話のあやしい夢の國に引き入れられるやうに思はれて來る。

濱の眞砂に文かけば
また波が來て消しゆきぬ
あはれはるばるわが思、
遠き岬に入日する。

三〇九

石竹花 竝序

ある日の夕、暇乞にと縁者の家を訪れ、其家の老女が昔話をきいた。東京からさう遠くもない港へ押送が入つて學問好きな人の家に「窮理問答」「世界膝栗毛」「學問のすすめ」などが齎され、「當世女房氣質」「北雪美談」の竝ぶ本棚を占領し、英山、英泉の華魁、豐國、國貞の役者繪、國滿が吉原花盛の浮繪などの繪巻の後に芳虎が「英吉利國清親」が「東京名所圖」や「無類絶妙英國役館圖」「第一國立銀行五階造」の圖などが繼ぎ

足され、獵虎帽の年寄が須彌山説の代りに西洋會密の話をし始めたころの事である。予の眼には其時代の人人の姿がまだありありと残つてゐる。そして古い文庫から其當時の遺物を捜し出す心持は一種特別である。「雨の夜に通ひくる黒船の天津繪」「横濱へ通ふ蒸氣は千枚張りの友車」この家へ通ふは人力車の甚句は今なほ耳朶に在つて、その曲調の回想には涙を催すの悲哀が伴ふ。もと押送に乗つて東京通ひをしたといふ船頭も今なほ生きてはゐるが、其當時の氣分を思ひ起すにしては皆餘りに老い過ぎた。子供等もはやお白お白の白木屋の才三さん丈八つアんの毬唄は唄はぬ。其代りに幸にもそんな唄は今聴くとその聯想

が直ちに朦朧たる過古世を開く。がそんな聯想の後には、またさう云ふ世界の段々と崩されて行つたといふ痛ましい記憶が続く。其中にも予に最も深い印象を與へたものは耶蘇教の傳來の沿革である。初めは小さい家に日曜日の夜毎に紅い十字の提灯が點された。それが廢れたころには怪しい、一人の男が寂しい村道に立つて夜夜辻説教をした。いるいる思ひ出して來ると、十年二十年の間にも悲しい有爲轉變がある。予はその家を辭した後に、海濱に赴いて、文色も分らなくなるまで海の面を眺めた。成程人の世はかく變るが、然し二十年三十年否、否更にその前にも或はわかき人のまた今の予の如く、はかなき幻像と悲し

い感情とを抱いて、かく海の前に立ち盡したものがあつたかも知れぬ。

夕暮がたの濱へ出て

二上り節を唄へば

昔もかく人のうたひと

よぼよぼの盲目がいうた。

さても昔も今にかはらぬ

人の心のつらさ、懷しさ、悲しさ。

磯の石垣に

うす紅の石竹の花が咲いた。

町の小唄

(明治四十三年)



夜學校

土曜日だのに、もう九時だのに、
夜學校にはまだ燈が點いてるよ。
あれお聞き、鐘が鳴る。
なんぼ何でもねえ。
早く退けたらいいのにねえ。

林檎屋の小娘

林檎屋の小娘が
今日もまた前掛で
紅い林檎を磨いてゐる。
息をかけては拭いてゐる。

だがまだ林檎は堅さうだ。
ちやうどお前の心のやうに。
せめて、あの人にでもとねえ、
拭けばいいのに。
まだ情を知らないね。

窓の女

新開、新開地の
酒屋の隣の
乳屋の二階の
窓の女
夜になるのに化粧する。
……別に不思議もないんだが。(だがね。)

お榮さん

雨が降つてもかありかり。
風が吹いてもかありかり。
汽船問屋のお榮さん、
手紙書くには書いたけど、
聴くか聴かぬか氣にかかる。
かりかあかりかどつこいさのさ。

道のあちこち

道の向うを女が通る。
頭巾目深に通る。
こつち側をば男がゆく。
寒むさうにゆく。

誰も知らない夜道だもの、
それに急ぎでもなさうだもの。
たとひ知らない人だとして、
一緒に行つたつて可からうにね。

築地の渡し竝序

三二四

築地の渡しより明石町に出づれば、あなたの岸は月島
また佃島燈と、ころどころ。實に夜の川口の眺めは
パンの會勃興當時の藝術的感興の源にてありき。
永代橋を渡つての袂に、その頃永代亭となん呼る西
洋料理屋ありき。その二階の窓より眺むるに、春月
の宵などには、川の面鍍金したるが如く、銀白に、月影
往住そが上に、激瀧の光を流しぬ。斯る時しもあれ
や、一艘の小さき舟ぞ來る。形あたかも陰畫の如く、

白光の面に、劇然たる黒影を現しつ。舟中の人人の
拳を闘はし嬉遊するさま、眞に滑稽の極みにてあり
けり。我等パンの會の同志は、數數この家の階上に
集ひてパンを祀るの酒宴を開きたり。

房州通ひか、伊豆ゆきか。
笛が聞える、あの笛が
渡わたれば佃島。
メトロポオルの燈が見える。

三二五

お花さん

その家の女中物に躓きて手なる盤を落しければ

深川の西洋料理の二階から

お花さんがまた大川を眺めてるよ。
入日の影は悲しかる。

細い汽笛も鳴いて来る。

お前がひとり悲しんだとて、歎けばとて、

つぶれた家は立ちません。

あんまり何して粗相はしまいこと。

幕間

雪が降る。ちらちらと。

幕間の運動場。

かはいお酌の

花簪がちらちらと。

「あれまた今夜は積るのねえ。」

ねざめ

信心なんどは無いんだが——いつも朝、

あの鐘の音とお經の聲が聞えると、

でもねえ、何かかう

罪深いやうにも思ふのよ。

わたしやよつぽど舊弊ね。

今日の芝居

今日の芝居はつひぞまだ
聞いたことのない外題、
筋もようは覺やせなんだが、
西の棧敷の三番目
あの姿がまだちらちらと。

八百屋

戯曲「夜」の中に、女をんなの曲藝師きぎしの歌うたふ歌。

わたしや八百屋ぢやなけれども
梨なしに林檎りんごに巴旦杏はたんぎやう
選りどり見どりに取らしやんせ、
どうせ惚れたが負けぢやもの。

とも子

「そんなら強てもわたくしを
愛して下さい」と要吉が
顔見つむれば、さめざめと
「わたしは女ぢや無いんです。」

貫一

宮さん 一月十七日
月は必ず曇るよと
まだ呼ぶやうに松の風。

鳥屋

魚河岸を入ると左にかつぶくの好き老女の屋臺壽司屋ありき。その後は大きな鳥屋の店にて、鳩七面鳥など銅ひ置きたり。七面鳥は鳥なれども、わき人間の女來る時は、あとを追ふとぞ、かの老女の語りし。

殺される身とは知らないで、

よぼよぼな年よりの七面鳥が——まあいやな、わかい女のあとばかり追つて居るのさ。酷いやうだがねえ、あたしは鳥屋商賣なんですからねえ。

工場がへり

小石川の新開道路を行きゆき女たちの語れる、

「わたしや生れて三度島田を結つたのよ。
十六の時一べんと、
祝言の時一べんと、
それから……いつか、もう一度。」

「あよしなさいよ、阿呆らしい。
わたしだつてもねえ、三度や五度は結つてゐるわ。
だがね
そらもう六時の笛ですよ。
また餓鬼どもが、家であがあ言つてゐるよ。」

本町通

なんぼ姿色さうじやくが自慢じまんでも
ぞろりぞろりと日の晝間しるま、
本町ほんちやうの大通おほどほり
あんな匹田しつたの大模様おほもやう、

他人たじんだけれど汗あせが出る。

だつてわかい時ときぢやないの、
いいわ、構かまはないとも、あたしが最良さいりやう。

浴
泉
歌

(明治四十四年)

浴室の窓より落日を見る人の歌

西日が山に近づく。
何しろ山が高いから日の沈むのも
早いのだ。その金色の光が
庭の杉の竝木、
高い檜の木、
それからちやぼひばの幹などに當つて――
無論その葉はざらざらと緑金色に光つてゐるが――

そして長い陰を朽ちた湯殿の壁まで投げる。
わたしは試みに中指と薬指とをかう開いて、
その間から山の頂上を眺めて見た。
奇蹟だ。(と、かうわたしは叫んだ。)
まるで印度の聖者たちが

(悲しげに、しかし嚴かに)

彼岸到達者の涅槃を仰ぐ古畫の像と

頂上の杉は

漠漠たる大虚空を諦視めてゐるのだ。

わたしは——はつとして掌をかへした。

でもまだ小指は

紅く、血の色の縁を取つて

かの太陽のやはらかい威力を浴びてゐたのである。

温泉——

わたしはもう何もかも忘れてしまつた。

彼の人の温い臥床も

これほど純粹な平和と

快樂と觸感となつかしさとは與へはしまひ。

そこでわたしは小指の背をまげて

軽く、ほの赤いその關節に唇をあてて

この静かな夕方の温泉の呼吸を吸ふことにした。

もう日は山にかくれたから

何となくあたりが静かになつた。この家の主婦も

もう絲の車を舍いて、何か小さい娘にひつけてゐる。
 鶏の子供等がさわぐ。——一羽の牝鶏が
 鳥屋の屋根の隙間から半分首を出して、
 何てまあ、有らうことがあるまい事か、
 まるで首伽をはめられた
 昔の支那の罪人といふ所だ。
 それでけこけこと大騒をするのだ、
 よせば可いのに
 その上あの白犬まで飛び出して来て
 そこで騒が一層大きくなつたのだ。

川を流るる水の音の

静けさ、またもけたたましさ。
 いま日ぐらしが飛んでいつた
 あの椎の木の間から白い水の面が見えるが、
 早鮎のやうに大石の間を潜つて來た水が、
 白く碎けてまたそのうち
 あの紫水晶の群に入るまで
 あんなに叫んだり、呼ばはつたり、
 魚のつるむまねをしたり、
 肌著を脱いで投げて見たり、
 他の腰にさはつたり、
 小石にぶつかつて見たり、
 飛んだりはねたり、

とつたりを打つたり、
それで到頭あんな騒になるのだ。
水を浴びる女の子の羣のやうな――。

ああもうあの上手な鮎つりも歸つて行くな。

あの高い崖の上で女房らしい女が手招をするもの。

もう夕飯といふのだらう

おお何となくさびしくなつた。

わたしももう上らねばならぬぞ。

郵便屋が橋を渡つて来る。

そのあとから男と女、

(夫婦かしら、親子かしら)

みんなあのゆらゆらの橋を渡つて

そしてこの宿屋に來ようと云ふのだ。

さうだわたしももう上つて、

それから今日もあのあまい SAUTERNE の息に浮れて、

昔の旅人のしたやうに、

悲しい歌をうたひながら

このさびしい薄明の森を散歩して見よう。

椎の葉

椎の葉の、雨にぬれたる一枝に
鶴鴒が来て啼くころ、
山のさ緑、日でり雨
(どこぞ狐の祝言さうな)
はや鐘の音もたそがれて

すくと飛び立つ小さき鳥、
そのあとにまだ小枝はゆれて
一つ一つの雨の珠……その静かなる椎の葉に
しめやかに音もたてず
降る雨のほそき心よ——わが庭よ。

葉にふる雨

椎の葉に降る雨のおもしろさは
やはらかきチヨオク使ひの味かいな。
また紫の鬼薊、女郎蜘蛛、生巢の早鮎。
湯殿で髪を解く女。
どうせ一度は、なよ、谷のなでして、
花はしばみて實を結ぶ。
雨の中にも投網うち、

早瀬にかかる水車、漁夫は鮎を友釣の
竿をば高くもたげたり。
どうせなでして、鳳仙花、
湯殿で髪を梳く女、
金魚は高く泉水の上に浮びて水を吐く。
今日もこれにて日が暮れる。
いつまでもほそぼそと
椎の葉に降る雨のしめやかさは
やはらかきそなたの心、息づかひ。

商人と其妻と

三五四

烈しい夏の日、それでも、
やや西に傾いたころである。紫、
赤、黄金、代赭——むしあつく椎の繁みが
最後の眩暈でどんよりとしてゐる坂を登りながら
「それでもよつぽど涼しくなつた、
そりやあ今夜ゆつくり宿つて、
按摩に腰でももまして、あしたの朝、

まだ朝涼のうちに歸るに越したことはないけれど」と
商人は其妻に話しかけた。――

「でもまあ澤山だよ、

この上は贅澤さ。

少しまだ暑いが我慢して歸らうよ。かう半日でも、

ゆくりと座敷に寐て、

人の炊いた飯を食つて、

久しぶりで花を引いて見たり、

それから刺身で一杯やる……

まあ、この位が花だよ。」と。

それから街道に出たらば、垣根の下には

三五五

淡紅い鳳仙花が咲いて、牡雞が鳴く。
商人の妻は答へて云ふ。

「でも好いお湯でしたねえ、わたしは
も一度はひらうと思つて著物を脱ぎかけましたがねえ、

あなた

もうあすこのおかみさんが竈を焚きつけて居るぢやあり
ませんか、

いくらよそでもねえ、宿屋でも、

わたしははつと思ひましたよ。

早く行きませう、子供が待つて居るでせう。」

で、斜日は今し山へ沈むといふので、

鋭い光を雞の村落へ浴せかけた。

河に沿ふ神社、森林、

一きは高い朴の木梢、

水浴する少女の一羣、

これらの光景はだんだんと後になつた。

いつか商人の妻の背に

紅い麥藁帽子の息子はねいり、

一方の鼻孔から鼻汁を出してゐた。

絶大なる太陽が沈む……。

月の出

眞黒な椎の繁みが
ぼんやりと黄むのは何であらうぞ。
またお聴き、そらあのやうに、
さわがしい溪流の音にまぎれぬ
あのさらさらと云ふ聲はどこでするのか。
もう秋になつたのね、

山の湯はいつも寂しく
いつ夏が去つたのか分らぬけれど
ぎれぎれに蟋蟀が鳴く――
こほろ、こほろ、こほろ、ころ、ころ。

あれ御覧、満月よ、
なんと静かに昇ること、大きな月が。
しづしづと……まんまろく……椎の木の梢をのぼる……

ちやうど小さい鯉魚が
水の上まで浮いて來て
びたびた水を吸ふやうに

雨で濡れた椎の葉の
深い繁みを抜けて来た
ふるへるやうな満月が
暗い湯壺へさしこんだ。
湯壺の中のたをや女の
肩のあたりにああたつた。
波か黄金か、さいらさら。

割 青

山のゆあみのつれづれに
また秋の夜のわびしさに、青い繪の具で
二の腕に花と葉と本字一字の
人の名をかいても見たが、
それも湯までの興である。
湯にはひとつたら消えるやろ。

日ぐれ

GOLDEN BAIT の金と薄緑、
やや垢づいた白銅を
そなたそさまの手のひらへ
そつと壓すよに茅蜩は
椎の小枝にすひついた。
谿の白百合、
水はあふれて葉を浸せども、

なぜか蝶蝶は見えてやらぬ。
そつとその手をおしたとき
なぜにそなたは笑はぬぞ。

谿の白百合、藤袴、
木から舞ひ立つ日ぐらしは
落日の金の粉のなかへ。

溪流の橋に腰かけ西の山見れば
杉の立木があかあかと――
あすは日でりか、夕やけ雲の
雲か、立木か、手觸か、

金と緑の小箱から
煙艸取り出す氣の輕るさ、
そなたそさまの手觸か、
GOLDEN BAT か。ほんにやれなつかし。

(以上諸篇伊豆湯の島にて作れる)

高原の寂しき温泉場の薄暮

あれもう高山に日が沈みました。
街道の細い流が
まっ白に光つて來ます。一人の旅客が、
もう宿の犬と馴つ子になつて
旅客が驅けると犬が追ひます。
犬はせかせかと息を切つて
前足を地につけて哮え猛ります。

なんて寂しい夕方です。どこともなく谷の平地で、
二羽の鶯が啼き合つて居ます。

遠い山も碧くかすんで、

麓から白い煙が、

さもさも夕暮らしく立ち上ります。

道の真中の

色硝子をはめた大きな湯殿に、

山から戻つたらしい女達のはひつて行きます。

あれも生活ね。それならお前さん達も

ゆつくり湯にはひつて、今夜はお休み。

そしてあの山を越えて、

まだ見えない都會へ出る夢でもお見。

赤倉温泉にて

八月十一日。

山に慣れた。海拔二千五百尺の快潤な高地が宿の窓から縹渺と
して一望のうちに收められるけれども、あまりにだだ廣くて溪川一
つさへない。FLORAの種類も数が少くて、前景に目を樂ませるも
のが少いのは遺憾である。日が沈んでから暮れかかる一帯の緑は、
さすがにうつくしい眺めである。

今日やつと山に慣れて、人をなつかしむ心が無くなつた。そして
HOFMANNSTHAL ばりの詩境を思ひ出して來た。

温泉の湯殿から日本海の見えるのは事實である。氣候は東京の
九月中旬を忍ばせ眞晝さへ湯あがりの皮膚には風あたりが涼し
ぎる。それで今日は風邪けである。

珈琲壺と林檎と

三六八

白い珈琲壺には洋燈のかがさし、緑の林檎は淡紅の一面を壺のゐさらひに寫した。
恰もそこに、自己の實在を自覺せる何物かが存するやうである。そこより林檎の座を移すのは、かの嚴肅なる死と云ふものを呼ぶかの如くに思はしめた。
所在なさに、予は室隅を漁つて、玻璃瓶の内なるセロリの莖を取つて、鼠の如く、この怪しいにほひを嚙んだ。

孤獨！

さう云ふ思想は突然予の頭邊をかすめ去つた。やがて其かげは彗星の尾の如く形となつて予が瞳底に残つたのである。

……眞夜中である——或半島を貫く連山の背と、海の果かすけき燈明を見つつゆく隱遁者の姿——その黒き外套、少しく長きに過ぎたる杖、犬は遠かたにて吠ゆ……
つひに予は言葉を發した孤獨！而かも幾年來胸底に秘したるその望を捨てて、斑なる群牛の内に入らむと決したる日のその夕べ。

三六九

予は珈琲碗の底を撫でた。硬き——而かも熱きに過ぐる底を——

また予の心中にも嘗つて屢屢各種の「徳」が相闘いだ。しかも遂に予は荒野に奔らなかつた。予は實に他人の如くこれらの像を眺めたのだつた。かかる餘裕あるを以て予は自らを寛濶なる戯曲家と呼んだ。

力あるものは凡て予に「人物」となつた。故に予は力といふものは美だと思はざるを得なかつた。善玉もはた悪玉も——。戯曲家たる予は、やがて舞臺となつた。

舞臺の上の面あかり、鷹匠の踊の花やかさよな藤娘の美はしさよな。

而かも我が碗の中のモカの茶の香のよさよ。

マラルメの美しき句章をトルストイは不可解と罵つた。なんとトルストイの一國さよな。

さう云ふ間に予の心は酔ひ始めた。

眞面目に考へるのがいやになつた。

予は遂に柵の該里を出した。

杯よ、薄玻璃の杯よ、また濁き該里の酒よ。

酔ふか、考へるか、考へるか、酔ふか、

考へるとまた荒野へ奔らなければならなくなるぞ。

さう、——老いて美しい妖女が口にさやかに歌ひながら、酒瓶の口から出て来た。

おやお前はよく似てゐる、年こそは取つたが眼鏡こそはかけてるが——そのかみの壯きわかき、歌うたふメデュウズの首に。

もうあなたはあの時から讓歩してゐるのですもの。と、さう、突然黒い面紗をした、夜が話しかけて、覆面の内から、狡猾さうな、しかも世慣れた女らしい顔をして、微笑しながら話しかけたのである。

だからその林檎をもおわがんなさいな。

私にも珈琲を頂戴な。咽喉が乾いてゐるんですもの。

青い表紙の上には、『ZARATHUSTRA 語録』

なんだか分らなくなつた。

これではことによると、明日ここから引越すわけにはゆかなくなるかも知れないな、と予は再び来るかも知れない思想の争を豫想しながら、大河のそばの汚い、寫眞屋の二階の一間で、悄然として歎息したのである。

元來予は三十分とは酔つてゐないたちである。

予はまた懈げに後方の SUICID-GE-DANCE を眺めて欠び
を一つした。

その時街道をばかに節まはしのいい按摩の笛が通つた。
すると今度予の舞臺へ河竹默阿彌がかかることになつ
たのである。

隣の湯屋が湯をぬくといふので、越後ものの番頭が追分
を歌ひ始めた。

すると今度は予は『廢園騎馬曲』といふ詩を考へること
になつた。

黒い荒馬が予の——然しまだいろいろの秋草の美はし
いのが咲いてゐる廢園に闖入してさんざんあらすと云ふ
筋である。

波羅羯諦を唱へて寢に就いたと覺えてゐる。

——で、一つには自分の前での街と一つには音樂的の快
感との爲めとで、予は昔覺えた心經を聲高に誦して見た。

羯諦羯諦波羅羯諦などの邊は妙に氣持がいい。

さうさう貴方はひところ佛教に凝りましたね。と幻想
が捨てりふを残して立つた。

なんださういふ自分がさうだつたつてぢやないか。

三味線引のくせに佛教もないものだ。

つひ！ つひ！ EXHIBITUS になつて不可よ。ある

解剖學の助手と、詩人と、其弟の小説家と、それに雷同して、さ

つと或る有名な戯曲家が笑ふよ。然しああ皮肉に見える解剖學の助手も元來甘いのだ。おれはそれを知つてゐる。然し、もう消え去つた幻を、無理に追ふやうにして情操の満足を得ようとするのもみぢめな生活だね、そして貧弱な經驗。

然し日本人の女に特有な、あの白粉をつけてやや黄色に且うす黒く、多少の勞れを見せた上眼瞼の色はいいな。それより耳の前からかつくりと緑の黒髪に移るところが可い。

俺は生活といふものを認めて、生殖といふものを否定したら、誇張した否定からくる感情を生活の樞石にしなればならないやうになつた。

と、かう云ふやうに、思想と幻覺それから氣分などの段々と移つて行つた夜更に、それでも白い珈琲壺には洋燈のかげがさし、緑の林檎は淡紅の一面を壺のゐさらひに寫して居た。

恰もそこに自己の實在せる何物かが存するやうであつた。そして依然として壺のそばに横つてゐる林檎の實は何とも云へない莊重の感じを予の心に與へた。

遂に予は室隅を歩みながら叫んだ。
兎に角生活は實在だ。そして且嚴肅だ。

ちやうどその林檎と珈琲壺との如くである。
われらがセザンヌを讃美せよ。

予は窓から夜天の下なる都會を凝視した。一種の感情！
それが予の眼に涙を涌かした。

宗教といふ名を離れて宗教が欲しい。

林檎や珈琲壺といふ概念を離れて、而かもその眞の實在があるやうに！。

そして星天の下を、夜の隅田川が流れてゐた。

苦患即美

(明治四十四年)

もしや草の芽が

美しい瓶なりしかど、暗い心を盛つて、
まだ少い時であつた、森の中に埋めた。
二月の末の幹の漏れ日に
斑な雪は輝き、そして川の縁に、
黄にまじる緑の草がやうやうに頭をあげる。
草は心は無いけれども——地の底から——
もしやその草の芽が暗い心を

ひよつとして人の目に立てはせぬかと
案じた日があつた——覚えてゐる。

今日となり 同じ憂が
來るものか。 淡雪ふる日。

二月空

あまり見事さに印度更紗を買つて來た。
尺にも足らぬ小切なり。
何とせうぞの。

あまりしほらしさに水仙植ゑて窓に置けば
花はもとより葉もしほれた。
紺瑠璃の鉢のさびしさ。

今日は朝より雨もよひ、
 窓の玻璃に凝る露は
 溶けて流れて、
 とけて流れて、青い朝日に照りかへる。

十時ごろのけうとさに
 自分で沸した珈琲の――
 あんまり黒いは濃過ぎたか。
 ええ、何とせうぞの、二月空。

春の雪

提灯屋の阿爺が鼈甲の眼鏡をかけて、
 大きな提灯へ持つてつて
 「賣」といふ字を群青で染めて居た。
 は、ちてえんつとんてつん。
 あたりは待合のことゆゑに朝つから三味線が聞える。

「鐘に恨はかずかざござる。てんちん。」

そこへ只今とはひつて來たのが娘のおうら、

見れば髪もそそけ、色も青く、

如何にも氣分が悪るさうなり。

さうでもあらう、痛ましや。

だがそのお前にかせいで貫はいでは

この爺の腕ばかりでは口が干上る、

氣の毒ではあるけれどと、思ふ心で表を見れば、

雪がはれて日が輝く。

道の雪に照る日のかげのまばゆさ。

はや十時、格子戸があき、

ふだん著のお酌が朝湯へゆく。

雷雨の後

男はまじめに涙ぐみてさへ言ひたれども、
女は崩れたる膝直さむともせず、
なほもひたすらにキオロンをば
月琴のごとくにも、膝の上にて彈き居たり。
「さなり、眞理へ。」
と男は再び言ひぬ、六月の雷雨のあと、
重く汗ばみたる空氣は、

さはあれどやや冷やかに狭き室内に揺けり。
「たとへば古畫に見る、筋だちて
ま黒にぬられたる喪服の女とや云ふべき
その如き眞理へ——」しばし間をおき、
「われは往かむ。」女はやや汗もちたる鼻に、
顔も動かさず、ただせせら笑ひて
ながしめに男を見やりたり。
りとただ、ただ一つ風鈴鳴る。

雷雨のあとの重き阿巽、
ちとみだらに膨みたる胸のあたりに
色見ゆ——紅き絹の——

洗髪あらうぎの束髪たばみの女をんなの――。
 たまたまに風鈴ふうりん鳴り、
 盆栽ぼんざいに河鹿かじかのなく。

「止とどむるそなたの心こころより」と女をんなは意味いみありげに歌うたひて
 なほもゆゆしげに笑わらひつつも座ざを立たちたり。
 男をとこは疊たたみの上に腹はらばひて
 深く兩手りやうてのうちに顔かほを埋うづめたり。
 河鹿かじかなく――雨あめのあとの風鈴ふうりん。

冬の夜半〔南海傳説〕

行燈あんどうに點ともす油あぶらの火ひは細ほそく、遠とほく鳴なる海うみ、
 梟きうは森もりに啼なき、
 風出かぜいでて藏くらの戸前とまへの、かたことと寂さびしく揺ゆれて、
 油火あいちびはぢちとまたたき、
 街道かいだうを「方位方角ほうひほうかく家相縁談かそうえんだん」
 男女運命だんなうめいの判斷はん断」と呼よび歩あるく。

獵虎皮の帽子を被り、襟巻取上げ、
「どりや行かうかな、だいふ夜が更けた。」

「あや今時鶏が——」と言ひながら、「繪入音曲

踊獨稽古」の本を爐のそばに伏せ、

大儀さうに立つて行く老人の姿、

主人夫婦はなほ爐のほとりにて茶を飲み居たり。

南國の海は夜とて音をひそめ

あちらこちらに麥の唄、

杵の音、

囁す聲、「濱のお奉行の

顔の黒さよ、くろぐろ——」と白を搗く
女等の輕きゑ笑。

夜も更けければ皆寢部屋にと別れたり、

老いたる家の主も

その妻と並び臥し、不快なる勞より眠らむとするに、

遠く犬の吠ゆる聲する、

風のかたこと——それより眠成らず、頭痛みき。

不安と恐怖、こし方の生活の回顧、

また妻のかほそき寢息、胸に餘る恩愛、情、

また憤怒、怨恨、愁、

されどもそれを振りすて、美濃の國なる
虎蹊山の禪房に居る
出家の弟を尋ねむといふ氣のふと起りけり。

海も眠る丑三時、

雲は青白き月をおほひて

石垣に松が枝の陰さやかに寫れるを、
雨戸そと開け

ふらふらと、(草鞋をはきて) 忍び行く老人の影。
さて遠き夜番の拍子、松の風、藏のかたこと。

梟は森に啼き、

南國の夜はうち濡り、しんしんと、

月青白く

憂鬱狂の老人の

行くあとに——影をしるしつ。

埋れし春竝序

或る家の嘗てわが友の住ひける小房には、その土地のまだ島原と呼びなされけるころ、良からぬなりはひせし形見に、日の光朧ろかなる砂丘を背景させる春宮祕戯を畫きたる壁ありけるを、近きころ塗りこめたりとぞ云ふ。

春の夜の燈を消して

轉るにも壁に耳あつ。
しんしんと夜はふけて
窓の外、ほのぼのと月明り、
淡路島、遠き辻占
過ぎゆけど、事もなし。
静かなる夜の物の音。

春 朝

吸ふ息は少し鹽氣もあるやうにて、
胸につかへて腥膻く、何となく重苦しい。
雨の降る春の朝、
鈍く漏れくる稽古の三味の音を聴けば、
ぼんやりとして粘づよき
目にも見えない慾望がわが首を巻くやうである。
雨の降る春の朝、

にがく酸ばい生の味、
解脱もならぬ苦しきは、
どうせままと、巻きかかるふてくされたる幻影の
かの波頭、ビヤスレエ、ギユスタヴモロオ、我國は
鶴屋南北、喜多川の
痛ましくも美しきその妖艶の神のすむ
海の底へと祈願する。
あれ八角金盤には驚
しとしとと春の雨檜の葉に音もひくく。

十月の哀歌

十月の朝なりき、予は
 彼のファウスト先生の如く静かに机に向ひ
 推理の書を読まんとせし時、ゆくりなくも――
 黒犬……あはれまざまざと
 予が目の前に日本橋小網町の、
 日を受けし白壁を映す午前十時の水の面のだぶだぶの
 いかなればこそ浮びけめ――やがて河岸より、

その舟の中より、
 黒外套の長大の人は立ち上りて四下を眺む、
 それさへ見えき――怪しき「過去顧瞥の眸」。

魚河岸の家のくづされ、
 新築のペンキの色は生白く、
 紫紅會いまはた無き日にも、
 かく鮮かにわが眼に浮ぶは、そもいづくの國ぞや。
 江戸橋局のちいさんよ、

酔ふ順さんよ、
 かの縄暖簾「加賀屋」の店の常得意、
 いまになほ健なりや、

その夜の歌の、まだ耳底に残るはあるに。

ああ「あの時」は既に過去圈内に入れり。

空気は濃くもぼろかにして

過去の薄明は遠し、

その時の人人の顔も定かには見えず。

メヂユウズよ、メヂユウズよ、唄歌ひしメヂユウズよ、

汝が名を呼ぶ時、高く両手を挙げ、

越し方の幻覺に呼ばうわか人の姿も見ゆれども……

酔ひしれて肩車くみ、

夜半の道を駆けりたる「從五位男」また健なりや、

紫の唇を持つ詩人白秋いかに、

異國の濃き放蕩のころを解せし

飴色のゲルマニヤ人いかに。

かく思ひつつ窓に倚れば

さらさらと櫛の枯葉は、

黄金なす日にゆれ、散りては散り

庭の隅には石楠花の葉かけをふみ、

鵲鴿——はた去りぬ——秋の朝の寂寥。

生の歡喜

(明治四十四年)

秋の林檎

おいお前、

この心持で――

言へないな、この心持で

わしは十月の新しい林檎にざくと齒をあてる。

ちやうど森から出た人が――

やつ！　ほい！　これは！　と兩手をかがめ、

春の海原はるばると、

ずつと——すうつと目の前に
 現はれたので仰天し、切株に腰をかけ、
 巖乗な手で煙草を詰める——まあその氣持、
 あきた女房が化粧して
 はつと思つた亭主の氣持。
 寫真なれどもセザンヌの壺にあつた日の氣持、
 達磨大師が坐禪から小便に立つその氣持。

ああこの心の傳へたさよな。
 なんでも物を抱きたさよな。
 肺病やみは肺病ゆゑに世は樂し。
 酔へば酔ふほど酒はよし。

負けりやこそ闘花牌はやめられぬといふ人の
 心理もどうやら腑に落ちた。
 苦勞するので戀も甲斐あり、
 いぢめられるさかい、あゝ小春がいぢらしいと、
 さういふ氣で芝居を見る人、
 それはこの世の通でなし。

されば十月のすぼすぼと——
 さうかと思へばまたさくさくと、
 時には生のセロリのふんと來る香のなつかしみ、
 舌をさす酸ばさ、
 いつかやさしい息づかひ、

そなたそさまのあの頃の湿つた睫毛のふるへさへ
思ひださせる林檎のあぢ。

と見、かう見、

珊瑚珠のうす紅みにエメロオドの緑、

あまりの惜しさにどうせうかと

思ひわづらひその末に、

(戀の結末もそのやうに)

やつぱり到頭食つちやつた。

ああこの心、
十月の林檎、

暴れあとの風、怒つたのちの接吻、
勞れた旅人が森から出て見た海……

あすは鷗も飛ぶだらう、嵐になるかも知れない。

さう云ふ林檎も腐るかも知れない。

ああ心、さあ十月の林檎、

あいお前、

この心持で、

再び發見した生活の淡い歡喜を味はう。

眞珠灰色、また紫、

鮮かな林檎に朝日がさす。

さあ、あむき、もう一つ。

鼻の孔をほじる人

生憎電車で、日の射す方に乗り合はせ、
いまいましいのか、屈託か、
顔をしかめて鼻の孔をほじくる人よ。
山高帽子に、羊羹色の外套で
顎髭さへも生したのに

鼻をほじるは見よくない。
荒い波風幾なをり、
額には悲痛の皺を刻めども、
とは云へどこやら眼の邊に、
それでも此世は楽しいと、
さう書いてあるのが見えますよ。

田圃道の放尿

四一四

町中の田圃の畔の酸摸の
ありや露西亞更紗かえ、古渡りか、
酸摸の葉のしむみりと……そのくせ派手な染模様。
いえ、いえ、あれはGOBELINよ、
あの青いのは麦の芽で、紫なのは土の色。
霜どけ道につと滑る磨きたての赤靴よ。

田舎藝者の御座附の太神樂、門禮者、
梅の春風、浮く鷗、
濱の漁夫は「前祝」の赤い著物に桐の下駄。
さて年寄は屈託な顔しててくすを選び居たり。

ふと田圃へと來かかつた
茶の中折の背廣服、
橙の葉はまっ青で、實は鈴なりで、白壁は
少し漆喰剥けてゐて、下のところは伊豆石です。
でもしほらしい、あちこちをちよつと見廻はし、
足を停め、前の扣鈕に手をかける。

四一五

時は午前十一時、
正月三日。

日はやや黄味で中天に長い髪をば散らしてゐ、
垣根では鶏が啼き、
ちよいと都々逸、

それから賑かに三下り（酔心地には效き過ぎる）
おつと蚯蚓は禁物と、呼吸をはけばまだ凝る。

川からは湯氣が立ち、
孔雀の羽の脂玉、帯になつたり襷にも。
遠くの街道、人通り。

あやあや二階の戸があいて女が出たのは恐縮だ。
いかにも今日は上天気。
千本羽子で雲雀とる子供さこそと知られたり。

そこで背廣は悠悠と
小便をする長閑さに、
さらりさらさら枯れ藁は
つつましげなる音を立て、銀灰色の稻村の
かげには霜柱まだ残る。
田圃の麥はいや青く、
藁がぬれば霜柱さへ
濃い紫の地となる、地となる。鄙の榮。

葬送の日の淡き喜悅

わが母の死なれた日の翌日、
町人はあつまり、
既に大いなる一家の主人なるにも拘らず、
或は銀紙を切りて蓮華を作り、

或は料理人の手傳をし、
たまたまは美しい女にたはむれ、
賑かにさわがしい半日を造り出した。

すると婆様たちは座敷に集ひ、
悲しい聲で、鉦に合せて御詠歌をうたつた。

また無邪氣なる子供等は柩の廻りで飛んだりした。
裏庭には磯落の黄い花に
冬の午後の日がうつすりと照りそひ、
黒い牡雞が時ならぬ刻をつくつた。
ぽちぽちと遠くで汽笛、

海が居るのだ。

われは兄よりかれたる一樂の著物に七子の羽織を著、
編笠をかぶつたならば、お白粉のはげた姪が笑うた。
そして、ちん、ぢやん、ほらんの
銅鑼をさいたら、なんとなく涙が出た。
だがまたそれは何處となく、
曇日の海のあなたの淡い喜悅へと消えて行つた。

わが母よ、柩の中の――
なんでせう、この情緒は――？

日がやや下つた。
畠には少い農夫が耙をもち、
ぼつつり、ぼつつり荒土をこなして居る。
そして手をやすめて、手拭をとり、
長い葬列を見送つた。

しづしづと柩、白無垢、編笠の行列がゆく……

喜悅と悲哀の人の情にもつれたる道の枯草、
いつも日は照る土のにはひの柔さ、
これやこの人間道のたそがれを、
大地に歸りたまふわが母上よ、

わたくしはまだ、大海と
 蜜柑島と七情の縫れもつるこの郷で、
 あはく悲しい歡喜の
 人間道をかみしめて、身にしみじみと楽しんでをりまする。

譯詩二篇

(明治四十四年)

窓に倚る夫人の獨白 (Hugo von Hofmannsthal)

葡萄^{ぶどう}島^{しま}の作^{さく}人^{にん}が

丘^{かみ}から歸^{かへ}つて來^きはくるが、

あれが一番^{いちばん}おしまひの人^{ひと}と云^いふのではないのだろ。

だつても、そこ此處^{こゝ}にまだ三人^{さんにん}、あとに残^{のこ}つて居^ゐるのだ
もの。

ええ、ではまだ沈^{しづ}まないのね、今日^{けふ}の日^ひは。

お日^ひ様^{さま}、わたしはあなたの手^てから、

もどかしいあなたの手^てから「時^{とき}」を奪^とつては碎^{くだ}きました。

小さい缺口に砕いては、
流れる水に投げました。

ちやうど今また此花をかう引き裂いてはするやうに――。
ええ、ま、どんなにこの朝ちゆう、おれにちれて暮した
でせう。

早く「朝」をば送らうと、追従したか知れませぬ。

いくつか、いくつか、腕環やら、耳環やらを

懸けても見たり、外したり、

また懸けて見つ……おしまひには、

だがまたそれを取つちやつて、全く他のと代へたりして

……………。

それから浴室で綺麗な水を

どつさりと頭へ懸け、

ゆつくり、ゆつくり、それをまた絞つたりなんぞして……

それからもゆつくり、ゆつくり、あちこちと

石壁の下の細道を、日を浴びながら歩きました。

だけども些とも乾きはしないわ――そんなに濃いね、髪
の毛が。

また庭の繁みのかげに山雀の雛の巢を

捜したりなんぞして……。吹く風の息よりもやはらかに、

さゆらぐ蔓草かい分けて、

さやめく叢に腰かけました。

そのうちだんだんに、頬や手に、

温い日光の小さい星がゆらゆらと、

もうそれは静に、静に、匍つてゆくのが分りました。
 うとうとと、半ば眼を閉ぢまどろむと、
 その動くのが、みんな唇なのかと思はれました。
 かうまぎらはして居たけれども、
 もう我慢が爲切れなくなつちやつたのよ。
 しかたなさ眼を上げて、
 空飛ぶ雁を嶮相にうち眺め、
 また水の流に屈み、纖弱い體をうつしたりなんぞすれば、
 暴い流は倉皇しく、わたしの影をも流してゆく。
 それでも何でも堪へませう。わたしは辛抱強いよ。
 聖母さま、聖母さま、どんなに嶮い高山でも、
 わたしは登るのを厭ひませぬ。

一足ごとに跪いて、
 この眞珠の緒で山道の
 尺を取るのも厭ひませぬ。
 唯この日さへ早く沈んでくれるのなら。
 だつて餘り長すぎるのですもの。もうわたしは、
 細い鎖で幾千度測りなほしたか分りはせぬ。
 その揚句には、熱病の時のやうに獨言をいひました。
 いくら幹に残つてゐる木の葉を數へなほしても、
 直ぐもう盡きてしまふのですもの。
 あや、まあ、あすこで老人が犬をうちに呼んでゐる。
 なる程あの家の小さい庭は陰つたのね。
 あの人にはこはがつてゐるのよ。家の戸を締め入つてゆく、

あの人にはもう夜なのね。だけど些とも喜んで居ないのね。 たつたひとり。

いま女たちが井戸へゆく。

からの手桶の竿を下すのさへ

いちいちのはつきり見えるわね。

一番おしまひのが一番に美しい。

おや何をするのだらう、あの人。あの辻路で、旅人は。

きつと、もつと今日中に、たんと行かなければならない

のだろ。

石の上へ足を置き、

足を巻く切を取る。あれも一つの生活ね。

それなら蹠から刺だけを、
取つてお置きなさい、急ぐでせう。世間はみんな急ぐのだわ。

さう今日の日も沈むがいい。わたしたちの頬からも、

また熱いほでりが消えるがいい。

邪魔するものは無くなるがいい。

刺は野原にお捨てなさい。いま野原には

井戸の中に水が湧き、大きな花のいくむれが

夜を迎へてしらじらと映えわたる。そしてわたしは

指環を手から抜く。裸になつて指たちは

夕方川で水を浴びても可いといはれて、著物を脱ぎ、

川へ急ぐ子供たちのやうに嬉しがる。――

もうみんな井戸から去つてしまふわ。

たつた一人ぎりまだ残つてゐる。美しい髪だこと。

だけどその値打は、多分知つては居ないのよ。

それはきつと自慢でせう。だけど自慢なんぞ、何も知ら

ない年頃のつまらない戯よ。

一遍わたしのやうな身になつたら。

始めてそれをいつくしむやうになるでせう。

ふさふさと垂れ懸る髪の毛は、絃の音のごとく忍びかの

囁語。

また愛人の熱の手の感をあとまで残し垂れかかる。

(自らの髪の毛を解き、左右に分けて前に垂らす。)

ええ、其方達はわたしに何の用があるぞい。皆落ちてし

まふが可い。

迎にお出で、暗くなつて

あの人の手が梯子へ懸るときに、

虚な空気に觸るより、

冷く、堅い、あの黄楊の葉にさはるより、

日暮、黄金の雲の間から

降り出づる霧雨よりもやはらかな

そちたちに直ぐと觸れるがよい。

(髪の毛を胸壁の上に垂れかける。)

そんなに長いのに、それでもこの道の

三分の一にもなりはしない、一番の尖でさへ

冷い大理石の獅子の鼻孔までも届きはしない。

(笑ふ。再び身を起こす。)

ああ、蜘蛛。いえ、いえ、わたしは其方を振り落しなんぞ爲はしない。静に欄干に、わたしはまた手を置くわ。忙しさうに其方もまたこの道を續けて歩いて行くのがいい。

まあ、でも、どんな變りやうだらう、わたしは、まるでもとなら籠の縁を唯この蟲けらが匍つて行つたと云ふだけで、

中の木の實にさへ觸りもせなんだらうに。

さあ、其方はわたしの手の上を通つて行くのが可い。

わたしはもうすつかり酔うて居る。其方の通るさへ身に

うれしい。

今ならわたしは石壁の狭い縁をも歩きませう。

そしても庭を歩くより恐しいとは思ひはせぬ。

水の中にも落ちたなら、結句好い氣になるでせう。

やはらかな、冷い腕で水かさわけて、

薄暗い光の中を、美しい海草の中、

また暗碧の水底の上を潜つて泳ぎませう。

黄金の鱗、陰濁の、だけど善良な眼をもつた

恐しい動物たちとも遊びませう。

また暗い森ぬちの半ば崩れた外廓の

中に閉ちこめられた日のもとで、

毎日暮してもかまひはせぬ。この心さへ

狭まれないで居るのなら。そしたらきつと、
 森のけだもの、小鳥の群、
 鼯鼠なんぞが口のさきや、
 賢い眼許の睫をもつて来て、
 わたしの素足の小指に觸るでせう。
 苔の中の莓の實を、わたしは採つて食べませう。
 ……おや音がする……微かな。狛なのね。あの初めの
 晩と同じ狛なのね。其方はまた今日來たのかえ。
 暗やみから來たのかえ。これから狩に行くのかえ。
 かはい鼠。わたしの好きな狩人も直き來てくれれば好いの
 にねえ。

(ふと顔を上げて。)

にねえ。

もう陰がなくなつた。凡ての陰が。
 松の陰も、壁の陰も、
 あすこの丘の家陰も、
 葡萄棚の大きな陰も、
 辻路の無果樹の陰も、
 まるで静な大地に吸はれたやうになくなつたわ。
 今度こそはほんたうに夜なのよ。だから人たちが
 燈を卓の上に出す。羊の檻には羊たちが
 押し合つて入つてゆく。また葡萄棚の、
 太い葡萄の幹のからまつてゐる暗い隅には
 美しい童の態をし、心は悪いコボルトたちが
 しやがんで居、森の立木の隙からは

善い聖者たちが出て来られる。

出て来ておのが寺寺の

立つあたりを見まはして

禮拜堂の多いのを喜んでをられます。

さあ、いよいよ、お前、いとしい小道具よ。

蜘蛛の巣よりもなほ細く、

鎧よりもなほ堅い、お前の出てゆく番が来たのよ。

(絹の繩梯子の端を露臺の床なる鐵の鉤に繋ぐ。)

さてもういよいよの時が来たやうに、

わたしはお前を井戸の中へ下してやる。

美しい水桶を引き上げて来なさい、ね。

(再び繩梯子を引き上げる。)

もう夜だのに——夜だのに、様の来るまでには
もつと長く、長く、限なく長く待たなければならないこ
とか。

(指をすまはせる。)

出来るわ。

(目を光らせて。)

でもいけないわね。……だけど出来るわ……。

(髪の毛にて結目をつくる。)

(戯曲「窓の夫人」より。)

日の出前 (Hugo von Hofmannsthal)

まだほの暗い空の果には雨雲が
 ちつと沈んで居る時に「おや、もう朝ぢや、
 どりやひと寝入り、これから。」と病人は考へる。
 熱の眼瞼をまた閉ぢる。すると小屋では牝牛が
 巖乗な鼻をつき出し、朝靄を吸ひ、森からは
 顔も洗はず、遍歴者、落葉の床から起き上り、
 手近かの石とり、まだ眠ぶたげに飛んでゐる

鵲へと投げる。情知らずの非道者。
 石は當らず丁丁と地面に落ちれば
 はつと自分がびつくりす。水は水とて荒らかに、
 そつと逃げゆく「昨夜」のあと追ひあのくらやみへ
 飛んで行くよに、不愛想に、寒き呼吸立て
 流れゆく。その上の小橋には
 救世主さまと母御さまとが静かに静かに
 何か話していらつしやる。静かなれどもその言葉は
 末世までの眞理にて、かの大空の星の如くに不壊である。
 主は十字架を負ひたまひ、唯「母さま」と申された。
 そしてちつと見さした。母御さまは「まあ息子よ」
 と申された。——その時空は大地と、

言葉はかはさね、氣づかはしげに頷きあうた。
 戦慄はその時、年古りた重い地球の身を流れた、
 また新しく今日の日に活くべき用意をしたのである。
 で、朝ぼらけしらしらと幽霊のやうに立ち昇る。——處へ
 そつと小走りに——靴をもはかずに、影のよに、
 女の寢部屋から忍んで出て来たものがある、
 泥棒のやうに窓を攀ち、自分の部屋へと逃げ込んだ。
 壁の鏡をふと見れば、そも如何に、夜目も眠らぬ青白い
 どこかの人が立つてゐる。正しくそいつがつひ昨夜
 男の子を殺して、意地わるく
 殺した子の壺で手を洗ひに來たに相違ない、
 殺された子はこの自分だ。

だから空さへこのやうに心配さうで、吹く風も
 不思議に氣味がわるいのだ。
 と云ふ間に牛小屋の戸が開いて
 そしていよいよ日がのぼる。

薊澤集

(明治四十五年—大正元年)

薄荷酒 竝序

夜八時を過ぎて後、外套の襟を立て、襟巻に肩を埋
めて、淺草藏前植木店に歌澤松聲會を聴きにゆく。
始めてかかる會に赴いたのは何時であつたか。
まだ學生としてかういふ處へ來るを憚つて、そつ
と隠れて聴いたころは、人のこの種の歌をうたふ
を聴けば、何とも分かれ不思議な情動に襲はれた
ものであつた。それを聴けば、わたくしのまだ頑

はないところの社會、そこに住んだ人人の面影、またその頃の生活感情がありありと想起せられた。眞實か、幻想か、定かならぬ過去の記憶か、或は後日の無意識の詩作か、今更その孰れなるかを判別することは出来ないが、或る情趣の國がかかる際、倏忽としてわが眼の前に展開したのであつた。後にわたたくしは此の曖昧模糊たる寫象を蒐めて一編の戯曲「柏屋傳右衛門」を作り、自分では私に心ゆくことに思つたりなんぞしたことがある。その頃聴いたのは松聲會でなくて、哥澤溫習會の方であつた。芝とし、芝みねなぞと云ふ美聲の老女もまだ微かに覚えてゐる。芝平といふ頭の禿げた人がゐて「わし國」をうたつた。心易い旁人が、あれは素人の名人で「白酒」が得意だ。渾名を「禿平」

と云ふなどとりたくしに教へてくれた。かかる會には美しい聴衆も多くて、飛白の羽織に小倉の袴を穿つた身の風情を恥かしいと思ふころもあつた。やや年とつた男の人人のうちには、川柳の回覽雜誌のことを話しあうてゐるものもあつた。まだ年わかい母の膝から滑り落ちた幼児のふとわたくしの足袋の孔から親指の出たるを見て、指を入れたときに、其母の困つた様子をしたやうなこともあつた。が年月の経るままにさういふ聴衆のうちから、わたくしを見出して挨拶するやうな人も出て來た。百回紀念の眞菰の繪を染めた樂焼の湯呑を配つた頃から、常磐木俱樂部の此會はあまり繁昌しないやうになつた。

そしてその頃からわたくしは松聲會の龍美太夫といふ老人の唱ふを食ひ聴くことを覺えた。この老人がもと大きな乾物屋の主人であつたといふやうな噂が、わたくしをしてその人を一層なつかしいものに思はしめた。老人は「朝日」「高砂」などを沈著なさびのあるいなせな聲で唱つた。そしてわたくしは、わが「傳右衛門」にも「高砂」を歌はした。

今夜は「わがもの」であつた。少年時代から聴き覺えた懐しい歌曲であるが、今日はなぜか感動しなかつた。寅松は「朝日」であつた。聲は好し、量も十分ながら如何にも文法的でむしろ乾燥なものに聴きなされた。小登良は家元の絃に出て今夜は唱はない。

わたくしは不用な偶然的な印象から力めて遠離して、この音曲の有する一種固有の悲哀の精神に到達しようと思つた。が然しそれは、少くとも今夜に於ては無益であつた。一度わたくしに許されたる其味樂は、もはやいつしかにわたくしを離れて居た。

わたくしは失望し寂しいことに思つて、とぼと夜の道を歸つた。そして歸來舊藥を讀みなほして見た。(大正五年一月十六日夜記)

投節を聴き歸る夜のペバミントは
味異なれども悲哀あひ似たりや。

その青き酒杯の底にくらき燈ともり、

男はうれはしげに頬杖し、

女は耳許に口よせて暗示を與ふ。

ゆるやかなる音曲のうちには

雨後のぬれたる梧桐の葉に月かけさし、

藏の窓より燈もれにじみぬ。
やはらかに、あまく、やや重き、小さい液體の珠は

冷やかに舌のさきより消えて、ただ耳鳴の
まだ残るうす暗やみに紅き幕音なく垂る。

かなしき女の衣摺の如く、またにほひの如く、

黒き河の面を舟ゆく見ゆ。この青き酒の、

その底にまだ沈む沈丁花、執の頸の、

脣に、わりなしや、はたからむ おくれ毛の筋。

ざつくばらん

四五四

雨の夜の
縞のお召の青やぎ地、
をんなは三味を下におき、
襟合はすとてまつ赤なる
襦袢の胸をちらと見せ、そしらぬ顔に笑ひたる――
薄手の猪口の白鷹の

ぬるみ加減の口許に
ちと麝香などにほひたる――

さても夜更はしんしんと
心寂しく、饅頭屋の聲もかすみて
それとなくはずむ話に
子の欲しき願なんぞと、それから
女同志の高ばなし。

ざつくばらんの、雨の夜の
やや興ざめし女かな。
と見れば柵の鬼薔。

四五五

窓の芍薬

曇り日の五月一日、海鼠壁
遠き落日のうす色に
あれ笛がなる、
鐵橋の
空の夕雲、ながるる水、
河も流轉の相を浮べ
音もなく散る芍薬――

女は花瓣を手にとりてバルコンに背をよせて
何か言はんとしたれども、
昨日にあらぬけふの日の
淡き落日を眺むれば
黒き毛繻子の手觸も
心も重きはかなさや。

蒸氣出てゆく黒烟の
のこる烟や海鼠壁
落日のいろも何時やらに、
河の灯影もちりぢりに、
あないつやらにちりぢりに。

植古聿

植古聿の中へコニヤックを入れて貰つて——例の如く——
 それで何気なく指ささで卓を叩きながら——
 刻刻に予の心は驚く——微笑——
 少し誇張した眼付——始終足を動かして、
 抱くやうに、椅子のより懸りに腕をもたせ——
 真に美しい皮膚、
 濃いお納戸のぢみな羽織、

昔美人との評判だつたが今とても——
 眉こそは剃つてをれど、そことなきやさしさ。
 にほふ植古聿、コニヤック、鉢の牡丹、
 月夜に差す汐の如き悲哀の情緒、
 瓦斯の燈は青白く——
 もとより語ることはつまらない噂なれども——
 春先はのぼせるといふ、牡丹は見ごろなりといふ、
 今年は不景氣なりといふことに過ぎねど、
 限りなくわが心はしめやぎ、
 つひに予は両手もて眼をば被ひぬ。

お夏清十郎

向ひ通るは清十郎ぢやないか、
 笠がよう似た、菅笠が――
 菅の小笠は似よとても
 向ひの LOGE の右の端
 夜目にはしかと見分かねど……

かう人ごみの中なれば

眼鏡もかけはせうなれど、
 あの横顔は似よとても、
 よもやわが「西班牙」にはあらざらむ、
 いくら戯談がをかしというて、
 ああしどけなく顔そむけ
 笑ひはせまじ、それならば。

あの眼鏡のほしさよな。
 OPERA-GLASS のかれたやな。
 隣の客よ――とは思へども、
 成金めいたその面の高慢ちきが氣にさはる。

PHOCENIUMの後へと

取つてつけたるちよば床の
太夫の聲も腹立し。

ええ、もどかしや、ぢれたやな、
何から何まで氣にさやる
今日はいかなる黒日ぞや、
なほつた疵が身にうづく。

清十郎殺さばお夏もころせ、
生きて思ひをさせうよりも。
なあ、させうよりも。

五月朔日

(明治四十五年—大正元年)

博士と悪魔と

壮き博士

一言もいへない。ど、ど、ど、どうして俺は……
もとはあんなに快活に、直きに激昂して
饒舌つたらう、演説したらう。……な、な、な

何か言ひたい、何か、

何か獨創的な事を、そしてあつと世界の

莫迦どもを嚇かして見たい。

然しうそではないことを——外の人のやうに。

毎晩毎晩さう考へながら俺は一時を聴く。そして三時を。

すると俺の頭はいつか勞れて

そつと感傷的な、捨てつぱちな考が忍んで来る。

寧ろこの杯を(微笑)……一つ……と思ふが

何だか自分で自分を支配することが出来なかつたのが

恥だと思ふやうな古風な道義心が湧く。

滑稽なる悪魔

先生さうむきになつちやあ不可やせん。

少し饅飩粉と食鹽とをお買ひなさい。

早い話がちよつとホワイト・ソオスを拵へるんでげすね。

あなたのお考は少し鹽がきつ過ぎますから

あま口のソオスを掛けて市に賣り出さうてえでげす。

博士

おや、また何時の間にか來てゐるな。

實は俺もさう思はぬこともないが、あちらでも酒肆

いやこちらでも、またあすこでも茶肆——

悪魔

フワン・ゴオホ、セザンヌ、グレコにピカソ、
麴包種は舶來、安くて本物と違はぬ立體派、
アンリイルッソの新柄、内田魯庵の皮肉、
メエゾン・コオノスはエスキヤルゴにグレヌイユ、
ホテルでは先を越して薄茶入れのアイスクリーム。
全體日本人は手藝が巧で、機關だけを取り寄せ、
仕上げはこちらでしやす、巴里仕込の髪へ
宗十郎頭巾などは乙でげせう、一寸目立たぬほどに
江戸、長崎などあしらつて新柄で賣り出しやす。
先生一つどうでげす、山口へ電話をかけて
自動車で帝劇見物としやれようぢやごわせんか。

バックストの背景でドビシイの作曲、
喜熨斗に高橋に波野さん、外題はシャア・ノワアル。
ちよつと六代目がメエテルランク張りでいきやす。
序幕には爲朝がだまつてしつ込むんですとさ。

杜鵑

その頃われは漸く生活の不安に目を瞠りつ。わが日日の順俗の營に憤懣の情を發しつ。かたへには昔の唄耳に悲しきシテエルの鳥を瞻めてはあれども、生活の改造の要求はわが心を鞭ちたりき。

青き夜は、窓越しに、靜かに
卓布の角にさした。牡丹花

音なく落ち、杯の綠酒微に光れる時

室の一隅の黒衣の人の群は
もはや胡散くさき偷視をもやめ
聲段段に高まる……………

SYNDICARISME……………

革命……實行の前の考察……………

一度は血だ……………

牡丹花、五月一日、
濕りたる梧桐にうち揺るる雨後の月光は
たつた今聴いたばかりの投節のころ忍ばせ

眼をつぶり、しめやかに
歌うたふ老女の姿……ふと見ゆ……
昔の世……長き橋……岸邊の柳……

青き夜の薄荷酒

いや更に澄み行くを……牡丹花

またも散り

一度は血だ……

自由思想……理性の闘争……

傳承及び情緒の破壊……

人人の聲あららかに、且つ鳴らす麥酒の杯。

薄荷酒、また牡丹花、

荒みゆくわが心……青葉の空に

啼き過ぐる……ほととぎす。

沖の帆かけ

陸軍大臣は辭職せり。内閣は遂に
瓦解すべきか。幌を被へる車
ひそかに或る門を今通過しつつあり……
うとうとと眠むたし。
而して首相の官邸よりは……
何となくさうざうし。玻璃の青みに

夕日やや目に痛し……
そは大きな港にして……

商業取引所には人氣引立ち……
且つかすかに物の音、銀色の長さうなりに……
檣數多く立てり、岸の二階の
窓の遠見……豆腐賣る船。

老いたる母は慵げに端唄口ずさみつつ
まばゆげに越しかたを見かへりたまひぬ。
そは大きな港にして——
美しき都の日傘横に傾け、

狭き小路を行きつつ、葬列の鐘を聴きすみ
胸いたむやうに沖を眺めつ。

幾すぢか淡き色絲……全國の各實業家
及び新聞記者の團體は集會し、満場一致に……
こんぐらがり、解けもつるる、
その中の青き絹絲を追ひゆきて、
せめて或時の心持だに回想せむものと、美き人の
そのかみの面輪などたどり盡きぬ。

鐘かすみ、讀經悲し。

わが母はさかりましぬ、山のあなたに。

夕雲は色あせゆき、風耳にざわめき、
悲しき心の薄明に魂は消えゆく……

されど、されど、短き絲よ。

瞬間よ……沖のはたてに

黄いろの帆うつらうつら……

海村傳説

心の避難場を持たぬ男らは
海邊に走り
沖の黒船を待ち居たりけり。
黒船の青き甕には

ころり毒巢くひ居たりけり。

それはこの濱の昔話なりとぞ。いまは岩間に
淡紅の石竹花
ほのぼのとたそがれ居たりけり。

時興

六月の薄暮の室に満つる
 紫の煙草のけむりは、或るわかき、
 富裕なる父を有する美術家によりて
 JOHN LIVERY が畫面の雰囲気と比較せられた、
 一人はまた歌劇「釋迦」の旋律について論じた。
 また他の人は

殊更に憤懣の調をなして語るらく、
 「日本の近頃の藝術は、あれは何だい。
 暗示がない。藝術とは、僕の私見だがね、
 つまり未來の生活、
 それを或る形式に凝めたのだ。即ちそれは
 物理学で云ふ ÉNERGIE POTENTIELLE だ。
 力になり得るものだ。遊戲ではない。
 この意味で真正なる藝術とは
 たとへば NIETZSCHE の ZARATHUSTRA だ。
 IBSEN の BRAND だ。
 ちかごろは又 FUTURISMO.
 社會上には SYNDICALISME.

然るに日本の新藝術は
ただ雑駁な現在生活の反映だ。」

突然に風鈴鳴る。風はやさしく

わかきせんねんぼくらの葉に觸れて過ぎた。

「何、藝者か、趣味がないね、

役者の話ほか出来ん。

達磨やないが手がなうて轉ぶばかりや、

我輩一向あかん。」

座隅に

一人の新歸朝者は靜かにリケエルの杯を乾し、

ひそかにちつと四方を見廻はし、

低き聲にて語る

「君、VIOLENCEの存在する所はどこと思ふ？」

「さう突然ぢや分らん。」

「君等はまだCAPITALISMEの萬能を信じてゐる。

夢想だ。

實はBOURGEOISIEに在る。即ちAVEC RAISON.

彼等は夢想しなう。

門閥を誇らない。——然し考へてる。

遂にDYNAMIQUEの哲學を案出した。

見よ。(眼鏡ごしに目をしかめた。)

あれが有名な「豊公論」の記者だ。やがてまた

「ナポレオン論」が出るさうだ。

LE MILITANT……それはもう秀吉やナポレオンぢやないんだ。

RAISONだ。數字だ。

ああ雲の如き夢想者よ。」

時に満堂の興味は

女優論に集中し、箇箇の品評さへ始まつた。

或る詩人は

失はれたる ILLUSION 及び SENTIMENTALISME を歎いた。

會話の滑稽なる螺旋的進行——

人人は今や六百六號の恐るべき効果を賞讃し始めた。

いづくよりも知らず、

一閃の黒色の魔火が、

或るわかい男の胸の火繩へ——近づく、

偶然にも室内が突然に静まり、

人人は故しらぬ不安に捉へられた。

時に一人の男はふと驚いて立ち上つた。

給仕が號外を持つて來た。

柘榴舍利別

柘榴舍利別に WHISKY の酒はたらせども、
銀の月遠き壁にあたれども、
また玻璃燈を吊る船の水を行けども

過ぎし日はまた歸ることなからむ。
鐵橋の上に來りし時、

つと車上の女は
すひさしの煙草をば河に投げたり。
その如く……「時」の老女は
美しい少女に滿鉢の水を持て來させたり。
柘榴舍利別に WHISKY の酒はたらせども……

葱畠の鬱憂

夕かた葱畠の畔を歸る人は
風に取りれじとて帽子を目深に被り、
外套の襟かき合せ、腕組をし、
少し俯きて急ぎ足に行く。

暮れかけた葱の葉は銀緑に青み、
新開の酒屋の羽目がほんのりと

黄む夕の子守唄、
また鳴る汽笛。

二月の末の蒸しあつい

温氣に汗ばむ葱畠。

重い地球の情慾の鬱して芽ばむ春の草。

人人は今なべて

沈鬱に惱みつつ

やや明りたる雨雲の空見上げたり。

と見ればかすかの虹。

悲しき杯

○ 毎日毎日馬の如き精勵に勞れながら予はいつも四つの極致を空想してゐる。
 第一は懶惰だ。第二は冥想だ。第三は藝術だ。そして第四は放蕩だ。
 然しこの四つの連環は群羊が過ぎ去つたのちに唯その數の觀念が残るやうに予に向つては内容なき形式に過ぎ

なかつたのである。

◇ 時といふもののほどはかないものはない。この偉大なる亡靈を記する爲めに人人は各種の空間的の符號を用ゐる。若し人が再び過去といふものに觸れたいと思ひながら其時の空間的記念を尋ねると大抵昔の形は残つてゐないのである。
 さういふ悲哀にうたれながら予は靜かにある繁錯なる巷のうちに改築せられたる旗亭の露臺に涼しき夏の夜のことである一杯の紅葡萄酒を飲んだ。

◇ 事實の認識が大事か。主觀の事實化が大事か。

此事は昔からの大問題であるけれども、この問題さへ考へたことのない人人が教育家の顔をする。(三州屋に於て)

甕を抱ける女

脇に美しい甕を抱いた女が、晩春のやうに肅かに笑つて言ふのは、今日こそはこのうちの貴い酒はみんな貴郎のものですよ。

男が答へて言ふのは、お前はあの阿刺比亚夜話のうちなる、ソロメノの爲めに壺の中に封ぜられた怪神の話を知つて居るか。千年……これから先き千年待つ。若しやそ

の間に誰かこの深い海の底から此壺を拾ひ上げ、そしてわたしを自由にしてくれたなら、何でもその人の欲するものを與へよう。さう心に約束して居るうちに千年の月日が経つた。そこで二千年目の初めに云ふのには、好し、それではもう千年待たう。それまでにわたしを助けてくれる人があつたなら、わたしはその人の奴隸にならう。でまた空しく千年が経つた。そこで怪神は大に悲しんだが、今度三千年目になるといふ日には、若しこの千年の間にわたしを助けたものがあつたなら、立ちどころにその人を殺してしまふと心の中でさう言つた。お前の手に持つ酒壺とその話の中の壺とは事は變れど、わたしにその壺の中のものがいなくなつたのは同じだと言つた。

そこで尙も女がその壺を渡さうとした時に男はそれを地上に落した。すぐさま壺はこはれたのである。

そこで寂しく女から別れて、また自分の荒野の家へ歸らうと思つて歩き出した時には、さすがに悲しい心持になつて男は立ち止まつた。

昔自分は、自分をあの木星にたとへて、歌を歌つて歎いたことがある。と夕方の空を見上げながら彼は獨語した。

自分は木星の如く、ま暗なる無限の空の軌道を歩む。さう云ふ事で歌が始まつた。すると、絶え難き蒼穹の寂寥が身の廻りに音を立ててはすれ違ふと云ふのである。

その時ふと木星は遠き闇の間にほのかなる青色の焰を

見出した。美しい微光である。そして木星はその影にあ
くがれる。——さう歌の第二段が云ふのであつた。
木星の眼は石の如く動かず、かの淡き影のさす永久の果
を見まもつた。すると影はいよいよ近づいて来る。
影は他でもなかつた。彗星であつた。美しい彗星であ
つた。長い緑の火の髪を引いた——
その時刻に兩つの星は最も近く相迫つた。
けれども彼が軌道と、是の軌道とは既に定まつて居つた。
それから外れる事が出来なかつた。
かくて美しい青い星の引いてゆく髪之音、その移り香は
なほしばらくは後方に聞えて居たけれども……然しやが
てもう消えてしまつた。

再び木星は寂しく、その永遠の軌道を行くのである。と
云ふ所でその歌が終る。

かの男がこの古き詩を回想した時に、一味の淡い悲哀の
感じに襲はれた。

あの時は欲して、而して近づくことが出来なかつた。今
はそれに反して近づいて居ながら掴まうと欲しない。

凡ての情熱は消え、何物に對しても興味を持つ事が出来
なかつた。

そんな事を思ひながら、男はまた静かに歩き出した。

荒野の中なる彼のすむ茅屋に、それでも二つ三つの花は咲
いて居た。時に鳥さへ來た。それが煩はしいので花も抜

夢幻山水

(大正二年)

いてすてた。
女はまた新しい甕をつくり、それに新しい酒を盛つて、そ
して市場へと急いだのである。

環山木 (二五二五)

曇り日の魯西亞更紗

銀いろがかつた灰色の
街の柳よ。午後二時ごろの
濁った雲の水底にほんのり青ばむ日輪さま。
なぜかあの眼がちらつきます。
昨夜見た眼が。襟もとが。

曇り日の

魯西亞ざらさの絹更紗の手觸は
暗い緑の中にほんのり青ばむ薄紫のあらせいたう、
さらさらと冷い音のその中に
なぜかやさしい口許が。

初秋の曇り日の悲しきところを何にたとへむ。
子持になつた三毛猫のやつれ様とはいかがです。
左様さ、それも可けれども、
河の向うの白壁にぼつとさす燈の、にはか雨、
月は天空、雨は軒、
梧桐の葉に露が光つて、河ゆく船が苦あげる。
遠い三味で身がほそる。静かな夜に

鎗さびを歌ひ終つた歌澤小登良。
あれやこれやの花模様の魯西亞更紗のさらさらと、
風が出てきて葉をならす。

銀いろがかつた緑色、
いつしかに夜もふけそる、河岸みちを
鍋焼餛飩がとほります。
曇り日の魯西亞更紗は
何にせうぞの。裁つをし、袋戸棚に入れておこ。

ままになるならこの薄玻璃の
マデルラの酒よ、夢になれ。

煖爐のそば

かう煖爐のそばにうつむいて
 何時かわたしはうとうとと寝入つてゐたのだ。
 なんとなき重苦しいねむたさで
 微な遠聲をきいてゐると、
 城下中の人が——袴をはいたり、日傘をさしたり——

みんな街の石垣の下へ来て入日を見てゐるのが
 はつきりと目に浮んだのだ。その時太陽は
 細い火の髪を散らして朱の色で沈んでゆく……

海岸に珍しい船でも来たのかしら、
 笛の音がするよ——長くさびしい——
 一體窓に出した花は泊芙藍だらうか。
 みんな人はあの船に乗つて出てゆくのだらうか。
 笛の方へ、あちらへ、あちらへ、日の沈む海の方へ。

わたしはふと目を開いて、心悲しくも肩をゆすぶる。
 ああ、またどうかして

今日の前に浮んだ國へ、

も一度わたしの空想を連れて行きたい。

でも凝とわたしは鈴蘭の花の所で

罅の入つたエナメルを眺めてゐたが、

冷い風が項にあたつて、いやな灰色の

日常生活の手が襟をつかんだ。「さうです。

ええ、さうして置きませう。何れあした——」

そんな返事をしながら無心に本を見入つた。

ああ、誰か、好い香ひの珈琲でも持つてくれば可い。

それへ些の憂鬱と情操とを入れるが可い。

ちやうど壯い母親の軽い愛想ぐらゐ、太つた手首ぐらゐ、

年増の鬢の生えぎはの白さぐらゐ、

さう澤山はいらないから、何となき情のぬくみと、

淡い肉體的の影響とを些し入れて来るがよい。

わたしは大した望はないが、

いつまでかこんな交睫の國に居たい。

でわたしが突然と立ち上つても、

それが夢の中でやうにふわりとやはらかに

窓の外にぎくしやくとしやちこ張つた新築のゴチックの
屋根も、

いらいらとけば立つた大きな柳の枝も、

みんなこんぐらがつた絹絲のやうな柔みで

わたしのまはりを圍むのだ。おやもう日は

とつぷりと暮れて、外套の襟を立て、首をうづめて

女をんなのひとが二人煉瓦れんが塀べいの下したを通とおる。
 外そとは寒さむいのだらう。だつてあんなに
 紫むらさきの沃よく度ど色いろに夕空ゆふぐらがどんよりしてゐる。
 静しづかに、然しかし、もう晩ばんの鐘かねがひびいた。

ELEGIA D'UN GIOVANE FILOSOFO

眼めを病やむ人のやうに、故更こまに、
 白しろい切きをもつて左ひだりの眼めを繃帶はうたいして
 そのうへ古い外ぐわい套たうで體からだを深ふかく包つつみ、
 そして臉おもてを閉とぢて、輕かろく欄干らんかんに手てを置おく。
 「主觀しゅくわん」と「客觀かくくわん」との範圍はんみ内に關くわんする考察かうさつのうちで

まだ十分に解明の出來なかつた節節を、
 ともすれば湧き立つ感情の波を鎮めて、
 いつまでも事象の永久の相を観ると云ふ態度に
 歸らうと思つて——考へ續けるのだ。

いはば限なき薄青の海の果てへ

わが思索の鳥は羣れつつも飛びゆきかすみ、

わが耳はいつしかに舞臺の上なる

我國古代音曲のところに聴きすむ。

一種固有なる悲哀の曲調、

單純にしてゆるやかなる女等の肉聲は

今し「あみつ狂亂」の古傳説を唱つてゐる。

數百の人の頭は夜の海の如く連り、

そしてその上を、一すぢの悲しい古曲の精神が

かの小さき星の濡れたる光長く水を引くが如くに

此にまた遠く流れる。電燈、赤き幕、靜かにわたくしは、

煙草の灰を落しつつ、また「主觀」と

「客觀」との範圍に關する考察のうちで

こんぐらがり、縋れ流るる一節を思ひ續ける。

ふと見る。わが ORIENTALE は

物言ひたるあとの表情にて、まだ消えぬ微笑をのこし

「いなせ」と稱する俗語にて表さるべき

青年の眼を諦視してゐる。(或る料理屋のわかき主人!)
わたくしは目を外らす。そして心の底に、
ともすれば湧き立つ嫉妬の情を鎮めて、
いつまでも事象の永久の相を観るといふ態度に
歸らうと思つて新しい煙草を取る。

我國古代音曲のころのうちの

東洋傳承の陰鬱なる思想は

單純にしてゆるやかなる女等の肉聲に由り

今し不可思議に數百聽衆の情緒ににじむ。

曲調は次第に下り、一種固有なる悲哀を傳へ、

わたくしをも日本徳川時代の

卑しき感情生活の雰圍氣の中に引き入れ、
ともすれば嫉妬の情に傳統の文を織らせる。

わが ORIENTALE、そなたはわたくしに

深い愛執を起させてはならぬ。嘗てわたくしは

ANTICHEのあとの鬱散に、すずろにも近代の小説を

讀む人の心をもて戯れにそなたに近づいたのだ。

卑しきわが ORIENTALEよ、わが PRIMAVERAよ。

そなたには適當な侶伴がある。

今唱つたばかりのそなたの TOCHIUANを味ひ、品評し、

そのところに同感するには、他に其人が有る。

われわれはおのおの異つた國に在るのだ。

眼をやむ人のやうに、故更に、
 白い切をもつて左の眼を繙帯して、
 そのうへ古い外套で體を深く包み、
 分裂し、こんぐらがり、醜く荒れたるわが内心を
 隠さむとすればこそ、軽く欄干に手を置き、
 「主観」と「客観」との範圍に關する考察のうちで、
 最も解し難き一節を考へるのだ。

そと立ち上る。悲哀の音調——
 單純にしてゆるやかなる女等の肉聲は
 なほわが耳にあり。透し見すれば

戸の外は冬の月朧かに微むらし。寧ろわたくしは
 靜かに長き細道を歩みつ、ゆるく悲しく
 内心の醗酵するのを聴き樂しまう。さらば卑しき
 わが ORIENTALE よ、わが PRIMAVERA よ。

抒情小吟

(大正二年)

窓のながめ

久しぶりにて

久しぶりにて街にいではなしかを聴いてかへれば夜おそく家にかへれば故しらず心かなしや

我をよく

我をよく思ふ友よりゆくりなく消息つきぬその友は男にしあれば朴訥の男にしあれば一しほに心かなしや

わが心

わが心ややに老いわがかほもふけ荒みたり夜おそく鏡屋
の前をとほりて心ふと——ふと驚く

いくたびか

いくたびか海のあなたの遠人に文かかむと思ひいくたび
か海のあなたの遠國に去らむと思ふ今宵また宿直の室に

せめてなほ

せめてなほ金だにあらばかく思ふ心おこりぬ外にわれ慰
を得む

わが心

わが心は敷島の火の紅の口にある間はいとほしけれど
つと投げられしすひさしの夜の水に消ゆるはかなさよ敷
島の火のちりぢりに

*薄暮鐘橋を過ぐる車ありけりその頃はまた珍ら

しき太輪の護謨の音も立てす過ぎゆきけりわが

癡れたる友のひそかにアヌンチャタまたエスパ

ニヤと名付けたる人のすひさしたる煙草を車上

より欄干を越して水に投げたるを見つ

よるよるは

夜よるは 夜よるは
ねむし口惜し腹立し誰も知ることなれど時とし
てはまた悲し

車

忙しく動く器械の中にたまたまは微妙の音を出す車あり
油は切れて調草火を出すうちに情あり

河の遠見

車の下にあやめ草大河の遠見にこがるる心鳥入相の雲に
入る

人の心

掟は破りて君とわれ人のそしりもなんのそのさう云ふ心
もあるものと思ひ不思議に思はるる

たかのつめ

情を深くつつみたる女を見ればあくたの中にたかのつめ
咲きたるやうにも思ふなり二月の雨のなんとなく春めき

出して心こそばゆきやうにこそ

やはり何より

やはり何より昔たべたるあん餅の深きなさけの思ひ出さ
る窓のがらすに雨のふる日の午後の暗さにつくづくと

薄なさけ

どこにどうして居るやらむ到底我慢の出来まじなどと考
へたれども現在なければいつやらに知らぬ昔に變らなく
春くるたびに鳥はきて川柳の葉が水にもまゐる

飛行船

飛行船が見えた腹が見えた空の沖をばいういうと泳ぎ去
る大魚見ればあとななれども何となく悲しき氣のする夕
まぐれ

夜ふけには

消息

静かな夜に長い手紙を西洋の友だちに書いたらば何とな
しに心なくんだ異國人なれば河の流れよかかる思も消息
もまた見ぬやうに消ゆるらん海のあなたに

火の番

火の番のまはる夜ふけには日ごろ忘れた思などまたも浮

ばる泥水にあひるが首を入れてまた出したほどに

たまたまは

たまたまはもと知つた女の人と連れ立つてゆくのがねた
ましい氣にならぬではないどうせ火に入る身ではなしあ
れはあれまでと家にかへればそれやこれ忘れはてつつ勞
れまどろむさびしさ

むかしの仲間

むかしの仲間も遠く去ればまた日ごろ顔あはせねば知ら
ぬ昔と變りなさはかなさよ春になれば草の雨三月櫻四月
すかんぼの花のくれなゐまた五月には杜若花とりどり人

ちりぢりの眺め窓の外の入日雲

五二八

飛行機

飛行機から人が落ちて死んだといふ號外を見ながら夜お
そく植古聿のむ何となきいたはしさかなしさ小氣びよさ
小づくりのおかみは沙汰過ぎたれども眉は剃れども

女よ

女よそなたはわかけれど美しけれどもこなたが身を捨て
てまで惚れる氣はなしすますのはにくけれど愛そのよき
はねたましくそなたでなうてもこの俺はたんと知つた女
があるまた金がある意氣地もある所詮そなたは河原のよ

もぎ茶前酒後また雨のあとの窓のながめにはよけれども
飛ぶ鳥よぬれた燕のそれこれのつれづれに

たとへ品は

たとへ品は低うてもそなたは女はつと思ふ時もある岩に
咲いた紫陽花も雨あとの夕日を受けたればくわつと光る
時もある

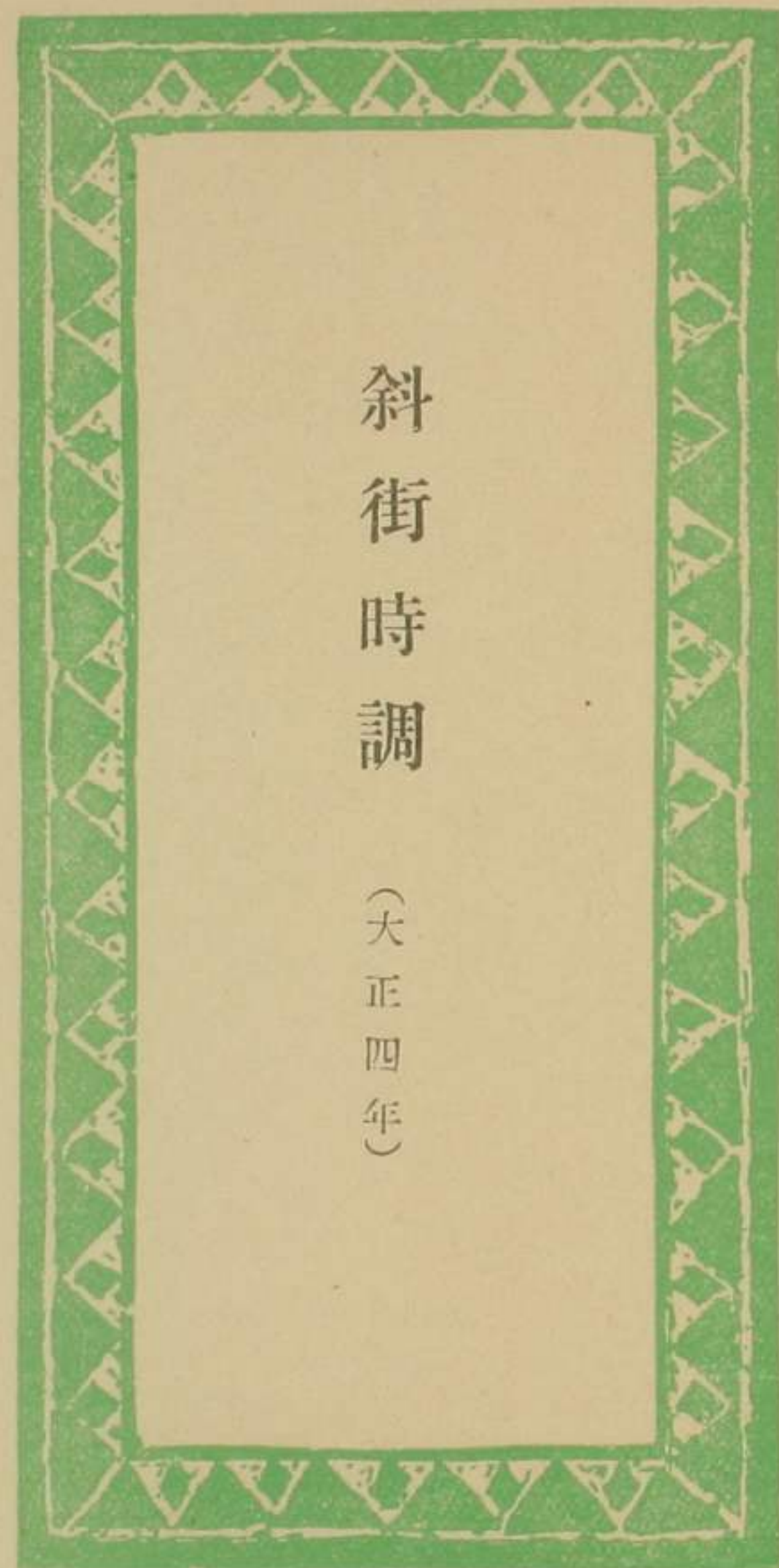
硝子のひび

月かげは窓のがらすの一つの罅をさへきらきらと銀色に
光らせた故もなく湧き出でたる今宵の悲哀は過ぎし日の
雑艸に似る薄情をもいとどいとしきものに思はせた

五二九

斜街時調

(大正四年)



桐の雨

たつての望につひ氣が變り
悪い唄と知りながら、桐の雨を弾いた。
さてはたくみにてありしよな、其後ふつと、
足斷つた男の、男心のつれなさ。

怨情

直あさん今晚は来ないのかしら、
待つともなく話しこんで
御座敷さへ断つたが……
ねえ、おかみさん、
直あさん今晚は来ないのかしら。

邪推

それはあなたの廻り氣よ、
それは邪推といふものよ、
あの人だつて、ねえ、あなた、
随分苦勞してゐるのよ。

根なし草

瓶にさいた青い花、
ふびんだけれども、根なし草は枯れる。
今更にどうせうぞ、
ねえ、お前、根のない草は
かゝれゝるゝよ。

かぞへ歌

二月には雪の下から葉を出いた。
三月には莖出いた。
四月には花咲いた。
さても五月も末となり、身持になつて、
やせ細つたいたいたしさ。どこの酸模、
忍びづま。

(大正五年—八年)

(大正五年—八年)

序

大正五年秋予は職を奉天に得住み慣れた東京を後にして、滿洲に渡つた。まだ新任の地に慣れない間は、朔方の風雪に心を傷ましめ、夜はしばしば窓に倚つて故國の情を起した。當時予は殆ど小曲の製作を打ち捨てたが、それでも齋藤茂吉に寄せた書翰には、時折此新愁を歌つた小抒情詩を書き添へた。今之を集めて十餘曲を得たのである。

竹枝

五四二

初めて満洲に來た年の秋、予は吉林省を旅行した。
縣城外の或る田舎で地名を尋ねたら、とんかといんだ
と云ふ返事であつた。予に此地名を教へたものは
無學の小童で、予は遂に其字を知ることが出来な
つたのである。
予は蕭索たる荒野の暮色を眺めてゐると、何の曲
かを歌はまほしい心が起つた。當時支那の聲曲は

予は一つも識らなかつた。微かに耳底に残れるもの
とては、江戸傳來の阜曲より他はなかつたのである。

吉林省吉林縣

吉林城外のとんか屯

夕闇の野中に立つて薄墨の歌をうたへば、
薄墨の歌をうたへば涙ながるる。

五四三

等一會兒

五四四

其後月日の經つに随つて予も漸く滿洲に慣れた。
然し一年後の秋、滿月の日の宵、月が餘りに良かつた
時には、不覺にも亦過ぎし日のことなごを思ひ出し
た。わざわざ馬車に廻り道をさせて昭陵に到る原
中に出た時、「等一會兒」と云つて馬車を停めた。

待てしはし、
今宵は中秋滿月、
夕闇のうちから月が出て居る。

瀋陽の邊門の外、
貧しい家からも樂の音が聞える。

等一會兒！馬夫、馬を停めろ、

おれは忘れ物をしたぞ——何か落した。

——だがそれは前の辻ではない、

もつと前だ、前だ……どつか心の隅だ。

——何時であつたか、

おれは何か思ひ付いて、それを忘れて、

今までうち捨てて置いたことがあつたが……

五四五

生活のまじめさ、つらさ、
いつか心も老いて——さうだ、その事だ。——忘れてしま
つた。

今支那も朔北の果、
瀋陽の城の歸るさ、
ふと十五夜の笛にそそられ、
さうだ、思ひ出した。さうだ、その事だ。
車を停めて何になる。
去！馬夫、歸つても可いんだ。

梅郎唱蘇三

支那の梅蘭芳は美しい青袴、
それが蘇三になつて哭くのを見りや、
異國の僕だつて泣かずには居られぬ。
北京西市口第一舞臺、
隣の人柄の好い、わかい男、
あんたの泣くなあ尤だ。仕樣ない、構やしないよ。

壺を埋むる人

御覽よ、——今夜は中秋満月、
城内ではお祭をして、
祥子の響もかすかにする。
それを、折角の月さへはばかり、
夕闇にまぎれて野中へ出て、
あの支那人は地の中に何か埋めるよ。
何だらう——壺の中のは。

兎に角に、小さい壺を、
そつと匿す心——暗い心。
ねえ、お前、分るかえ、それが？
もう冬だ。緑は黄ばみ
今に野は一面の雪となるのだ。
ねえ、お前、自分より外には、
誰も知らぬ壺は雪の下に埋もる。
来年は雪も解けやう。
また青草が芽をも出さう。
誰も知らぬ壺がその下に埋もる。

それが一體何になる

その昔の夢が、よしや譬ひ秋の日の、
大なる樟の梢のやうに實になつたからと云つて、
それが何になる。それが爲めに今の此おれが
どれだけ幸福になつてゐる。
どれだけ價値を増してゐる。
大都東京の街中で人が後を見返つて、
あれこそあの人だとささやき合つたからと云つて、それ
が何になる。

人の金を借りて大きな地面を買ひ、
それをまた人に賣る仲買人の榮耀は、
それは取りたい人に取らせてあげ、生から死まで
ただ自分の本當の樂しみの爲めに本を讀め、
生きる、恨むな、悲しむな。
空の上に空を建てるな。
思ひ煩ふな。
かの昔の青い陶の器の
地の底に埋れながら青い色で居る――
樂しめ、その陶の器の
青い「無名」、青い「沈黙」。

或夜の口ずさみ

五五二

何が悲しいとて、時ほごむごく悲しいものはない。
自分の十年、十五年の過去さへ、ふとした古き唄、その
かみのすけつち、ぶつ、くの紙の片からも取り返し
つかぬ遺失品として思出させられる。また取り戻
すことが出来ないといふ諦念が、現在の生存にけ
ちを附けたがる。

御用心なさいよ、あなたの手から
「過去瞻望」の悪魔が、命の珠を、
一寸見せて下さいとて借りようとしたがります。
ほら、高く抛つたり、巧く受けたり、
自分の玩具のやうに秘術をつくします。
一旦地の上に落して御覧なさい。
もう罅が入りますよ——命の罅が……

五五三

満月

支那人の笛にそそられ、
満月を見るとき、
白居易の集を舍いて外へ出る。
昔、あなたには、この月に思を託した
遠國の友達がおありでしたね。
わたくしも何かさう云ふ氣もしますが、
さて、何でしたか、一寸思ひ出しかねます。
何だつて、もう昔のことですからね。

湖

お湖、水銀の面なす湖。
HENRI MARLIN の緑なす山の間の湖。
寂しいホテルの硝子に
頬を當てて——静かなる夜の雪の
汝が面に消ゆるを、涙して見たる湖。
湖、精進の湖。
もう三年——そなたには會はぬ。

もう三年——あと三年、
 或はそれからまだ幾年——
 時が社會が俺から凡てのわかかしさと
 嘗てそなたの傍で蓄へた空想の寶とを、
 みな奪つてしまつたあとで、或はまた會へるだろう。
 なぜか今宵はそなたを思ひ出した。

お湖、沈黙の湖

法隆寺の畫壁なす肅かな湖。

そなたは、今頃は、もつと俺よりわかく、
 希望と空想とで顫へてゐるやうな青年を、

そなたの乳緑の——陰鬱で、氣高く、すばらしい——
 昔の LAMARTINE の詩のやうな羅曼底の面わで
 穢にし、惱まし、泣かせて居るだらう。山の間の湖。

我われも亦また汗あせばむ、馬うまもまた汗あせばむ。

ツウ・テン・ジャック、

スベエトのにおだ

理由は説明出来ぬ。

右手に額をかかへ、
前後人なし、
廣野に向ひ、絶叫し、
呻吟す。
ああ、いやだ、命、
スペエトの二の札、

夢

ほんたうに夢になつた。
「到底實現の出来ない
ほんたうの夢になつた」といふ思想は、
夢といふものから
凡てのあまみ、なつかしみを追ひ退けた。

夜ひそかに訪るる友

五六二

ああすゆいしいど、その言葉の美しさ、懐しさは、
ああ何にか譬へむ。たとへば淀の川瀬を
夜、船ののぼると、小さき燈かすかに點し、
舟人の漕ぐ艫の音の
だんだんに遠ざかる如くに……
或は竝木道に五月の若葉
陰鬱に汗ばみ青み、

眼路遙か三角形に
ぼんやりとぼやけ行く如くに……

窓の外は雪緑金に、
月光さやけく、眼痛く騒がしけれども、
紅き、厚きりどちの裡は、
空氣重く、温く、べちゆかの内に火の燃ゆる音、
遠き川の瀬かと思はるる
植民地の冬の夜の静けさ。

われは食後、熱さかかあのあとのしえりいぶらん、
些し頭の重きをぢわんにまかせ、

五六三

いつも夜夜は訪ねて来るなる
わが友、わが遺傳性素質に原づく
重きめらんこりの、足音を待つ。

已に彼はあり。われは隣房の蓄音器の、
卑しく痛しき徳川古曲の悲哀を語り終へて、
なほとめ手のなきまにざりざりとめぐる聞きつつ、
ふと心のうちに
春月の
海に入る
小さい川に
新潮の入り来る音かと差せる

歡喜に軽く驚く。

す・ゆ・い・し・い・ど——その寫象の
わが扉、おとづるるそれなり。

春の夜の大雪

五六六

静かなるホテルの夜、
或る露西亞將官の夫人は
涙して我等の物語を聴きければ、
半ば、われ童話書く心になりつつ、
美しき日本にありし
わかき日の事ども、いと真しやかに、
其實はいたく誇張しつつぞ物語りける。

「あな、新に茶を呼ばむ、
ベルタ、鈴押したまへ」——いたいけの童女に、
「汝もいまの話し解き得たるや」といひかけ、
窓に寄り「あれ、雪また強くなりぬ、
春なるに」と獨語ちつつ、静かに
暮方の街うち眺むるけはひ。
是れもわが羈旅の一とき。

五六七

或る夕

春なかは今日の大雪、
ペチユカ焚く室のうちの
青白き窓に寄りそひ
ペコニヤの呼吸づかひしめやか。
夕べわれ家にかへり

人げなき卓の上に見出しぬ
思ひがけなき人の繪葉書。
街道に人もなく
奉天の新市街、風やや勁く、
雪に暮れゆく。

解 悶

心好き我露西亞陸軍大佐に呼ばれて
夕餉しつ、また些し勢球兒飲み、
ひとりわが荒れたる書齋に歸り、
良き煙草、フェルカ吸ひ、頰杖つきつつ、
過去よりの悔恨のかずかず瞻む。
誰にいはむ。言ふともかへらじ。

われ江戸の都にしあらば
かの豊後節の哀調の底にも潜み、
身を破りなげきもせむに。
時ぞ、いま、その時よ、國際聯盟、
處、いま、あなやをぞ、滿洲奉天。

梟

ぼおす、こおす。

山は紫。

ぼおす、こおす。

梢の小枝。

ぼおす、こおす。
海の白浪、

ぼおす、こおす。
暮れゆく汽笛。

ぼおす、こおす。

山の三日月。

ぼおす、こおす。

冬の夜の風。

蔵の戸のかたこと鳴りて
街道に人はとだえつ。
ぼおす、こおす、裏の社に、
音をたたず、小さき梟。

その時は、十歳にてありき。
今はわれ、支那奉天に。

海ははるばる朦朧として
女人のすがた (大正十年—十一年)

窓掛のかげ

心して、静かに窓を開けよう、
少しばかり、ただ細目に。
見えるかしら、紅、藍、緑、紫……
四角に簾めた硝子の家が？
そしてやさしい、母らしい年増の、
明治初年の婀娜、
便なき女の意地、

弱よわ弱よわしい素足すあしのしなが？――

今いまわたくしはフエオドル・ソログブの
灰色はういろの田園風景でんえんふうけいを讀よみかけて
ふと本ほんを置き、心こころに叫さけんだ。

「窓掛まどかけを開あけて見みよう、
静しづかに、心こころして」と。

「事ことによると見みえるかも知しれない。

だが静しづかに。

氣きをつけないと、

きつとその色いろ硝子がらすの

幻像げんざうは結むすばぬだらう。」



ただちよつと、ちよつびり見みえて
すぐ影かげは揺ゆれて碎くだけた……

NEW YORK 港外三里、

波なみ、灰色はいろ、日ひかげうららか、

舌打したうちして、頬杖ほづえつき、

つと燐寸りんさんをわたくしは點てんじた。

海日玲瓏

五八〇

ああ君は讀みたまふ、
「LA FONTANA DE ORO」、西班牙の物語、
われは其語を解せず、
説くは是れ如何の人生ぞや。
日はうららか、波ははるばる、
島クウバ、影未だし。
明日宵は椰子も見ゆべし。

同胞を持ちたまふ、
妻子をも持ちたまふ、
ああ、君は其島に。
日はうららか、波ははるばる、
われは、ああ、遠く來ぬ、幾千里ぞや。

五八一

傍觀者

わたくしは見た、安徽省徐州の府では、
狭い街道に乞食がうようよして居た。
わたくしは見た、奉天府、城外の小路に、
盲人が絃子弾き、苦力が垣を造つた。
わたくしは見た、哈爾濱の雪の夜道に、
醉漢の群の叫びつつ過ぎゆくを。
わたくしは見た、紐育、四十層の高樓、

その飯館、割烹店、道化芝居、戲場の盛を、
今は聴く、夏真晝、蒸氣船「メヒコ」の上に
人人の群れ語り、賭博し、ピアノ弾くを。
西班牙人、其言葉の
さうざうしさ、何を語るぞ。
ああわたくしは遠く旅し、多くを看た。
そしていつもひとり片隅に坐つて
物寂しく自分を眺める。

南島の夜

五八四

喫するは是れ ROMEO Y JULIETA
飲むは是れ RIOJA 南國の酒。
LA FLORIDA
HABANA の酒舗。
窓に聽くギタルラ、
艶なり、歌曲。
劇錯、市の東、

街苑、月は斜め。
七月二十六日、
夜九時、號砲鳴りぬ。
さむしきかなや、異境、
故國、海はるばる。

五八五

知

知識はめでたし、人、知識を得むとて、
精進し、年を老いしむ。
知識はうるさし、人、知識を得て、
心を硬くし、其純粹を失はしむ。
凡ての人生は、ただ
彼が識認の一部となりぬ。
ああ覺者ゴオタマよ、

君が明鏡に映りし幾億の世相の影の、
如何にしてか、さは、巨いなる一の命とはなりしぞ。

われは廣く世界を旅し
われは已に多くを見たり。
われはなほも見んと欲す、
わが心、日に日に虚し。

該里酒

亞米利加人は水を飲む。
頭ほどの肉を食む。
皿に餘る果餅を盛る。
正義、理知、
商業、禁酒、
巨大なる BANALITE の國よ。

わが船も、されば、めでたし、
クウバ通ひ、MEXICO とぞ呼ぶ。
われに與ふ、一盞の該里の酒。

該里よ、わが初め、汝を知りしは、
小網町「鴻の巣」の家。
その時汝耳にほてり、
われは聽きき、呂昇の歌の空鳴。
(さなり十……十幾年の昔……)
呂昇は已に老いぬ
われも亦漸く老いんとする。

樂しきかな、眞夏の船路、
日はうららか、波ははるばる。
悲しきかな該里の酒。

* 以上六篇クウバの旅にて作れる

エズギオの遠望

始めて雨が霽れ、今朝、島の影が
はつきりとして來た。三角、雪を載く峰。
吐く煙は雲に包まれ、
いらいらし、點點、遠く立つ波。

静かなるソレントの宿、

窓に向ひ、われ物讀むとき、

空想と願望、遠き世の過去、近きわが過去、

こんぐらがり、解けつ揺れつつ

打ち寄する、また引き返す、――

船著ける堤防、そこに散る波紋の如く。

思ひ浮ぶ、カルナック、大王の宮居

また女王ハチエブスト建立の大伽藍。

大道は砥の如く、日ぐれにはニルの河岸、

麗人の傘ささせ、行きも過ぎけむ――真晝見る夢。

認め居たり、わが君、ナフリット――幻想。

しよせん實にならぬ幻想。

それならもつと落著いて――齡もくだつた――

中世歐羅巴の

開明史でも讀まうか。

もつと現實的な

強い世界を作るための貧者の一燈にもと

せめて生きがひのあるわが世を送らう。

「あや」とわたくしは驚いた。

「あや、どうして。」「宿命ですわねえ、

これが淨瑠璃の文句の、因縁とでも云ふのでせう。

わたし、來ましたわ、たうとう。」
指さし示す越しかた。

「まあ洋服なんぞ著て。でも似合ふよ。」

「をかしいでせう、人が笑ふでせう。」

いくら何と云つたつてわたしに洋服。

見て下さい、わたしの髪を。

油はいけぬといはれて唯オオド。

コロオニユをつけたのよ。それにこんなに白髪。

——もうあんまり遅過ぎます——」

「もうあんまり遅過ぎる——」

はつとしてまた考に耽らうとする。

「あや、もう去くの？」とわたくしは叫んだ。

「もうあんまり遅過ぎます。」

波は姿を載せて遠く消え去り、

エズボオの山にはまた雲がかかる。

ナポリからの船が汽笛を鳴らす。

學者となつて生きるのが好かつたか、

また情操の往くに任せて

市井無頼の仲間にはひり

巴
黎
山
歌

五
九
六

ナポリ人の如く死ぬのが可いか。
以太利亞人は知るだらう。中世人道の
先生たちは何と教へる。
紛紛蠹魚の裡、是れ人、是れ生。

四月某日伊太利亞ソレントの一族
舎にて作れる

或本の序詩

日はつねに速く
人はつねに遅れる。
遅れぬ奴は
夕飯の酒の味知らぬ奴、
勝手にするがい。

CHATEAU D'IQUEM

1911

巴 璩 山 歌

月 亮 一 出、 第 一 に
異 國 巴 璩 の バ ン テ オ ン
賑 ふ 宵 の サ ン ・ ミ シ エ ル
支 那 料 理 屋 の 奥 の 間 は
吳 越 の 客 の 六 七 人。

橋 は 名 高 き ポ ン ・ ネ フ の

十 時 に 近 き 人 流 れ。

今 日 珍 ら し く 初 夏 の
け は ひ に 浮 か れ、 つ ぶ つ ぶ と
巴 璩 景 緻 を 口 ず さ む
黄 黒 き 人 の さ び し さ よ、
秦 淮 の 水 こ そ 優 る め れ。

諷 詩

電氣、瓦斯、飛行機、
凡ての現代文明は直路坦として戦争に向ふ。
他民族を殺す努力、
必然にはあらざれども自然の勢なり。

進歩、能率はその合言葉、

かの島國の小さき人人は
凡ての HUMANITES を離れつつあり。
(HUMANITES とは畢竟是れ「ことば」なり。
「ことば」の負ふ精靈の果實なり。)

蒼茫極みなき古き國、支那。
その聖賢によりて彼の倭人等も
始めて人らしくなりつるなり。
今や牛を馬に乗りかへむとて
英語、獨逸語をその言葉に飾る。

無論希臘羅甸の巨匠の
思想を傳ふる響なんぞ知りはせで。

今倉皇として隣強の勢威に恐れ、

（現代の匈奴は東洋を壓す、）

それに倣ひて造り得たり、七階の猿の高樓。

帝都のまん中にわるじやれな某ホテル。

（獨創は典雅を顧みずと曰ふか？）

言ふらくは能率、進歩及び文化。

文化鍋、文化住宅文化蠅取り器。

かの島人の相醜く貌いやしけれども、

ゆめ之を輕んずることなかれ。

少くとも時勢に遅れぬ

才智をば彼等は持てり。

うつかりすると

どてつ腹を突かれるぜ。

女優の評判

これが御國の女優なんですつて？

頸が細いわねえ。

頭が大きいわねえ。

脚が短いわねえ。――

それはですな。

そもそも、昔、我國の演劇は
人形芝居に型を取りつるなり。
御存知ですか、藁の胴へ
細い首を上げるのです。
その風習が今も残り……

繪入週刊

六〇八

おや、それはあなたの國の新聞？
繪入？
週刊？
それは何なんです？
これはですな、
或る主義の團體と、

また或る主義の團體との喧嘩。

勇ましいでせう。

制服、サアベル、プロバガンダ、

七階のビルヂング、

短刀の血祭。

セツシユウ早川そのままでせう。

そしてこれは？

それはね、何と言ひましたな、

御國の言葉で？――

わたくしの國では言ひます。

くりからもんもん、犬田小文吾。

六〇九

リユクサンブウル公園の雀

ベンチにかければ雀が來、
互にくつき異な眼をし、
耳こすりでも言ふ如し。
「あいつけちな奴。あいつけちな奴。」

残念、生憎麴包もなし。
わしが國では、なう雀、
足音がすれば逃げて行く。

マロニエの花

それはあの巴里の
いつもの曇り空にマロニエの花の
散るやうな日であつた、
わたしは一人の寂しいエトランゼエとして
ある橋の欄干に身をもたせて

ちつと行く水を眺むる人であつた。
などと、二年もすると
罫の引かれた紙に
物書く身となるのかしら。

小風景

六一四

窓から雨を見る。
羅甸區、
寒くなつかし。
日曜、
朝遅き珈琲。
近頃はマリイラン、
それも残り少し、

「アロオ、アロオ、
小断は居るの？
コメデアにマタン、
マリイランの黄いろの包一つ。
それに昨日の NOUVELLES LITTÉRAIRES もあつたら。」

六一五

七つ森

久しく七つ森の雪を見る。
たとへ世が世なりとするも
八年苦心の羅馬、
語ることも一つもなし。

無さに非ず、分らなんだ。
不遇はもつけの幸ひ。
もしかして後世あれを
戯曲なんぞにと志すやつが出るか知れぬ。
それは大馬鹿。
へへんと或る日の支倉がつぶやいた。

餘白の樂がき

六二八

その歳にわれも亦なれるか、
悲を知る歳に――
子を失ひたる人の――

窗外今朝は霽れたり
物讀みつつ、眼すすまず、
思想停滯す。

情緒悲哀を繞る。

故國の首都は焚け、
わが半生の苦樂、
探究、羈旅のかたみ、
凡ていづくにか消えぬる。

われはただ黙さむ、
かの大なる苦患にくらぶれば
ものかは、わが意志。
石の如く、小さく、無名に。

六二九

怨言

一年の今、始めて言ふのですが、
——と、わかき女が語つた——
もう始めての日から
察して居たのですわ、わたくし。

月の夜、宿から出、
松原を歩いたでせう。

結婚の第三夜、

あなたはたんとたと
話しても……愛しても……下さる筈でしたわ。

あなたは時立止まつて、

ぼんやりと海を見ましたのね。

わたしもう分りました、

その時から。

あなたの頭のなかは、

あなたの過去——喜と悲、

そこにはわたしと云ふものは

毛ほどのかげもささない別の世界——

突然二人の男連が、

暗い砂丘から來てすれ違ひました。

——わたしはよく覚えて居ます——

だつて其眼に嫉妬と敵意とを見たのですもの。

わたし言つたのよ、心の中で、

「お氣の毒、間ちがひ、怒ることはないのよ。

傍から見るとやうな——ええさうよ——

そんな、そんなわたしたちぢや、ああ、ああ、

無いんで
すよ——」

さう思つてついわたし泣きました。

それはあなたにも分つたのでしたね。
そしてあなたの眼にも涙が見えました。

しかし二人の涙は、

源の違つた

別別の泉から出た流、

一年の今も瀬とならず……。

ボオル・シエラルダイの「おまへとわたし」を
讀みし日。巴里にて。千九百廿三年。

春のおち葉

序
詩

春にして細葉冬青の枯葉の
色紅く、音も無く散りゆくは
秋の落葉に比して
さみしきかなや、ひとしほ。

×
草の芽に落葉や雨のしめやかさ。

薄暮の人影

あれ、あの侍はどこへ往くのだらう、
そろりそろり旁目もふらず……

荒海は薄暮に黒み
汀には小鳥も鳴かず、

村はづれ、あれから先は

十幾里、人ざとも無いのに……

あれ、あの侍はどこに往くのだらう、
しよんぼりと腕をこなぬき……

今、あれ、橋を渡つた、
だんだんと姿とほのく。

森は暗く、ただぼんやりと、
白いかげ……さつさつたる松風。

消えてゆく轍

○ 我我は希臘人風の物の考へ方をしようとして努力する。此世を善くしよう、美しくしよう、知識と藝術とを以てこの人生を確かにし、深くしよう。然しそれは附け刃である。ともすると直ぐに、かの悲哀感情を伴ふ宿命主義の誘惑に陥つてしまふ。

諸行無常の説も原初には淺薄な宿命觀で無かつたかも知れない。それが平安朝、戰國、徳川時代の層をくぐつて來た今では、全く、悲哀感を伴ふ感傷主義になつてしまつた。

○ 近頃病臥すること五旬であつた。枕頭に繙讀したもののうちでは、アナトオル・フランスの「天使の叛逆」よりは、古典全集の「芭蕉全集」の方が身に沁みた。一首の發句には故園の響があつた。

○ わたくしも亦この情緒になじんで慣れぬ句作をして見た。

春風や三句のひげ剃りて寒き

○ 其角が「芭蕉翁終焉の記」は凄絶の文章であつた。同じく腸を患ふる身には、一氣に讀み了ることを難んじた。

○ 人が死んだ。最も親しき人の一人が。其異常なる死は寧ろ甚だ心理的のものであつたが、ニイチエの所謂社會の膽汁たる新聞紙は是れにいろいろの不吉なる風評を架構し附加した。彼等蟻の羣を憎む心が我胸に満ちた。

春の曇り日に柩車の漸く遠離するのを眺めると、此時倏ちかの諸行無常、生者必滅、會者定離の思想及び感情が、幾百年薰習の、小乗の精神を以て、枕頭の子守唄の

如くに、わが心前に來り臨んだ。

ここに悲あり、ここに夢あり、またここに慰めがあつた。

君逝いて草の新芽に回向せむ
とちの芽の膨む枝の落葉かな

○ として結局は宿命主義の諦念に終つてしまふ。
花の下塞翁が駒夢に見よ

四月十七日夜

朝、亡兄の爲めの追悼會の通知を受く。夜、書を読みながら、思、舊所に滯る。

○

苛まれた心があたりを見廻はす。
何か外に其原因はないか。
何か報ゆべき仇はないかと。
仇があつて復讐が出来れば、

それはたとひ身の破滅であらうとも、
心はその爲めにうちなごむであらうのに。

外に仇はなく、手の擧げばもない。

苛まれた心がただ身を責む。

春燈風冷く、

滂沱たり、ただ涙。

跋

花の軒酒に涙の味す

永代橋工事

過ぎし日の永代の木橋は
まだ少年であつたわたくしに
ああ、どれほどの感激を與へたらう。
人生は悲しい、
またなつかしい、面白いと、

親兄弟には隠した
酒あとのすすろ心で、
傳奇的な江戸の幻想に足許危く
眺めもし、佇みもした。
それを、ああ、あの大地震、
いたましい諦念、
歸らぬ愚痴。
それから前頭の白髪を気にしながら
橋に近い旗亭の窓から
あの轟轟たる新橋建設の工事を
うち眺め、考へた。
これも仕方がない、

時勢は移る。
基礎はなるべく近世的科學的にして、
建築様式には出来るだけ古典的な
莊重の趣味を取り入れて造つて貰ひたい。
などと空想して得心した。

それなのに、同じ工事を見ながら、
今は希望もなく、感激もなく
うはの空にあの轟轟たる響を聴き、
ゆくりなくもさんさん涙ながれる。

あんなに好きであつた東京、

そして漫漫たる隅田のながれ。

人生は悲しい、

ここは三界の火宅だと

——ああ恐ろしい遺傳——

多分江戸の時代に

この橋の上で誰かが考へたに相違ない、
それと同じ心持が今のわたくしに湧く。

水はとこしへに動き、

橋もまた百年の齡を重ねるだらう。

わたくしの今のこの心持は

ただ水の面にうつる雲の影だ。

奥の都

(大正十五年—昭和三年)

行く水に×おくれろて淀む花の屑はな

永代の新橋は亡兄の心血を濺ぎ設計せるものにてありけるなり。

奥の都

ふと窓外に看たるは名にしおふ白川の驛の名であ
つた灯のついて間もない頃

秋雨やみちのくに入る足の冷

晴れたる日に町を歩くといろいろの變つた風情も
見られる

桐の實やおくの都の家さびて

桔槔といふものの音をも聴きなじんだ
はねつるべ厠の窓の雪明
炭吹いて酒あたたためつ桔槔

草堂四季

昭和貳年

ちとぬるき風呂の加減や。二月空の北廂。

北廂鳥が羣れくる。さもあきなむ雪の下の葉のいろ。
庭に雪。梢に星。白壁に原知らぬ灯かけのゆらゆら。

今日はまた音色が變る。雪にきしむかつるべ。

はねつるべ、空の月は小さいか。

*

塀の下一寸の青、瓦に薄き日のかげ。春遅し北國の空。

わが庭はとさみづきの黄なる花春を名のらす。わが春は雪日ねもす。夜の風雨戸を鳴らす。

あちこちに葉の出でて、それぞれに命を張らす。白壁春の冷さ。

葉に出でて水仙とこそ知られたれ。ながき日のかげ。霜にあれし地の色。

とつせんに庭から葉が出でた。花咲いた。春の流轉なめらか。

今日は貌きのふに變る。一日待つたる不覺。春の流轉けざやか。

鉤で移す比目魚や。日の滑り路次のうららか。

棟上の矢の根はづしつ朧月。

人遠し、春の路。日は落ちて空のやはらか。

街上ふと止り、たそがれ、春音を聴く。

※

たが植ゑし牡丹ぞ、葉のしげり、花小さくなり。

牡丹は地に慣れたり。牡丹は風雪にめげず。夏五月牡丹は葉を繁らす。地に植ゑて二十幾年。牡丹は今年も花を開けり。既にその色は淡く。既にその花は小さく。

あさごけのほそぼそと、わが庭も夏に入りけり。

丸蜂のふと飛びこみ、おや夏だ、さすがにと、しばし眺めた。

ほろほろと散る桐。かくかうと鳴く鳥。ちと明る雨雲。
ほんに日も晩ずる。 ON EST IRES TRISTE.

蟲買つて檜の枝につるす。夜ふけても鳴かぬ蟲馬おひ。

秋雨や、障子をあけて、衰ふるものの明るさ。

ふと湯殿の窓より見つけたるはプラチナいろの瓦なり
けり。秋雨暮れがたすこし明く垣のそとのどよめき。
遠波の如くにも奥歯いたむ。雨息みて落葉あかるく。
と見かう見栗鼠走りゆく。痛かすかにして。

いつの間にか啼かなくなつた。あれほどのこほろぎ。

昭和参年

ふと高窓から見たらば雪かと思つた。この春の寒さだ
から。實は梨の花盛に月のさす光であつた。壁に落ち
た陰のふかぶか。

手水鉢の水がきらめく。外は梨の花盛に月がさえた。
壁のかげの氣の遠くなる深さだ。

さればわたくしは長安の春夜を懷つた。嘗て有つた。
今は無い。かの桔槔の消えてゆく音の如くに。

それは黒い犬であつた。あるかなく動いて行つた。めりめりと月光夜半の荒苑をゆすぶる。

*

手に取る壺は薄黒きさず。見てあればいよいよ鈍し。思ひ煩ひ心つかるる。翁よ。何をほほえむ。われは久しく笑ふことを忘れし。晩春月遅くして門の外に人らくえき。わが室は燈もつかず。わが窓は見はらしもなく。

*

「PONT DES ARIS の上に彼は久しく立ちつくして、セイヌの水の流れまた流るるをながめた。而して再びその道を歩めり。」
でも仕合せだ。眺むべきセイヌがある。立つべき石橋がある。胸に悲哀がある。また牛乳色をした空には曇差として立ち聳く巴璽古都の尖塔がある。
シエワリエ君。僕は毎晩ただ壁を蹈へて天井を眺めてゐる。

窗前初夏

あんな處に黄けまん、あとで好く見てやらう。そのうちに長雨、こんど見れば花は無かつた。

年年に山午、勞裏のひあはひに咲いた。今年もかと、下駄をつつかけ、行き看るに、腕を張り、葉を繁らし、しほらしい花、著けてゐた。

牡丹のあとに芍薬、つつじまた射干、空はれて丸蜂飛ぶ。今朝庭に下り立ち、鬢白く、悲哀有り。

「失敬、泡を吹いて隠れるよ。」「僕の繭ももう済んだよ。」小さい會話も絶えはてて、逢魔が時とぞなりにける。

つと檜の枝に下り飛ぶ鳥、よく看れば雀であつた。

はてな、瓶にさして何になる。此花は折るまい。

紅の苗を植ゑてしまふと、折好くも小雨が來た、どんな花を咲かす積りか、ひよろひよろと細い莖だな。

紙透きて蟻のはふ見ゆ。との面には草明るらし。わが室は障子たてこめ。

六月の雨の日に手をかざす小さき埋火。その手引き難し。古き日の追憶ほどに。

木下杢太郎詩集



昭和五年一月十二日印刷
昭和五年一月十五日發行

初版千二百部

定價四圓八十錢

著者 木下杢太郎

刊行者 長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區一番町五
第一書房

振替東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷者 萩原芳雄
製本者 橋本久吉

萩原朔太郎著	萩原朔太郎詩集	新刊總集特製本 定價六圓
西條八十著	西條八十詩集	新刊總集特製本 定價六圓
茅野蕭々譯	リルケ詩抄	新刊四百頁 定價三圓八十錢
三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百頁 定價四圓五十錢
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	四六判二百頁 普及版 定價一圓
上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百五十頁 定價三圓八十錢
三木露風著	三木露風詩集	四六判七百頁 定價三圓八十錢
室生犀星著	室生犀星詩集	新刊三百五十頁 定價二圓五十錢
木下杢太郎著	木下杢太郎詩集	新刊六百五十頁 定價四圓五十錢
田中冬二著	詩集 青い夜道	新刊和紙二色刷 定價二圓五十錢

野口米次郎譯	ゴンクウルの歌麿	四六倍判七百七十頁 刷六枚一色刷插繪六十 數枚 定價二圓
野口米次郎著	歌麿北齋廣重論	菊判百冊真挿繪冊二枚 定價二圓
野口米次郎著	春信清長寫樂論	菊判百冊真挿繪冊二枚 定價二圓
野口米次郎著	人生詩集	四六判五百頁 定價二圓五十錢
野口米次郎著	抒情詩集	四六判特製一二三四各 冊 定價一圓八十錢
野口米次郎譯	浮世繪譯詩集	近刊
野口米次郎譯	ブラウニング詩集	近刊
野口米次郎譯	ボオ詩集	近刊
山名格藏譯著	日本の浮世繪師	近刊

堀口大學著	堀口大學詩集	新刊 總本特製本 定價 六圓
堀口大學譯	月下の一群	新刊 總本 定價 三圓五十錢
堀口大學譯	アポリネエル詩抄	四六判 英國紙 定價 二圓五十錢
堀口大學譯	コクトオ詩抄	菊判 和紙刷 定價 二圓八十錢
堀口大學譯	グウルモン詩抄	菊判 和紙刷 定價 二圓八十錢
堀口大學譯	ジャム詩抄	菊判 和紙刷 定價 二圓八十錢
堀口大學譯	ヴェルレーヌ詩抄	特製 鍍切 定價 二圓八十錢
堀口大學著	歌集 男ごころ	新刊 總本特製本 定價 一圓五十錢

ジャン・コクトオ著	戯曲 オルフエ	新刊 總本特製本 定價 六圓
ボオル・モオラン著	小説 彼と彼女	新刊 總本 定價 三圓五十錢
堀口大學譯	小説 戀の歐羅巴	四六判 英國紙 定價 二圓五十錢
堀口大學譯	小説 三人女	菊判 和紙刷 定價 二圓八十錢
堀口大學譯	小説 詩人のナフキン	菊判 和紙刷 定價 二圓八十錢
堀口大學譯	小説 古希臘風俗鑑	特製 鍍切 定價 二圓八十錢
矢野目源一譯	戯曲 開かれぬ手紙	新刊 總本 定價 三圓五十錢
鈴木善太郎譯	小説 お互に愛した	新刊 總本 定價 三圓五十錢
鈴木善太郎譯	戯曲 芝居は詠向き	新刊 總本 定價 三圓五十錢
鈴木善太郎譯	短篇 悲しき女王	新刊 總本 定價 三圓五十錢
松村みね子譯	短篇 悲しき女王	新刊 總本 定價 三圓五十錢

アナトール・フランス
草野貞之譯
エビキユルの園
近刊
新刊 總本
定價 三圓五十錢

松岡讓著	隨筆日中出現	四六判二百八十頁 定價一圓八十錢
松岡讓著	小説憂鬱な愛人	上製新菊判二圓八十錢 並製四六判二圓五十錢
松岡讓著	小説田園の英雄	四六判四百頁 定價二圓
松岡讓著	小説法城を護る人々	四六判上中下三冊 普及版定價各冊壹圓
岸田國士著	戯曲牛山ホテル	新菊判二百九十頁 定價一圓八十錢
岸田國士著	戯曲落葉日記	新菊判二百九十頁 定價一圓八十錢
岸田國士著	戯曲屋上庭園	四六判二百八十頁 定價一圓八十錢
岸田國士著	戯曲チロルの秋	四六判二百七十頁 定價一圓五十錢
柴田天馬譯	小説聊齋志異	菊判四百頁 定價三圓

土田杏村著	文學論	菊判二百二十頁 定價一圓
土田杏村著	現代哲學概論	菊判二百四十頁 定價一圓五十錢
土田杏村著	日本支那現代思想研究	菊判二百五十頁 定價一圓五十錢
土田杏村著	國文學の哲學的研究第一卷	菊判三百六十頁 定價二圓五十錢
土田杏村著	國文學の哲學的研究第二卷	菊判三百九十頁 定價二圓五十錢
土田杏村著	國文學の哲學的研究第三卷	菊判五百八十頁 定價三圓
土田杏村著	戀愛論	四六判四百頁 普及版定價一圓
土田杏村著	隨筆集 草煙心境	四六判四百頁 定價一圓八十錢
得能文著	現今の哲學問題	菊判二百五十頁 定價一圓八十錢
得能文著	隨筆集 淺人零語	四六判五百六十頁 定價二圓五十錢
得能文著	哲學概論	近刊
金田廉譯	フイードレル藝術論	菊判三百四十頁 定價二圓五十錢
外山卯三郎著	詩學概論	菊判二百五十頁 定價二圓
辰野隆著	ボオドレエル研究	菊判二百四十頁 定價二圓五十錢

